ルイハシのよろい

げんじあきら

目次

○『ルイハシ研究所と船渡二郎』

○土肥雨霧

○麻野すみの反撃

○仁美の実家跡

○丸石半二郎も動いた

○麻野すみの告白

○銀座に本社のある大手の化粧品会社
リンメイのピンチ

○下関の長府に出向いて

○長府の写真がメールされた

○霧島と橋本と麻野と風間と写真

○リンメイがいなくなった

○架空のリンメイ暴露記事

○留内有子の交通事故

○留内の記憶喪失

○品川ナンバーの車

○黒のサングラスの男

○黒のサングラスの男がいなくなった

○ルイハシ研究所の取材

○念書

ルイハシのよろい

〇リンメイ暴露記事を消す

〇ルイハシ研究所のコマーシャル

〇リンメイがプロの編集スタッフに

〇留内の復帰

〇土井雨霧と料亭で

〇最優秀化粧品賞を受賞して

〇船渡二郎の福岡の自宅

〇先里幹夫『よろい』

〇『詐欺の論理』をものにする

〇ルイハシ明洞
崩壊

〇誘拐

〇リンメイの告白

〇黒メガネの男が来た

〇留内有子の交通事故

〇年間最優秀企業

〇危機一髪

〇リンメイの告白は録音された

〇壊れるよろい

〇麻野すみの交通事故

〇黒メガネの男との戦い

〇土肥雨霧の逮捕

〇ルイハシ研究所のよろい

〇先里幹夫からの手紙

特許侵害

○創業15年

「社長に会いたいと言われて、この方が見えています」
船渡二郎は、創業15年のお祝いの会のあいさつを終わったところだった。これから、カンパイがはじまる。まだ社員が２００名だが、みんな楽しみにしている。福岡のホテルである。
２０１０年８月12日だった。暑い日だが、創業記念日である。５年前の創業10年の時から、創業記念式典をやっている。
雑誌の取材だった。
「創業15年のお祝いをやってますので、どうぞ」
船渡二郎は、創業15年の祝いに、マスコミ関係にも、案内を出していなかった。まだ誰も見向きをしてくれない。
「損害賠償を請求されている件です」
船渡は、一瞬、何を言われているのかわからなかった。
「今日はおめでたいので、日を改めて来ていただきたいのですが」
船渡は、丁重に、お引き取りを願った。
仁美夢太郎は、不思議に思ってはいた。ルイハシ研究所の本社に伺ったら、全員このホテルだと守衛が言うので、ここにやってきた。創業15年のお祝いをやっているとは知らなかった。
仁美には、そういうことはどうでもよかった。
「ルイハシ研究所が特許侵害でクレームを出されているそうだが、無視しているのはどういう意味があるのか調べてください」
仁美には、そういう高級な話題はどうでもよかった。お金にもならない。仁美は、半分固定給半分歩合給である。読者が読んでくれなければ、一緒に住んでいる中国からの留学生の、リンメイにバカにされる。
仁美には筆の自信があった。わざわざ固定給から半分歩合に変わった。将来は、文筆家として一流になりたいと思っている。
このような特許侵害などの記事は、読み手がつかない。それでも固定給がつ

いている。編集長の依頼を断れない。次号で、どんなに小さくてもよいので記事にしろとの指示だった。１週間しかない。
「反響があったら追え」
いつものパターンだ。
仁美は、早く終えてしまいたかった。他にも、密輸事件など追いかけたいことがあった。

８月13日お盆である。
仁美の仕事に、お盆などない。リンメイは、学校に行くと言って出かけた。本当かどうかはわからない。夏休みである。
ルイハシ研究所は、ビルの３階にあったが、３階ゼンブにシャッターが閉まっている。仁美は、通信販売を装って、電話をした。
「化粧品を買いたいのですが、責任者の方はいますか」
だいたい、それなりの人が出てくる。
「特許侵害の損害賠償のことなんだけど」
責任者は、はじめて耳にしたという返事だった。べつに、断るように指示されてもいないようだ。これはなにかおかしい。仁美のカンである。なにかがおかしい。
仁美は編集長の友田義男に電話をした。
「損害賠償を請求した会社も取材しようと思うのですが、教えてください」
仁美は、留守電で友田に伝えた。
夕方、記者仲間の留内有子と晩ごはんを食べた。リンメイが、ごはんしてくると電話してきたからだ。どこでだれと晩ごはんを食べるのかわからない。留内は仁美が呼び出した。
留内有子は、とびきり大きなピザを食べながらワインを飲んでいた。仁美に、晩ごはん分の情報を渡せるかどうかわからなかった。話を聞いただけでは、思い当たることがない。
「わたし、このピザ分の情報もあげられないかもしれん」
仁美も、リンメイが、晩ごはんを食べて来ると言ったから留内を呼び出した。どうしても、留内からの情報が欲しいわけではない。ただ、時間がない。どんなに小さくてもよいから、記事にしないと、お金にならない。

留内有子は、ピザのおいしさに酔ったのか、仲間に電話してくると言って出て行った。20分も帰ってこなかった。仁美は、じっと待っていた。
留内有子が話したことは、驚くべき内容だった。
「情報源は言えないけど、その、ルイハシブランドが狙われてる。登り竜のようなルイハシブランド、みんなが欲しがってる」
「特許侵害の損害賠償とどういう関係があるんだ？」
「あの社長、何も知らないんじゃないの？」
「どういう意味だ？」
「社内におかしいのがいるってこと」
「ルイハシ研究所か？」
「うん」
仁美は、このおいしいピザに感謝しなければならないと思った。

○風間平助
８月14日、仁美は、リンメイの声で目が覚めた。
「朝ごはんつくったけど」
昨日は１時まで待っていたがリンメイは帰ってこなかった。慌ててケータイを見た。１時30分に、リンメイからのケータイがあった。多分、車で迎えに来てくれである。
「ゴメン、眠ってしまった」
「平気〜タクシーで帰った」
まだ８時である。
「わたしまた学校へ行く」
仁美は、リンメイの好きなようにしている。マンション代も食費も、すべて仁美が出している。食事は、仁美がつくることが多い。リンメイは、気が向いたら中華をつくる。リンメイは自由である。学費と遊ぶお金を、どこから出しているのか、仁美は聞いていない。お金が足りなかったら言ってくれにしてあるが、まだ１度もない。もう７カ月になる。リンメイは中国美人だ。

リンメイが出かけて、仁美は、原稿を書こうと思った。

しかし、書くことが何もない。裏がとれないからだ。友田に電話してみたが、連絡がつかない。仕方なく、ルイハシ研究所に電話してみた。
「通信販売だけ営業させていただいております」
お盆である。休みだ。
留内有子の情報源に近づく以外にないかもしれないと思った。仁美は、やっかいなことを背負ったような気がした。まったくお金にならない。読者も興味はない。それなのに、絡まった糸のようになっているのではないかと思った。
いきなり友田から電話があった。
「仁美さんに取材してほしかったのは、どうしてルイハシ研究所が、特許侵害のクレームを無視するのかということです」
それは聞いている。
「問題はそういうことではないかもしれない」
友田は、ルイハシ研究所の損害賠償請求無視の記事でなければ掲載しないと言った。
仁美には、最初から、この問題はおかしいと思っていた。編集長の友田の指示もおかしい。誰が損害賠償をしたのか。訴えたのか。取材をしなければどうにもならない。
友田は、それだけ言うと、電話を切ってしまった。
仁美は、仕方なく、特許事務所へ電話をした。特許事務所もお盆だろうか。そういう問題には答えられないと言われた。あたりまえである。
もう友田編集長には、ギブアップをしようと思った。ムリだ。そして、仁美が別に追いかけて記事にしている、詐欺事件の情報収集に出かけた。警察署である。

警察署で、思わぬ人と会った。弁護士だった。風間平助である。57歳くらいだろうか。ベテランであるが、お金にならない仕事をする。いつも、汚れたスーツを着ている。お昼を一緒に食べた。仁美が誘う。近くの定食屋で刺身定食か、サバの味噌煮定食を食べる。たいした情報をもらえるとは思っていない。
帰り際に、一応聞いてみた。

「特許の損害賠償は弁護士が絡むのですか？」
「弁護士が絡まないで、どうやって文をつくるんだ？」
「ルイハシ研究所の特許侵害の損害賠償のことで何か知りませんか？」
仁美は、刺身定食とサバの味噌煮定食のお金を払いながら聞いた。
「あれはオレが書いた」
一瞬、仁美は計算間違いをすると思った。キチンと計算をしなおして、お代を払った。
風間平助は、忙しいと言ったが、ムリに、缶コーヒーを買って、公園のベンチに向かった。
「10分しかない」
その損害賠償請求は誰から依頼されたものですか？と聞いても話せるわけがない。
「返事がないそうですけど」
返事は、風間のところへ来るはずである。
話したくないという風間の態度だった。
「それより、どうして知っているのですか？」
風間に聞かれた。
「編集長の友田に、損害賠償請求されたのに返事をしないルイハシ研究所という記事を書くように指示されているんです」
風間平助は、黙ってしまった。
仁美は29歳である。若いが、経験がたくさんある。このような時には、ムリをしないことだ。ラッキーだったのだ。公園を出てすぐにあるおかしのお店で、長崎のカステラを買った。風間平助は、これを、朝ごはんにしている。

○ルイハシ研究所の東京進出
仁美は、翌日８月15日の新聞を見て驚いた。地方紙である。経済欄に、ルイハシ研究所が東京進出とあった。社長の船戸二郎の談話が載っていた。
「銀座に小さいがお店を持つことができるので、本社も東京に移すことにしました。生産は、福岡に残りますので、福岡の会社であることには、変りはありません」

ルイハシ研究所に電話しても、誰も出ない。しかし、船渡の談話が出ている。こういうケースは、独占取材が出来上がっているのだ。船渡が自宅からでも情報発信できる。
リンメイはまだ寝ている。今日は学校がないのだろうか。パンを探してハムと卵を探した。コーヒーはエクアドルと決めてある。独特の少し酸っぱい匂いがする。
「わたしも」
ベッドからリンメイが甘い声を出した。
そのつもりでつくっている。リンメイは、シャワーへ向かった。リンメイは、１日何度シャワーを浴びるのだろう。タオルの洗濯がタイヘンである。洗濯も、毎日、仁美がやっている。やっているといっても、スイッチを押すだけだが。
「ルイハシ研究所を取材してて、東京進出を探れなかったのか」
編集長の友田から、怒ったような電話があった。
弁護士の風間の情報は、まだ友田には知らせたくなかった。
「記事は書けるのか、明日中に連絡してください」
仁美は、多分書けないだろうと思っているが、曖昧な返事をした。
仁美は、けっこう料理が得意である。今日も、ピザ生地でパンを焼いた。ウインナーパンである。塩味のパンでもある。卵もハムもおいしいし、キュウリとレタスに、ラッキョウのつゆのドレッシングもおいしい。リンメイは、ラッキョウを食べない。味ぽんをサラダのつゆにする。
リンメイは、昨日の夜も遅かった。迎えに来いとは言わなかった。だいたい、わかりやすいところに、ピッタリ来てくれと言う。５分も待っていると、オトコ達がウルサイ。それほど美人である。カフェで待つことも多い。車から電話をするとリンメイが出てくる。０時を過ぎていることが多い。この時間まで遊んでいるのだろうか。仁美は、あまり詮索はしない。
「今日はここにいるから」
リンメイは、仁美に言っているのか、独り言を言っているのかわからない。
今年の正月が明けて、寒い夜だった。賑わいもなくなって、福岡の繁華街も、静かになっていた。仁美は、取材をしていた。詐欺犯のオンナを追っていた。同時に２人の女性がドアから出てきて、仁美は戸惑った。美人であっ

たリンメイの後を追った。これは間違いだと、すぐに気がついたが、どういうわけだか、そのままリンメイを追った。彼女は、質素な身なりをして怯えていた。仁美は、声をかけた。更に怯えたように感じた。彼女は行くところがないと言った。それ以来、リンメイは、仁美のマンションにいる。２日後、大きなスーツケースを持ってきた。
仁美は、リンメイの詳しいことは何も聞いていない。もう７カ月になる。どうして行くところがないままだったのか、ホントに留学生なのかも、聞いていない。ケータイも、覗いたことがない。住所変更はしたのだろう。郵便物が届くようになった。
リンメイも、仁美が何をしているのか、何も聞かない。時々、狂ったように仁美を抱く。

「記事を書くのかどうか、明日までに連絡をください」
あては何もなかったが、ここにいても、情報は入らない。仁美は、留内を呼び出した。お昼を食べることにした。
「ルイハシ研究所の裏切り者の話が引っかかってるんだけど」
留内は、白ワインを頼んでいいかと聞いた。ボトルだった。冷たい地中海風魚料理だった。
留内は、料理がくるまで、電話をしてくると出てしまった。この件は、留内情報ではないのだろう。誰か、他の情報源がいる。
「10万くらい現金で持ってる？」
お昼と10万円である。10万円の封筒は、いつも用意している。急場が多い。手慣れている。
「同じの頼んでいい？」
留内は、もうすぐ来るのだろうか、同じ料理をオーダーした。
５分もかからなかった。
驚いたことに、リンメイが現れた。出る時は、すっぴんだったのに、メイクしていた。仁美とリンメイは、握手もしなかった。
「元だけど船渡二郎の秘書だった」
もう７か月も一緒に暮らしている。そのリンメイの知らない部分を、留内に聞かされるとは思わなかった。

リンメイは、運ばれてきた料理を食べはじめた。日本語が、たどたどしい。冷たいワインをおいしそうに飲んでいた。
「ルイハシ研究所の裏切り者は、この人ですか？」
船渡二郎の義理の弟の吾川俊之だと、リンメイは言った。誰も知らないが、船渡二郎から、リンメイ自身も奪われそうになった。ルイハシ研究所も奪いたがっている。協力してくれと言われたと言った。
留内は、これは記事にしないように、仁美に言った。リンメイが危なくなる。
「留内さんとどこで繋がったのですか？」
「わたしリンメイの教師」
驚いたことに、留内は、私立大学の講師だった。食べられないから、記者もしている。本名を、知床敏子と言った。はじめて聞いた。
リンメイは、「今年の１月の寒い夜に、船渡二郎のマンションから逃げた」と言った。
それにしては、あの寒い夜、リンメイは質素だった。

仁美は、リンメイに10万円の封筒を渡して、先に外へ出た。リンメイと留内は、こうやって２人で話しているだろう。２人でいると落ち着くのだろう。しかし、なぜ、リンメイは、留内に、仁美のことを話していないのだろう。いろいろ考えてしまう。
「今月の締め切りは、詐欺事件だけにしてください」
「ルイハシ研究所は諦めるのか」
「まだ記事にできない」
何か。おかしなことに巻き込まれそうな予感がした。ルイハシ研究所の件は、根が深そうだ。
その夜、リンメイから電話があった。迎えに来てくれである。繁華街のカフェである。お酒の匂いがした。
お互いに、黙っていた。
「私だと知っていたのか」
「知らない。驚いた」
秘密を握っているようだが、中国に帰った方がいいのではないか、仁美は聞

いた。
「卒業したら帰る」
まだ２年目の夏だ。ながい。仁美は、リンメイを守りたがっている自分を感じていた。

〇麻野すみ
８月16日まだ朝だった。リンメイは学校へ出かけた。留内の話からも、リンメイが学校に行っていることは間違いなさそうである。朝ごはんを食べていない。リンメイは、朝ごはんを自分でつくらない。朝ごはんよりも、シャワーをしてスキンケアーをしてメイクをする時間が大切そうである。時間がないから朝ごはんを食べない。仁美が朝ごはんをつくった時だけ食べる。もう７か月も変らない。
誰かわからない人からの電話だった。
「ルイハシ研究所のことを調べてるそうだけど」
時々、こういう電話がある。パソコンのメールにも、同じような、わけのわからない連絡がある。名前を名乗らない。
「何か用事ですか？」
「情報を買って欲しい」
お昼を一緒に食べることにした。10万円の封筒になるかどうかは、話し次第である。
「霧島芳郎です。名刺は持ちません」
44歳だと言った。
ギョーザライスにビールである。
「誰から私の話を聞いたのですか？」
「話せない」
「買って欲しい情報とは何ですか？」
ルイハシ研究所の株の売買契約書のコピーだった。１２００円で10万株を売却することになっていた。船渡二郎と麻野すみのサインがあった。１２００円は、非上場の会社だから、誰かに鑑定してもらったのだろう。10万株が、全株式の何％にあたるのかは、わからない。驚いたことに、契約日が８月12

日だった。ルイハシ研究所の創業15周年の記念式典をやっていた日だ。
「本物ですか？」
「今は金になるけど、発表されたらタダになる」
夕方、またここで会う約束をして、仁美は、公園へ出た。ものすごく暑い。
麻野すみの電話を探した。もちろん、電話など、オープンしていない。
事務所へ電話をした。
「ルイハシ研究所のことで麻野すみさんに聞きたいことがある」
意外なことに、本人が出た。
「ルイハシ研究所の株を買ったと聞きましたけど」
「買う契約をしました」
「10万株は何％になるのですか？」
「10％です」
「福岡の雑誌で記事になると思うけど」
「麻野すみの名前は出さないでください」
「ある東京の美容関係の事業者でいいですか？」
「ええ」
仁美は、すぐにカフェに入って、パソコンを取り出した。一気に、記事を書いて、友田に送信した。
「こういう記事を書いてくれと言ったわけではない。特許侵害のクレームに、なぜ返事をしないかだ」
仁美は、仕方なく、記事の追加をした。
特許侵害のうわさもあって、ルイハシ研究所から目が離せなくなった。
ルイハシ研究所は、東京進出を発表していた。ルイハシ研究所関連情報は、お金になった。友田は、締め切りギリギリで受けてくれた。これを記事にしてくれないと取材費用が出ない。

仁美は、リンメイに電話をして、晩ごはんを食べてくるように言った。そして、霧島芳郎の待っている中華のお店に向かった。10万円の封筒を確かめた。仁美は、ケチケチしない主義である。自分だけでは、情報は集まらない。
少し距離があるが、歩けないことはない。仁美は、マンションまで歩いて帰

ることにした。ものすごく暑い。歩きながら、考えなければならないと思っていることがあった。
麻野すみは、なぜ仁美の電話に出てきたのだろう。雑誌に掲載されることを知っている。フツウは、門前払いである。仁美は、霧島情報の裏をとるつもりだった。期待はしていなかった。ところが、意外だった。本人が出た。
麻野すみにとって、有利なことがあるからだが、それが何かわからない。記事になって、どういうメリットがあるのだろう。雑誌は８月20日にはは出る。仁美の記事は、詐欺事件とルイハシ研究所の２本である。

〇銀座のルイハシ研究所のお店へ
８月17日だった。仁美は、トイレで目が覚めた。リンメイはすっぴんでもキレイだと思う。それなのに、なぜメイクをするのかわからない。まだ20歳だ。この20歳のリンメイが、なぜ船渡二郎のオンナだったのか、よくわからない。若いのに苦労をしている。
思い出していた。ルイハシ研究所の銀座店が、今日オープンする。東京に本社を移したが、どこだろう。ネットで調べてみた。
銀座店の上に本社があるらしい。物流センターが、錦糸町になっていた。
思い立って、見てこようと思った。髭をあたっていた。リンメイが呼んだ。
「出かけるの？」
「銀座へ行ってくる」
「わたしも行く」
銀座で、社長の船渡二郎とハチ合わせをしたら困る。
仁美は、リンメイに、アラブ人のような服装をさせた。顔を隠した。これはこれで不思議な魅力があった。この服は、６月の暑い日に、バーゲン会場で、おもしろ半分に買った。目だけメイクして、どこから見ても、リンメイとは、誰も気がつかない。
なぜこんな服装なのか聞くリンメイを急がせた。

銀座は暑かった。リンメイは、福岡の空港の駐車場から、ずっと、みんなの視線を集めていた。着ているものは、ゼンブで、１万円に満たない。それな

のに、リンメイには、オーラがあった。一緒にいる仁美も怯んでしまうほどのオーラがあった。カメラを向けられた。２人が写真に撮られても、なんということもない。リンメイは、特に、だれだかわからない。
ルイハシ研究所の銀座のお店に入っても、それは変らなかった。みんな一斉にリンメイを見た。仁美を見た。ルイハシ研究所の化粧品は、高級化粧品である。通信販売と直営店でしか売っていない。直営店といっても、銀座店がはじめてである。以前は、レストランだったのだろうか、１階から３階までがルイハシ研究所であるらしい。１階と２階がお店である。
リンメイは、やっと、なぜ自分がこのような服装をしているのか、理解ができた。船渡二郎がいるかもしれないのだ。
階段で２階に上がった時、向こうの隅で、社長の船渡二郎がお客さんに説明をしていた。周りは、一斉にリンメイを見た。船渡も、チラッと視線を向けた。しかし、大事なお客さんなのだろう。説明をはじめた。仁美は、ゆっくりと、船渡二郎に向かった。お店の店員も、リンメイには、化粧品を説明しない。どうすればいいのかわからないのだろう。
船渡二郎は、３人の和装の上品な女性に説明をしていた。横に行ってみると、おばさんだった。仁美は、船渡二郎に軽く会釈した。顔を合わせている。８月12日の創業15周年の式典に、顔を合わせている。覚えていないかもしれない。リンメイは、化粧品を見ていた。
船渡と３人の女性は、一瞬、リンメイを、上から下まで見た。リンメイのオーラには、誰も敵わない。
仁美は、そのまま通り過ぎて、３階の階段まで来た。
多分、麻野すみだと思った。なぜ、麻野すみがいながら、表に出さないのだろう。10％の株を買ってもらっているし、ルイハシブランドよりも、麻野すみブランドの方が、有名である。
麻野すみらしい女性は、じっとリンメイを見ていた。仁美を見てはいなかった。

羽田空港のお弁当のお店で、リンメイは、さつま揚げ弁当が食べたいと言った。ビールも飲みたい。おかしな雰囲気である。アラブのお姫さまが、さつま揚げ弁当を、上手に食べるのである。

リンメイは、仁美が、なにをしようとしているのか説明してくれと言った。リスクを冒してまでも、銀座のルイハシ研究所に行ったのだ。仁美は、リンメイと船渡二郎の関係を知っている。
「ルイハシ研究所が、特許侵害をしているそうなんだけど、特許侵害だとクレームをしたのに、何も返事がないので、取材してくれと依頼された」
「それだけで、なんで銀座まで行くの？」
「リンメイがルイハシ研究所に関係してたからだ」
「それはもう過去のことで意味がない」
はっきり言って、仁美にも、リンメイが言うように、なぜルイハシ研究所の問題に深入りするのか、よく説明できない。自分に説明できない。
「まだ続けるの？」
「20日発売の雑誌の記事になってるから、反響次第では、続けることになると思う」
仁美は、リンメイと、深く話し込んだことがない。まだ、依然として、行くところがないから仁美のマンションに転がり込んだという感覚なのだ。それは、リンメイも仁美も同じである。ただ、一緒に住んでてオトコとオンナである。

○福岡から世界に

８月18日だった。
「詐欺の記事を取り下げろというクレームだけど」
友田が朝早くに電話してきた。
「誰ですか？」
「公衆電話から」
「先月の予告で気になってるんだと思う」
こんなことで電話をしてくる友田が気に入らなかった。朝で機嫌も良くない。
「ところで、特許侵害はどうなってるんだ」
「まだ掴んでいません」
「銀座まで行って何もないのか」

「ええ」
仁美は、慌てて電話を切って考えた。どうして友田が知っているのだろう。なぜ、仁美が銀座に行ったことを知っているのだろう。多分、リンメイのことも知られている。考えなければならない。
仁美は、友田に電話をした。
「どうして私が銀座に行ったことを知っているんですか？」
「情報提供者がいた」
だれだか答えるわけがない。
なんだかおかしなことになっている。どんどん深みにはまっている。
８時になって、仁美はベッドから降りた。リンメイは、今日はどうするのだろう。さすがに昨日は疲れただろう。
エクアドルのコーヒーが飲みたい。
ピザ生地を取り出して、ウインナーを刺して、一緒に焼いた。簡単にできる。ついでに卵とハムをフライパンで焼く。アッという間に出来上がる。
リンメイは、匂いに敏感である。仁美が朝ごはんをつくっていると、必ずシャワーに行く。絶妙な時間にシャワーから出て、イスに座ってコーヒーを飲む。ヤケドしそうな熱いパンをちぎって食べる。
「わたしこのごはん食べたいからここにずっといる」
いつも、１回は、こう言う。
いきなりリンメイのケータイが鳴って、中国語で話しはじめる。ものすごい早口である。中国人は、時間が足りないのかと思う。しかも、ずっと話している。仁美は、新聞を隅から読みはじめる。リンメイが何を話しているのか、さっぱりわからない。

福岡地方欄の隅に、福岡から世界にという記事があった。ルイハシ研究所の記事だった。
仁美は、慌ててパソコンを開いた。ルイハシ研究所は、薬草化粧品の特許をたくさん抱えていると記されてあった。特許番号が列挙されていた。小さな記事だ。もしかして、福岡から世界に飛び出すかもしれない。それは、特許に支えられてるからだという記事である。
仁美は、以前に教わったことがある。近年は、特許庁が、公開しているらし

い。
リンメイは、まだ何やら早口で電話している。食べながらしゃべっている。
仁美は、驚いた。発明者が、すべて、船渡二郎だった。これはどういうわけだろう。こんなにたくさんの特許があって、どうして他人の特許を侵害するようなことをしなければならないのだろうか。仁美は、特許番号をすべてメモした。新聞も切り抜いた。
仁美は、着替えて、外に出た。そして、通りまで出て、風間に電話した。
「ルイハシ研究所に送った損害賠償請求文は、特許番号何番なのか教えてくれないか。天神のうなぎ屋で６時に待っている」
風間は、返事をしなかった。
「よろしくお願いします」
仁美が部屋に帰ると、リンメイは、もうメイクをしていた。
「出かけるんだ」
「中国の留学生３人でプールに行くと言った」
先週、ビキニを買ってきていた。かわいいか見てくれと言った。リンメイは、質素な身なりをしていると何でもなくフツウだが、昨日のような、アラブの女性になったり、ビキニの水着を着たりすると、いきなりオーラが現れる。うれしそうにしているリンメイを見て、うれしそうなオトコがたくさんいるだろうと思った。リンメイは、自分でよくわかっていない。

風間が来るかどうかわからなかった。仕切ってあるイス席で、ビールと豆腐を食べていた。来なかったら、１人でうなぎを食べて帰ろうと思った。リンメイは何も言わなかったが、当然、晩ごはんは、どこかで食べてくるだろう。
10分遅れて、風間がやってきた。
「忙しいのに呼び出してすみません」
「私は高いことを知っているんですよね」
「わかってるつもりです」
仁美は、10万円の封筒を、先に差し出した。風間は、素早く内ポケットに滑り込ませた。焼酎のお湯割りにしてくれと言った。
「この番号だ」

風間は、特許番号をメモしている紙を、仁美に渡した。仁美は、その番号が、ルイハシ研究所の持っている特許の、どの番号でもないことがわかった。
「これ１つですか？」
「そうだ」
それだけ言うと、うなぎを頼んでくれと言って、急いでうなぎを食べた。
「この程度の依頼は、受けることにしました」
風間は、急いで、店から出て行った。

タクシーで急いで帰ってきた。
リンメイはまだ帰っていなかった。９時になっていない。パソコンを開いて、特許番号を調べた。
大阪に本社のある、化粧品の会社が持っている特許だった。仁美には、詳しいことがわからない。この特許に抵触しているからと、風間は、大阪の化粧品会社に頼まれて、損害賠償請求の文書を書いて、送った。そして、その特許の番号を、仁美に知らせてくれた。一般的に、どういう文書になるのか調べてみた。特許に抵触するので、回収してくれである。それか、特許使用料の交渉に応じてくれである。このどちらにも、返事をしていないことになる。損害賠償請求の文書だから、要求に応じない場合は、損害賠償を請求するというものだろう。
風間に、どうするか聞けばいいのだが、また取材費用がかかる。それにしても、友田は、どうしてこれを追うように、自分に言ったのだろう。わからないことが多過ぎる。

○霧島芳郎
８月20日だった。友田が編集長をしている雑誌が発売された。福岡の雑誌である。それでも５万部くらいは出ている。仁美は、カフェでお昼を食べながら、雑誌を読んでいた。仁美の記事は、継続している詐欺事件と、ルイハシ研究所に関する記事である。
ケータイだった。だれだかわからない。

ルイハシ研究所のものだと言った。東京の電話である。銀座の本社からだろう。
「まだルイハシ研究所として決めたことではないのに、あたかも決まったかのような記事は困る」
仁美は、意外だった。霧島芳郎がくれた契約書のコピーがある。麻野すみにも確認をとった。
「船渡二郎と麻野すみのサインがしてありましたけど」
「とにかく、ルイハシ研究所は決定していないのでお知らせしておきます」
これはなんだろう。麻野すみが、仁美の取材に応じた理由がわかるような気がしてきた。契約をしたのに、その後に、麻野すみの意向に沿わない状況ができてしまったのだろう。しかし、銀座のお店のオープンには、麻野すみがいた。どうなっているのだろう。
ただ、抗議の電話ではなかった。記事が真実ではないことをお知らせしますである。ルイハシ研究所と麻野すみの間に、何かあるのだ。それは間違いない。
それにしても、特許侵害のことには、何も触れなかった。どうしてだろう。
霧島芳郎から電話があった。
「６時に、この前の中華のお店で待っていて欲しいのですが」
「なんですか？」
「情報です」
ルイハシ研究所に関する情報であることは間違いない。

仁美は、キレイではない中華のお店から、リンメイに電話をした。リンメイは、家に帰って自分で中華をつくると言った。この暑いのに、どこにいるのだろう。
霧島芳郎は、先に来て待っていた。
「ビールをいただいています」
仁美は、霧島が何者であるか、少しは知らないといけないのではないかと思っている。
シューマイを頼んでつまみにした。
霧島は、またコピーを仁美に渡した。

ルイハシ研究所の取締役会の議事録のコピーだった。ルイハシ研究所の株の所有者の確認だった。未公開株である。日付は８月17日である。３日前だ。しかも、ルイハシ研究所の銀座のお店のオープンの日である。本社移転の日でもある。株式は、全株、船渡二郎が所有していることになっている。
「８月12日の麻野すみさんとの売買契約はどうなっているのですか？」
「麻野すみさんは吾川さんのオンナです」
「吾川さんは、船渡二郎の義理の弟です」
仁美は、驚いてしまった。少しは、理解できてきている。10万株は、船渡から吾川に渡るはずだったのだ。
「船渡さんが気がついたのですか？」
「そうだ」
簡単に言ってしまう霧島がわからない。
「どうして８月17日の議事録がここにあるのですか？」
「取材費です」
仁美は、10万円の封筒を出して、霧島に渡した。ルイハシ研究所はどうなっているのだろうと思った。３日前の取締役会の議事録のコピーが目の前にあるのだ。その情報がお金になることを知っている人がいる。仁美のことも知っている。
霧島芳郎も、用事を済ませると、ギョーザライスラーメンを食べると、さっさと出て行く。一緒にいると、お金にならないのに、情報を引っ張り出されたりすることをよく知っている。それに、見られたくはない。
仁美は、トイレに行った時に精算を済ませていた。
霧島芳郎の後を追った。通りを２本通り抜けて、タクシー乗り場に向かった。仁美は、横から急に出てきたタクシーを止めた。もし霧島がタクシーに乗らなければ、このままマンションに帰ろうと思った。
霧島は、タクシーに乗った。
「すみません、前のタクシー追ってください」
運転手は、返事もせずに、霧島の乗っているタクシーを追いかけた。不思議なことに、福岡空港に向かっている。そして、そのままチェックインをしている。出発８分前の羽田行きに乗るようだ。
仁美は考えてしまった。今日、霧島芳郎から電話があったのは、東京からだ

ろうか。そして、仁美に会って情報を渡して、そして東京へ帰っているのだろうか。それとも、今日東京に用事があったのだろうか。霧島芳郎は本名なのか、東京の人間なのか福岡の人間なのか。ますますわからなくなってきた。

「おかえりなさい」
リンメイは、ごはんを炊いて酢豚をやったようだ。匂いでわかる。
「残さなかったけど」
「食べてきました」
おかしなことに、リンメイも、このルイハシ研究所に係っている。過去になっているのかもしれない。リンメイは、仁美がどこに行っていたのか、聞いたことがない。仁美も同じである。
リンメイは、高杉晋作を電子書籍で読んでいた。この前から気がついている。高杉晋作のことを書いてある書籍などは、日本語が難しい。リンメイにわかるのだろうかと思う。
「高杉晋作に興味があるのか」
「香港になっていたかもしれない彦島を拒否した」
仁美は、リンメイが何を言っているのか、わからない。
「研究テーマなのか」
「そう」
高杉晋作などを研究テーマにして、何をしたいのだろう。学生だから、いいのかもしれない。中国に帰って役立つとは思えないが。

〇霧島芳郎の正体

８月21日土曜だった。仁美には、土曜も日曜もない。まだ寝ているリンメイを残して、詐欺事件の取材に出た。シャワーも浴びる時間がなかった。被害にあった３名と、順番に会うことになっている。この詐欺事件の仁美の記事は、連続ものになっている。今月の締め切りで予定しているのは、この３名の被害者の実例記事だ。詳しく書いた方が評判がよい。
14時には、３名すべての取材が終わった。

お礼の封筒を渡して、ホッとしていた。海に近い繁華街のカフェである。暑いが、外にいた。友田から電話である。
「ルイハシ研究所の特許侵害はどうなっているんだ」
「まだよくわからない」
「今月も同じスペースを空けるから」
それだけ言って友田は電話を切った。ルイハシ研究所のことは、福岡から東京進出を果たしたばかりであり、成功物語をテレビなどでやっている。ルイハシ研究所ものは、受けがよい。ルイハシ研究所の特許侵害について書けと言うのは、どういうわけだろうか。友田もわかりずらい。
30メートル先を、リンメイが歩いている。リンメイは、座っている仁美に気がつかない。オトコと一緒である。楽しそうに、何か話している。オトコは学生っぽくて真面目そうだった。
嫉妬するでもなく、無関係のオンナを見るでもなく、家族を見ているのでもない自分が不思議だった。
楽しそうな２人の後から、霧島芳郎が、歩いていた。明らかに、２人を追っている。霧島芳郎は、昨日の夜、羽田行きに乗った。間違いない。どうしてここにいるのだろう。しかも、リンメイを追っている。当然のことながら、リンメイと自分のことも知っているだろう。マンションだって知っているだろう。
「霧島さん」
仁美は、リンメイたちに聞こえないように、霧島に聞こえる声で、霧島を呼んだ。
霧島芳郎は、振り返らずに足を止めた。もう仁美だとわかっている。
「どうぞこちらへ」
霧島は、仕方なく、仁美のテーブルに座った。
「リンメイを追っているんだ」
「仁美さんは何が望みですか？」
霧島は、おかしなことを聞いてきた。
「わざわざいわくのあるリンメイを引き取って、何をしようとしているのですか？」
驚いてはいけない。こういう時は、落ち着かないといけない。本当は、すべ

てが偶然なのだ。仁美がリンメイをマンションに入れたのも、リンメイがルイハシ研究所の社長の船渡二郎のオンナであったことも、すべては偶然であった。そして、仁美が、ルイハシ研究所を記事にしているのも偶然である。
「リンメイのことを記事にするのか」
やっと少しわかってきた。船渡二郎は、仁美が恐いのだ。リンメイを抱えているからだ。暴露記事を書かれるのが恐い。夜がどうだったのか、そのような記事が恐い。最初から、リンメイは金になると睨んでいた。そう思っている。
「霧島さんは、船渡二郎に雇われているのですか？」
「麻野すみへの株の売買契約書など、あなたに渡さない」
「誰に雇われて、私やリンメイをウオッチしているのですか？」
「暴露記事を書いてくれたら１千万払います」
「吾川俊之に雇われているのでもありません」
「仁美さんが、リンメイを説得して暴露記事を書けば、私の依頼人は、喜ぶでしょう。仁美さんの将来も約束されることになります」
これはタイヘンなことになったと思った。
ルイハシ研究所を狙っている別のグループがいるのだ、霧島芳郎は、そのグループに雇われている。ずっと、東京から福岡に通って、ルイハシ研究所の情報を上げていたのだろう。
「あなたを雇っているグループは東京にいるんだ」
「あなたも昨日も今日も、東京から通勤してるんだ」
「私とあなたは同類です。情報を売っている」
「じゃ〜暴露記事を期待しています」
霧島は、足早に立ち去った。多分、福岡空港だろう。安いチケットがあると聞いた。通勤まがいのこともできるのだろう。

仁美は、霧島芳郎に、この７ヶ月間、ずっとウオッチされていたことを、はじめて知った。それは、リンメイと一緒に住んでいるからだ。仁美が、船渡二郎を脅かして、ルイハシ研究所を手に入れようと思っている。事情通は、そう読んだのだ。おかしな話だが、仁美は、まるでわかってない。リンメイ

と船渡二郎の関係だって、最近知ったばかりである。
霧島芳郎は、仁美の狙いがわからないまま、ずっとウオッチしていたのだ。
もしかして、ルイハシ研究所を、仁美に奪われるかもしれない。
やっと少し見えてきた。いくつかのグループが、ルイハシ研究所を狙っている。今日、その１つが見えた。正体はわからないが、吾川と麻野のグループも、その１つだ。しかし、吾川と麻野の陰謀は、船渡二郎に感づかれた。
大阪の化粧品会社が、風間を使って、損害賠償を仕掛けているのは、どういう意図があるのだろう。こっちが、さっぱりわからない。

それにしても、リンメイは危険である。船渡二郎にとっては、特に危険である。仁美と一緒に住んでいることが、最も危険だろう。船渡二郎は知っているのか。
リンメイは、今日のように、自分が危険であることを、知らないだろう。仁美は、船渡二郎に、牽制球を投げておいた方がいいのかもしれないと思うようになった。
「何もしないから手を出すな」
しかし、もし船渡二郎が、何も知らないのであれば、ヤブヘビになる。

○大阪の化粧品会社に出向く

８月23日、仁美は月曜になるのを待っていた。空振りになることを覚悟して、大阪の化粧品会社に出向いた。
リンメイは、いつもの朝ごはんを食べようと、シャワーをしてきた。
「どこに行くの？」
「大阪」
「今日は学校に行く」
「晩ごはんどうするか電話して」

その化粧品会社は、堺にあった。仁美の名刺を見て、受付の女性が、まゆをひそめた感じがした。特許の担当者と言ったのだが、広報の担当者が来た。
「ルイハシ研究所に化粧品を提供しているのでしょうか」

仁美は、大阪の化粧品会社のホームページから、大阪の化粧品会社が、ルイハシ研究所にも化粧品を提供していることを知っていた。
「ルイハシ研究所はわたしどものよいお客さんで、共同で研究しているテーマがいくつかあります」
仁美は福岡の雑誌社の記者である。福岡のルイハシ研究所の動向を知りたがっていると思ってもらえる。
登り竜のルイハシ研究所と共同で仕事をしていることは、大阪の研究所としても、誇りなのだということがわかった。
「ルイハシ研究所が、グループに入ってくれるといいんでしょうね」
「願いですけど」
やはり、ルイハシブランドは大きい。日の出の勢いなのだろう。
「この特許番号のことで聞きたいことがあるのですが」
「どういうことでしょうか」
「この特許の侵害で、ルイハシ研究所に、損害賠償の請求をしていることです」
広報の担当者は、仁美の顔を見ていた。予想外の質問だったのだろう。
「そのような取材は受けかねます」

仁美には、今日の成果は１００％あった。大阪の化粧品会社も、ルイハシ研究所を狙っている。それも、かなり裏から狙っている。表向きでは、「大阪の化粧品会社は、ルイハシブランドの製品もつくっている」と言わなければならない。
広報の担当者は、何も知らない。大阪の化粧品会社としては、お客さんであるルイハシ研究所に、特許侵害のクレームを出しているのだ。
友田は、ルイハシ研究所が、なぜ返事をしないのか調べろと言っている。
仁美は、大阪の研究所を出て、すぐに、福岡のルイハシ研究所の工場に電話をした。あらかじめ、この特許の製品名を調べておいた。
「評判の化粧品ですけど品切れの心配はないのでしょうか」
「大阪でつくっていた時は頻繁に品切れしましたけど、ここでつくりはじめてなくなりました」

仁美は、飛行機の中で、多分、他にも、自社生産に切り替えた製品があるのだろうと思った。大阪の化粧品会社には、危機感がある。多分、メンドーをみてきたはずである。
ルイハシ研究所が返事をしない理由もわかる。だったら引き上げるになってもいいのか。ルイハシ研究所がお客さんなのだ。勝負は特許になってしまう。特許で縛られているから仕方がないになる。
大阪に来て、特許侵害の、だいたいのことがわかった。
「もう福岡空港なんだけど」
「お米炊いたからここで食べて」
「わかった」
リンメイが米を炊いているのは珍しい。いままでで、３回くらいしかない。すべて仁美がやっている。
空港で、めんたいを買った。これだったら、最悪おかずがなくてもやれるし、リンメイが何かつくっていても、おみやげにすればよい。いいアイデアだと思った。
仁美は、自分がリンメイを守りたがっていると思った。いついなくなっても平気だったのに。

乗っ取り工作

〇友田義男の情報提供者

８月24日、仁美は、ルイハシ研究所関連記事を、朝から書いた。２つ書いた。ルイハシ研究所が、自社生産をして、お客さんの希望を叶えているという視点と、ルイハシ研究所は、自社生産を活発にして、特許侵害も辞さない可能性がある。

すぐに、友田から電話があった。

「ルイハシ研究所は、自社生産を増やしたがっていて、特許侵害のトラブルも増えそう」にしろとの指示だった。

仁美は、これでまた少しわかった。友田が、仁美に、ルイハシ研究所の特許侵害を追わせている理由である。友田は、ルイハシ研究所を、あまりよく思っていない。

仁美は、すぐに原稿を書き替えて、友田に送った。

「まだ締め切りまで時間があるから、同じだけ空けるから埋めてくれ」

仁美の考えたとおりになった。

仁美は、友田の情報提供者を知りたくなっていた。

仁美が銀座に出かけたことを、友田に知らせた情報提供者だ。リンメイをよく知っているのかもしれない。今日は、時間が空いている。考えようと思った。ルイハシ研究所が、社会的に、よく思われなくなって好都合な人物は、霧島芳郎だろう。仁美に、リンメイ暴露記事を書いたら１千万円だと、霧島は言った。友田と、繋がっていないか、気になる。

しかし、友田は、仁美に、ルイハシ研究所の特許侵害の話ししかしない。霧島と繋がっているのであれば、べつに、特許侵害の記事でなくても、リンメイ暴露記事を書けと迫ってもよいはずである。こちらの方が、インパクトも大きいし、金になる。

特許侵害に関することであれば、大阪の化粧品の会社だろう。弁護士の風間平助だろう。しかし、風間平助は、大阪の化粧品の会社に依頼されて、損害

賠償請求文を送っただけだろう。風間平助が、雑誌社の編集長である友田に話を持ちかける理由はない。お金にもならない。
仁美は、自分の勤めている雑誌社の宣伝営業の織野大二郎に電話をした。
「ルイハシ研究所の宣伝だけど」
「先月からゼロになった」
「なぜだ」
「トラブルがあった」
「友田が絡んでいるのか」
織野大二郎は、何も言わなくなった。そうだと言っているようなものだ。
夕方、焼き鳥屋で待っていると言って電話を切った。
仁美のカンは当たった。ルイハシ研究所は福岡の会社である。付き合いでも、雑誌の宣伝をくれていたはずである。特に、友田が編集長をしている雑誌は５万部である。いろいろ書かれるのも恐い。

リンメイに電話をした。留守電を入れておいた。どこかで晩ごはんを食べてくるだろう。
織野大二郎は、先に来て、ビールを飲んでいた。何度か、２人でここに来たことがある。社内の情報を得ている。
仁美は、コースで焼き鳥を頼んだ。織野は、極端に大量のビールを飲む。ジョッキ８杯は飲む。もう３杯目だろう。
「ルイハシ研究所の記事を書くように言われているんだけど」
織野も、仁美が、先月から、ルイハシ研究所の記事を、小さなスペースだが、書いているのを知っている。
「友田さんは、やっぱり福岡を大事にしないといけないとわかってくれればいいんですよ」
「船渡二郎ですか？」
「土肥雨霧さんです」
仁美は、土肥雨霧など聞いたことがない。
「ルイハシ研究所の経営企画室長です」
「船渡二郎さんは開発が好きで研究室に入りっぱなしです。土肥雨霧さんが切り盛りしています」

「福岡の雑誌の宣伝費やテレビの宣伝費や会費など、すべてを切ったようです」
「福岡とはおさらばですか？」
「東京の費用がかさむから」
「船渡二郎さんは知っているのですか？」
「知らないと思います」
友田は、土肥雨霧に一太刀と思っている。福岡の人は、ひょっとすると、ルイハシ研究所に一太刀と思っている人が多いのかもしれない。仁美は、新しいことがわかったような気がした。気に入らないのだ。だれがルイハシ研究所を育てたと思っているのだ。
「友田さんが、私に、特許侵害の記事を書けと言っているんだけど、何か知りませんか？」
「銀座に本社のある化粧品会社です」
一瞬、仁美は、焼き鳥を噛むの止めた。
「あの大きな会社ですか？」
「私が、手紙の封を開けましたから」
手紙には、「いかにも、自社の特許がたくさんあるように言っているが、実は、見てくれだけで、大事な特許は、すべて他者のもので、平気で侵害している」と書かれてあった。
福岡の雑誌社として、真相を知らないかという問い合わせだったらしい。
また新しい競争会社が現れてしまった。今度は、日本有数の化粧品の会社である。ルイハシ研究所の５００倍もある大きな会社である。
仁美は、織野がジョッキの８杯目を飲み終わるのを待った。もう１人で考えたかった。

友田義男の情報提供者がわかったことが、今日の収穫だった。それにしても、あのビックな化粧品の会社までもが、ルイハシ研究所の銀座進出を警戒している。あるいは、飲み込んでしまいたい。
これで、友田への対応の仕方が読めた。友田は、根っからの博多っこなのだ。

〇麻野すみが船渡二郎を訴えた

８月25日仁美は、食品偽装事件を追うように、友田に言われた。編集長からの指示は断らない。これで、ページが確保できる。朝早く、車で長崎へ動いた。リンメイが大学まで乗せて行ってくれと言った。リンメイは、道がよくわかってきた。通り道かどうかわかる。

いつもの朝ごはんを素早く食べた。リンメイは、昨日も遅かったのだが、どこでごはんを食べたのか、よくわからない。

「いつも１人でごはん食べることが多いけど、イヤなのか」

「オンナは１人で外ではごはんを食べられない」

「どうしてるんだ？」

「今日は外でごはんを食べて来いと言われると辛い」

「中国の友達も忙しい」

「パスタでもつくって食べてくれと言われた方がいい」

仁美とリンメイは、確かに１つのベッドで寝ている。もう８か月になる。しかし、お互いの気持ちをしっかり話し合ったことがない。仁美は、２日に１日は外でごはんを食べる。情報提供者と食事をする。

「今日は外で食べてきてくれ」

これが、リンメイに辛いことだとは知らなかった。仁美は、リンメイが、好きなようにすればいいという感じで言っているのだが、リンメイの受け取り方は違っている。

「今日から電話が変わるから、先にパスタでもつくって食べてくれと言うから」

リンメイは、うれしそうだった。仁美には、これが意外だった。なぜだろう。

リンメイを降ろして、高速に向かった。よく考えてみると、ごはんは、ほとんど仁美がつくっている。食材もすべて仁美が買ってくる。仁美とリンメイの間では、食べることでは、仁美が支配している。仁美は、考え込んでしまった。リンメイは、仁美に食べてきてくれと言われて、街をさまよったことがあるのだろうか。オンナは、１人ではごはんを食べられないと言った。やはり、リンメイはシャイだ。

仁美は、今日から、冷蔵庫をいっぱいにしておこうと思った。乾燥パスタの業務用を買っておこうと思った。ピザソースを大瓶いっぱいにつくっておこうと思った。

長崎の食品偽装事件は、一発で終わってしまいそうだ。複雑な事件でもない。ただ、今月の締め切りで、仁美は、３編の記事を書くことになる。リンメイと上海にでも行って来たくなる。
「今日は家で食べるから」
リンメイに電話をした。業務用の食材屋さんに寄った。霧島芳郎から電話が入った。
「麻野すみが船渡二郎を訴えた。株の売買契約の違反だ」
「この情報は、サービスにする。リンメイ暴露記事を期待している」
霧島芳郎は、一方的に話して、切ってしまった。
仁美が、さっぱりわからないことは、霧島芳郎を動かしているグループだ。ルイハシ研究所に好意を持っていない。ルイハシ研究所が潰れてくれればよいと思っている。船渡二郎が傷ついてくれないかと思っている。あるいは、ルイハシ研究所を傘下に収めたい。
仁美には、霧島芳郎が、最も不気味である。

リンメイは、高杉晋作の本をテーブルに積んでいた。学校の図書館から借りてきたものだろう。仁美は、冷蔵庫をいっぱいにした。２人には大き過ぎる冷蔵庫だが、それでもいっぱいにした。
「冷蔵庫いっぱいにしてあるから、自分でつくって食べてください」
リンメイは、うれしそうに笑った。フライパンが濡れていた。かなり早い時間に、帰って来たのかもしれない。いままでの「食べて帰ってきてくれ」は、ホントに辛かったのかもしれない。
仁美は、ごはんを炊いて、肉じゃがをつくった。最近発見した、黄金ダシでつくる。とにかく、ダシがおいしい。味噌汁もこれでつくる。
リンメイも仁美も、座イスにテーブルで暮らしている。机は、座イス用の机である。
「少しお金が入りそうなので、上海にでも行ってこようと思ってるんだけ

ど」
リンメイは、聞こえていない素振りだった。
「私が手配していいですか？」
「わたしがやる」
パスポート渡しておきます。
仁美には、リンメイが、うれしいのか困惑しているのかわからない。リンメイが、中国のどこの出身なのかも聞いていない。お母さんやお父さんがどうしているのかも聞いていない。そういう感じではなかった。リンメイは行くところがなかった。仁美の部屋に転がり込んではいるが、いついなくなるかわからない。いなくなっても、仁美は何も言わないだろう。仁美が、リンメイのお母さんやお父さんのことを聞くのは、何かそぐわない。

○ルイハシ研究所の株公開のうわさ
８月26日だった。新聞の地方版を見ていた。小さな記事だった。福岡版である。ルイハシ研究所の株式公開の記事が出ていた。記事ではなく、うわさがあるという記事である。
仁美は、リンメイが、出かけるのを待って、新聞社に電話をした。リンメイがいるところでは、ルイハシ研究所の話はしたくない。リンメイと、ルイハシ研究所の話はしない。
「東京に本社を移して、上場の打診があったと、証券会社では言っています」
情報源は明かさないだろうが、確かそうである。麻野すみの10万株のルイハシ研究所株取得は、ものすごい威力である。多分、１２００円の契約だったが、数倍はするであろう。お金のことはともかく、10%は大きい。しかし、なぜ株式公開が近いのに、このような契約書にサインしたのだろう。仁美には、船渡二郎がよくわからない。
霧島芳郎に電話した。
「偽造の契約書だと言っている」
霧島芳郎は、仁美の情報提供の要求に、すぐに応じるようになっている。しかし、偽装契約書なるものがあり得るのだろうか。しかも、ルイハシ研究所

の人事が、何もないのだろうか。船渡と吾川は、どうなっているのだろうか。リンメイが詳しいのだろうが、リンメイには聞きたくはない。
仁美には、ルイハシ研究所の全貌が、次第に理解できてきている。ネットで、ルイハシ研究所を検索してみた。ルイハシ研究所のホームページから、銀座のお店の紹介動画が配信されている。他にも、すごい数の取材記録がある。ルイハシブランドは、美しくなることの、ヒットブランドになっている。このようなことは、福岡では起こり得なかったことだろう。毎日毎日、ルイハシ研究所の、会社の価値も上がっているのだろう。

仁美は、お昼も、ここでラーメンをつくって食べた。お昼の話題を、テレビでやっていた。銀座に出店したルイハシ研究所をレポートしていた。10月からテレビＣＭを担当するという、若手の女優が出てきて、取材に応じていた。初公開30秒のＣＭが流れた。秋冬化粧品である。数多くの特許が示すようにと言っている。ちょっとわけあり化粧品路線をとっている。福岡にいた時から、そうだった。
これだと、麻野すみは必要なくなったのだろう。
確かに、全国ブランドになるために、麻野すみを使おうと思ったのかもしれない。しかし、今は、麻野すみはジャマだろう。
船渡二郎か麻野すみのどちらかが、ウソをついている。

14時になって、仁美は、昨日買ってきたトマトの缶詰を２つ取り出して、ピザソースをつくりはじめた。大きめの瓶にたくさん作っておこうと思った。これさえあれば、パスタだって簡単につくれる。ナポリタンがつくれる。ニンニクを多めにする。アッという間にできる。このままとろ火にかけておいて、ピザ生地を作りはじめた。この前のピザ生地は、冷蔵庫で保管していたのだが、最後は、おいしくなかった。やはり３日が限度なのかもしれない。今晩はピザにしよう。
ピザ生地を自然発酵させている時間に、意外に多い、ネット上の、ルイハシ研究所関連の情報を調べていた。麻野すみ情報も多い。ホームページもある。
船渡二郎関連で、船渡二郎の植物農園構想の記事があった。２００９年８月

のインタビュー記事である。投資の団体だった。九州の物件を買って、日本や世界に販売するという会社である。九重山の広大な土地に、植物農園をつくりたいという、船渡の夢が語られていた。ただそれだけの、投資会社の広報記事なのだが、仁美は、なぜだか、引っかかった。仁美のカンである。その団体を追ってみた。今年になってマンゴ農園を買っている。鹿児島の東京ドームが４つも入る敷地を、すべて買収したようだ。日本は南国化している。マンゴがおいしくなっている。マンゴ生産会社をつくって、売却するらしい。２００％の配当になると書いてあった。すごい投資センスである。
ここに、なぜ船渡二郎が出ているのだろう。

夕方になりかけていた。リンメイには知られたくない。ネットを閉じて、ワインを買いに出かけた。今日は、どこにも出かけていない。髪もそのまま髭もそのままである。手櫛で髪をかき上げて、ティーシャツを着た。ピザ生地が、ボウルの中で、パンパンに膨らんでいた。

〇仁美とリンメイの上海

何事もなく、１週間が過ぎた。９月２日、リンメイと仁美は、福岡空港にいた。上海に出かける。リンメイは、時間がないと言って、９月４日の夜帰ってくると言った。２日間、上海のホテルに泊まるのだが、ゼンブで５万２千円しかかからないらしい。それしかリンメイから請求されていない。
「リンメイ、チケットだけでも２人で５万２千円では上海に行けないけど」
「わたしのアルバイト先だから平気」
仁美は、驚いてしまった。リンメイがアルバイトをしていたことを知らなかった。中国の飛行機の会社の福岡のお店らしい。週に４日、午後だけ出勤しているのだと言った。いつからアルバイトをしているのだろう。それもあるが、どうしてリンメイは、船渡二郎のオンナになったのだろう。まだ20歳である。
まだまだわからないことが多過ぎる。
リンメイは、高杉晋作の本をバックのサイドに入れている。仁美は、はじめての上海である。上海案内を何度も見ていた。けっこう大都会らしい。万博

もやっているのだが、リンメイは、万博に行く素振りを見せない。しかし、いかにも、楽しそうだった。出発まで30分だった。リンメイは、自分でつくったのだろう、中国語で書いてあるスケジュールを見ていた。
リンメイの肩越しに、霧島芳郎が見えた。驚いてしまった。上海にまでリンメイを追っているのだろうか。
「ちょっとトイレ」
仁美は、50メートル先で、誰か男と話している霧島に近寄った。
霧島は、仁美を見て驚いた。一緒にいた男も、仁美を見た。
「お出かけですか？」
霧島が先に声をかけてきた。
「上海へ遊びに」
霧島は、遠くにリンメイを見つけたようだった。
「お出かけですか？」
「上海へビジネスです」
一緒にいた男が会釈をした。
少し距離があったが、仁美たちの飛行機の搭乗開始の案内だとわかった。霧島と男は、この後の日本の飛行機だろう。
「お先に」
霧島は、仁美に軽く頭を下げた。
明らかに、霧島は、仁美とリンメイを追っていたのではなかった。たまたまだったに違いない。あの一緒にいた男を調べたいものだと思った。55くらいの、切れそうな男だった。

リンメイは、飛行機の中で、今日から３日間の上海のスケジュールを説明した。なにかさっぱりわからない。有名な観光地に行くわけでもないし、万博に行くわけでもない。明日は豫園にいると言った。それくらいのものだ。リンメイのコンセプトがわからない。
リンメイは、高杉晋作ノートを取り出していた。中国語で書いてあった。リンメイが書いているものだろう。高杉晋作上海と書いてあるページに、何やら中国語で書いていた。
「高杉は上海に行ったのか」

リンメイはうなずいた。
「丁度戦争やっていた時だったんだけど、どこに泊まったのかわかっていない」
「リンメイが探すのか」
「探せないけど行ってみたい」
やっと、リンメイの上海行きのコンセプトが理解できた。日本人でも、高杉晋作が上海に行った時の行動などを探ろうとする人などいない。仁美も、高杉晋作は知っているが、上海に行ったことがあるとは知らなかった。

仁美は、もう疲れていた。歩き回っている。リンメイは、必死になって写真を撮っている。古い石垣に印がないか探していた。上海は暑い。自動販売機がないのが苦しい。やっとコンビニを見つけては、飲み物を買ってくる。
日蔭のベンチで「上海港はどこで、どうやってここまで来たのか説明してくれ」と言った。
リンメイは、ノートの白紙の部分を出して、地図を描きはじめた。そこの大きな石がここだと言った。
「ここに高杉晋作が来たのか」
「向こうからフランスが来た」
仁美には、何が何やらゼンゼンわからない。こういうのを記事にしても、友田は、買ってくれないだろうと思った。それでも、必死になって地図を描いているリンメイを、抱いてしまいたくなってしまう。

もう６時を回って、豫園の近くのホテルに着いた。立派なホテルだった。これで５万２千円しかリンメイに渡さなかった。ホテル代だけでも、そのくらいしそうである。リンメイがエレベーターに乗り込むのと入れ違いに、隣のエレベーターから、霧島芳郎が、男と出てきた。霧島は仁美に気がついていない。リンメイも気がついていない。そもそも、リンメイと霧島は面識があるのかどうか、それすらわからない。
仁美は、部屋の番号を覚えて、インターネットを借りてくると言って、部屋を出た。
「九州の投資会社の代表だ。丸石半二郎だ」

霧島芳郎は、一緒の男を聞かれて、答えるだろうと予想していた。仁美に調べられればわかることだ。仁美は、１階のインターネットルームから、丸石半二郎を探した。

〇一発でＫＯされて

仁美は、間違いなく丸石半二郎だと確認して、すぐにリンメイの待つ部屋に帰った。リンメイは、高杉晋作の本を机に出して、ノートに、何やら描いていた。写真をめくっては見ていた。ドアを開けっ放しだった。
「シャワーしてきて」
リンメイは、仁美の顔も見ずに、言った。
ベトベトだった。排気ガスの中歩いた。早くシャワーを浴びたい。
「晩ごはんはどうするのですか？」
「夜店に行く」
シャワーが気持よかった。ひょっとしたら、このまま眠るのではないかと思った。
「夜店行くけど」
仁美は、シャワーを出て、ベッドに横になっていた。そのまま眠ってしまった。リンメイは、すっぴんだが、キレイだった。目立たないように、フツウの服装のつもりなのだろうが、リンメイは目立ってしまう。
リンメイはタクシーに乗った。遠くはないらしい。

夜店を食べ歩いた。リンメイに誘われるまま、はしごをした。何料理なのか、よくわからないが、すべておいしい。なにやらわからないお酒を飲みながら、屋台で話し込んでいた。リンメイは、高杉晋作の亡くなった屋敷に行って来たらしい。
「下関だから近い」
仁美は、一瞬、後に気配を感じた。酔っていた。
仁美が振り向いた瞬間、パンチがきた。仁美は、それっきりわからなくなった。
仁美は病院のベッドにいた。リンメイがいた。そして、確か、仁美にパンチ

を浴びせた男がいた。
仁美は、状況がわからなかった。
「何時だ？」
「10時」
上海時代の彼だと、リンメイは言った。まだ18だった。リンメイは、日本の優しい男に騙されて、福岡に行って、帰って来なくなった。会社に就職して大学にも通わせるという話だった。
帰って来なくなったのではなくて、帰れなくなったのだ。優しい男は、船渡二郎だった。リンメイは、就職したわけではなかった。しかし、マンションと手当てがあって、大学にも通った。そして、気がついた時には、もう上海には帰れない状況ができていた。
「警察に知らせるのか」
「医者は何か言っていたのか」
「気がついたら帰るように言われた」
仁美は、首を振ってみたがどこも何もない。右のコメカミの下が痛い。
それにしても、一発でＫＯされた。
「彼と行くのか」
「仁美とホテルに帰る」
仁美は、リンメイが彼と一緒に行くと言っても、何も言わないつもりだった。どうして自分と一緒に行くのだろう。彼はどうするのか。仁美は、仁美を殴った彼を見た。悲しそうだった。何もことばがないだろう。リンメイを愛していなければ仁美を殴ったりしない。
リンメイは、財布も何もなかったが、それでいいのか聞いた。お金はハダカで持って出た。みんなセイフティーボックスである。
仁美を殴った男は、一言もしゃべらなかった。目が、すまないと言っている。仁美が昏睡している時に、２人で話したのだろう。しかし、彼にとって、こんな悲しいことはないだろう。
仁美とリンメイは、病院からタクシーに乗ってホテルへ向かった。仁美を殴った男は、悲しそうに見送っていた。

仁美とリンメイは、ホテルの部屋に入るまで、黙っていた。何を話せばいい

のかわからない。
仁美は、仁美を殴った男のことを考えていた。リンメイが福岡に行くことに反対したはずである。ひょっとして、リンメイは、船渡二郎を仁美を殴った彼に会わせたかもしれない。優しい親切な福岡の人である。仁美を殴った彼もリンメイも、たった２年間に、取り返しのきかない出来事があったことになる。もう、２人には、時間を戻せない。
それにしても、船渡二郎と上海のことがわからない。なぜ船渡二郎は上海にいたのだろう。どうしてリンメイと会ったのだろう。わからないことがたくさんある。
リンメイは、ずっと何も話さない。高杉晋作の話もしなくなった。仁美がはじめてリンメイに会ったのは、リンメイが、船渡二郎のマンションから逃げた時だった。リンメイには行くところがなかった。
「リンメイ、帰ったら、下関の長府に一緒に行こう」
リンメイの顔が、一気に赤くなった。
仁美は、リンメイに、自分のことも話さないといけないと思った。今はもう家はないが、仁美は、下関の長府に実家があった。交通事故で、両親を失った。仁美は、長府の実家を、そのままにして、福岡の親戚に来た。長府の実家がどうなっているかわからない。更地にまではした。
しかし、リンメイは、高杉晋作の長府をイメージしただろう。

〇丸石半二郎

上海から帰った夜だった。９月４日である。霧島芳郎から電話があった。
「リンメイ、ちょっと急用ができた。タクシーで先に帰ってて」
仁美は、リンメイをタクシーに乗せた。後に、霧島芳郎がいることがわかっていた。
高級車が、静かに止まった。丸石半二郎が、表に出てきた。ずっと、霧島の後にいた。仁美も丸石も霧島も、何も話さない。仁美は、どこを走っているのか、よくわかっている。高級住宅街の大きな門のある邸宅に着いた。もう覚悟を決めていることがわかる。仁美は、雑誌社の記者である。丸石半二郎という名前も、自宅も明かした。代わりに、何を要求するのだろう。

「どうぞ」
仁美は、広い応接室らしきところに通された。
「はっきりさせた方がいいと思いまして」
「ええ」
「ルイハシ研究所は、私がつくった会社です」
仁美は、驚いている顔を見せていないか確かめた。冷静らしい。
「船渡君は、研究員でした」
「九州の生薬を集めて、化粧品にしてもらったのです」
「しかし、ゼンゼン売れなくて、投資の回収はもちろんできませんでした」
「結局、タダ同然で、私は、船渡君に、会社を売らなければならなくなったのです」
「船渡君は、ルイハシ研究所という会社にして、急に、特許を出しはじめて、販売もうまくいきはじめたのです」
「彼は、私が、仕方なく、手放すのを待っていたと思うのです」
「船渡君は、私からタダ同然で買ったルイハシ研究所を、今では、時価で何十億にもしたのです」
「最初から、計算していたのです」
「あなたは、どうして上海に行っているのですか？」
丸石半二郎は、上海の金持ちのお客さんとの交渉だと言った。投資資金を集めている。
「船渡さんも行っていたのですか？」
「彼は、私が連れて行って遊んでいた」
「リンメイはあなたが紹介したのですか？」
「リンメイは可哀そうな子どもです」
「どういう意味ですか？」
「親を知らない」
「私が10人を５年メンドーみていた。その１人です」
「船渡さんが、リンメイは自分がメンドーみると言ったのですか？」
仁美は、霧島に向かって質問をした。
「リンメイ暴露記事を書いたら１千万だと私に言ったけど、丸石さんの気持ちとは違うと思うけど」

「だれかがどこかで、船渡二郎の仮面を剥がないと、これからも犠牲者が出る」
「リンメイに犠牲になれですか？」
「１つの可能性です」
「私に何を望むのですか？」
「船渡二郎の仮面を剥がすことを一緒にやってほしい」
「ルイハシ研究所を取り返したいんじゃないですか？」
「それもある」

仁美は、送らせるという丸石を断った。これからも、丸石と霧島とは、フィフティーで行かないといけないと思った。それにしても、丸石の家は邸宅だった。家族は誰も会っていない。
タクシーがなかなか拾えなかった。ずっと歩いた。
「シャワーしたけど晩ごはんどうしよう」
リンメイから電話がかかってきた。ホッとする。
「何も食べてないからつくってくれないか、もうすぐ着くから」
「何分くらい？」
「20分かな」
今度のリンメイとの上海行きは、仁美にとって大きな衝撃だった。リンメイのことが、かなり詳しくわかった。そして、謎だった霧島芳郎のバックもわかった。船渡二郎のこともわかってきた。
丸石半二郎は、ルイハシ研究所を、取り返したいと思っている。霧島芳郎を使っている。銀座に本社のある大手の化粧品会社の真意を確かめなければならない。編集長の友田を巻き込んでいる。吾川麻野グループもあって、大阪の化粧品会社は風間を使っている。次第にはっきりしてきたものの、みんな何をしているのだろう。
ルイハシ研究所の乗っ取り工作。仁美は、それぞれのグループがやっていることは、ルイハシ研究所を乗っ取りたいのだと思った。
そのために、あらゆる手段が使われている。

リンメイは、ごはんを炊いていた。焼肉どんぶりが食べたいと言った。

「シャワーしてる間にどんぶりつくっておくから」
リンメイは、高杉晋作を読んでいたようだ。パソコンの辞書がなければ、リンメイは、高杉晋作を読めないのだろう。家にいると、必死でパソコンを検索している。
シャワーを浴びながら、リンメイにとって、もっとも危険な人物は、霧島とその裏にいるグループではないかと思っていた。しかし、丸石の言っている10人のメンドーをみていたということが真実であれば、丸石と霧島が、リンメイを危険にさらすことはないと思える。しかし、霧島が、時々、リンメイを追っているのは何だろう。
リンメイにとって、1番危険な人物は、船渡二郎だろう。リンメイに暴露記事でも書かれてしまえば、身の破滅にもなりかねない。

○ルイハシ研究所来年４月上場申請
９月６日の月曜だった。仁美は、詐欺事件の取材に出かけていた。夕方になって、霧島から電話があった。
「ルイハシ研究所の取締役会があって、吾川俊之が退任した」
それだけ言うと、霧島は電話を切った。麻野のことはどうなったのだろう。10万株の売買契約書が偽造だったのだろうか。吾川は、船渡二郎の妹のダンナである。麻野すみがいて、今回の人事であると、離婚ということも考えられる。
それにしても、逐一情報を知らせてくるようになった霧島芳郎も気になる。仁美に何を期待しているのだろうか、やはり、リンメイ暴露記事なのだろうか。
仁美は、気になって、ネットカフェへっ寄ってみた。
「ルイハシ研究所来年４月上場を申請」
土肥雨霧が、今日の取締役会で、取締役候補に専任されていた。臨時の株主総会を開催して、吾川俊之の退任と土肥雨霧の選任を決めると記されてあった。そして、その土肥が、記者会見で、上場申請をしたことを発表した。今日の午後１時に申請したらしい。
霧島から電話が来ると思った。

「土肥雨霧が取締役になった。今日の１時に、来年４月上場を申請した」
それだけ言うと、霧島は、電話を切った。
仁美は、ネットカフェで、今回の新しい詐欺事件の構図を考えた。全く新しい事件である。仁美は、詐欺事件を追わなければならない。詐欺事件の記事を書いて、収入を得なければならない。もし怠ると、リンメイ暴露記事に追い込まれる。そのためにも、友田編集長に、ルイハシ研究所の全貌を話してはならない。友田は、仁美を追い込むことができる人物である。
仁美は、集中してまとめた。これを取材して、来月の締めにしたいと思った。今月の締めは、３本もある。もうすぐ締めがくる。

夕方、仁美は、早い時間にマンションに帰った。仕事は順調である。冷やし中華が食べたくなって、近所のスーパーマーケットに寄った。冷やし中華などつくったことがない。簡単なのかもしれない。パッケージの後に書かれてあるつくり方を読む。ハムを買って卵を買った。キュウリも買った。仁美は、リンメイと暮らす前は、こういう時に、スーパーマーケットに来ることなどなかった。中華のお店でおいしいところがある。今は、リンメイが困るだろうと思って、スーパーマーケットに寄って、冷やし中華を買う。
リンメイは、まだ帰ってはいなかった。パッケージの裏を読むと、簡単につくれそうである。リンメイが帰ってからつくればよい。
仁美は、ヒマになってネットを開いた。
東京の出版社から「ルイハシ研究所と船渡二郎」が出版されたそうである。ここのところ、ルイハシ研究所関連の情報が、ネット上を次々に覆っている。ネットから、近所のコンビニに配達してもらうことにして、「ルイハシ研究所と船渡二郎」を１冊買った。明日には、届けられるそうだ。
船渡二郎も、時の人になるのかもしれない。やはり、銀座は大きい。銀座のお店をオープンしてからだ。まだ今月である。そして本社を福岡から銀座に移してからである。一気に、全国ベースにのし上がった。通信販売の売上も、多くなっただろう。銀座のお店の売上もすごいだろう。
リンメイの帰りが遅い。お腹が空いたがガマンする。仁美は、間食をしない。おかしの類が何もない。リンメイは、何かしらのものがバッグに入っていると思う。見たことはない。少し大きめのバッグだ。

パソコンのメールを立ち上げてみた。
だれだかよくわからない。迷惑メールになっているのを気になって開いてみた。リンメイの写真だった。仁美とリンメイが、上海に行った時の写真である。高杉晋作が上海上陸をして歩いた道を、リンメイが図にしている写真である。隣には、もちろん仁美がいる。
仁美は、雑誌記者である。危険を覚悟で、メールアドレスを公開しているし名刺にも書いている。
上海の仁美とリンメイを知っているのは、霧島芳郎だろう。しかし、霧島芳郎には、今日、このような写真を送ってくる理由がない。もう、何から何まで、仁美に話をして、仁美に、協力を要請している。これを送ってきたのは誰だろう。もっと多くの写真があるはずである。
メールのまま、保存した。リンメイに見られては、まずい。また新しい見えない敵である。仁美とリンメイにとっての敵になることは、間違いない。この写真の、意味は何だろう。仁美を牽制しているのだろうか。リンメイの写真だから、リンメイのことだろう。
リンメイは、霧島芳郎にも、追われていた。そして、このオトコかオンナかわからい人物にも、追われている。リンメイが追われるのは、リンメイが船渡二郎のオンナだったからだ。船渡二郎は、黙って出て行ったリンメイを警戒しているだろう。船渡二郎に一矢報いたいグループは、リンメイをウオッチするだろう。ルイハシ研究所や船渡二郎が、有名になればなるほど、リンメイは、ウオッチされる。
リンメイが帰ってきた。
「ごはんは？」
「まだ」
「先に食べるか？」
「ペコペコ」
仁美は、キッチンに向かった。リンメイは、化粧落としに向かった。

○『ルイハシ研究所と船渡二郎』
９月７日である。リンメイを送って行った。学校の近くまで送った。そし

て、帰りに、コンビニで、『ルイハシ研究所と船渡二郎』を受け取った。
マンションに帰って、読みはじめた。
読者の興味の的は、ルイハシブランドの形成である。最初は何だったのか。自分たちにも可能性があるのか。ヒントはないのか。
船渡二郎は、自分が、研究者であると書いてある。ビジネスは得意ではないとも書いている。
「船渡さんの美溶液を使って肌に艶ができた」
少ないお客さんだが、そう言ってくれるのを励みに、睡眠時間を減らして研究に没頭したと書いてあった。どこにも、丸石半二郎から聞いた話が出てこない。創業15年かかって、やっとここまでこれたと記してあった。毎年着実にお客さんは増えて、福岡から九州になって、九州から西日本になって、そして、銀座に本社を移して、西日本から日本になったと書かれてある。丸石半二郎の話は、ウソなのだろうか。しかし、仁美のとって唯一のリアルな出来事は、リンメイである。リンメイが船渡二郎のマンションを飛び出したことは間違いない。
船渡二郎は、日本から世界についても書いてあった。パリにお店をつくるのだと書いてある。すでに、お店の交渉に入っていると。上場したら、こういうことを、書の中で書くのは、まずい。船渡二郎の個人的希望なのか、ルイハシ研究所の方針なのかわからない。
お昼になるまで、ずっと読んでいた。おもしろいから読んでいるわけではない。仁美には、船渡二郎を取材する手間が少しは省けた。本当かどうか、確かめなければならないことがたくさんあるが、船渡二郎なる人物の１面がよくわかる。
仁美は、ラーメンをつくった。リンメイが来てから、お昼を外に食べに行くことが少なくなった。冷蔵庫に、常に、何かしらのものがある。ラーメンは、乾燥ラーメンを大量にストックしている。最近の乾燥ラーメンはおいしい。

お昼からも、ずっと「ルイハシ研究所と船渡二郎」を読んだ。仁美は、雑誌記者である。おかしな部分をいくつも探すことができる。パリ店の交渉もである。ルイハシ研究所か船渡二郎の凄さを言いたいのだろうが、先走りが過

ぎる。
このような本で、特許を列挙することは珍しいが、ずらっと、写真が並べてあった。仁美は、自分のメモと見較べた。ウソではないらしい。しかし、銀座に本社のある大手の化粧品会社が言うように、重要な特許は、すべて他者のもので、それを侵害しているという主張はどうなのだろう。
船渡二郎論文も、列挙してあって、賞状の写真もある。数だけからは、けっこうな数である。仁美には、重要度がわからない。船渡二郎は、表彰されることが好きなのだろう。
お客様からのお礼の手紙も、たくさん写真が貼られていた。すべて、肌の艶が出てきたというものだ。若返ってありがたい。ダメ化粧品だというのもあるだろうと思うのだが、どこにもない。
少々荒っぽい本を読み終えて、この本は疲れると思った。船渡二郎やルイハシ研究所が、タダで配っていそうな本である。それを、仁美は、通信販売で買った。損をした気がする。
友田から電話が入った。
「ルイハシ研究所の土肥雨霧を知っているか」
「福岡に来る機会があるので会いたいと言ってきている」
「明日夕方時間があるか」
いきなりである。土肥雨霧は、やっかいな人間のように感じる。しかし、うやむやにするわけにはいかない。リンメイが危ないのだと思う。
「高級料亭だからすぐわかる」
友田から、すぐに電話があった。友田が高級料亭など行くはずがない。土肥雨霧である。ルイハシ研究所の記事に関することだろう。

〇土肥雨霧

９月８日の夕方である。仁美は、オーブンレンジにピザを入れてあるので、焼いて食べてくれと電話をした。留守電だった。
福岡にも、このような料亭があるのかと思えるくらいの、立派なお店である。もちろん、仁美ははじめてだった。
「はじめてお目にかかります」

土肥雨霧は、思ったほどキツイ感じのオトコではなかった。
「勝手だと思ったのですが、料理は選ばせていただきました」
友田も仁美も、飲んだことのないビールが運ばれてきた。
「友田編集長の奥様にこれをお持ち帰りいただくと助かります」
少し高い年齢層向けのルイハシブランドの化粧品セットだった。高級品である。
「仁美さまは独身と聞きましたが一応これをお持ち帰りいただくと助かります」
若い年齢層向けの化粧品のセットだった。ルイハシブランドは高級品である。底に、封書があった。多分現金が入っている。
土肥は、銀座店でどのくらいのお客さんが来ていただいているのかを話した。
福岡は、漁港でもある。魚がおいしい。次々に運ばれてくる魚は、すべておいしかった。鹿児島の焼酎もおいしかった。
友田は、上機嫌で、これからも、時々来てくれと言っていた。
土肥は、友田と仁美が追いかけている、ルイハシ研究所の記事を取り止めてほしいのだろうが、その話はしなかった。仁美には、よくわからない。
友田は、もう、歩くのもおぼつかないほどだった。
タクシーを用意された。
「明日、ルイハシ研究所を書き替えて送ってくれ」
友田は言った。
今月の締めなのだ。ルイハシ研究所が２本ある。いずれも、友田の指摘のとおりに、ルイハシ研究所を攻撃している論調である。仁美には、反論する理由はない。友田が２本分のスペースをくれたのだ。おかげで上海に行ってきた。先に行ってきた。ここでゼロになっては困る。

眠ってしまった友田の自宅を運転手に教えて、仁美は、マンションのかなり手前で降りた。仁美が、１人でごはんを食べる時に行っている韓国料理の小さなお店がある。
「こんばんわ～」
「最近ご無沙汰」

確かにそうである。リンメイが来て以来、１人で晩ごはんを食べることが少なくなった。この店も来なくなっている。
多分現金が入っている手提げ袋の封書を出して、手提げ袋のまま、差し出した。一瞬、ママなのか娘なのか、２人は迷った。母娘でやっている。
「若者だ」
「ルイハシ」
「この手提げ、銀座店じゃないともらえないんだけど、銀座に行ったの？」
「東京からのお客さんにいただいた」
仁美は、２人に見えないように、封書を開けてみた、10万円らしい。内ポケットにしまった。
「ごはん食べてきてるんじゃないの？」
「これを届けに来ただけだ。お茶を飲んだら帰る」
仁美には、食べる余裕が、全くなかった。

リンメイは、帰っていた。
「ピザはどうだった？」
「バジルがおいしかった」
最近、仁美は、バジルソースを使うことが多い。トマトソースもおいしいのだが。
リンメイは、シャワーもして、すっぴんになっていた。上海で買った、絹のダボダボ部屋着を着ていた。やはり、リンメイは中国人だ。
「シャワーしてくる」
仁美は、土肥雨霧を考えていた。もし敵であったら強敵である。友田を１晩でひっくり返した。もし、仁美が、友田に逆らって、ルイハシ研究所の攻撃をするならば、土肥は、友田を使ってくるだろう。仁美の弱い部分である。仁美は、友田からお金をもらっている。生活している。

シャワーから出てゆっくりしていた。
誰かがやってきた。仁美のマンションを訪れる人などいない。
「先程はありがとうございました。本をお渡しするのを忘れました。友田編集長さまにもお渡しください」

土肥雨霧である。
これはタイヘンなことになった。仁美は、土肥に、首根っこを抑えられてしまった。このマンションを知っている。当然、リンメイのことも知っているだろう。そのことを、言いに来た。
どうしてこんなにすごい男が、船渡二郎にくっついたのだろう。
「こんなに遅くに、仕事なの？」
「ああ〜忘れ物をした」
仁美は、２冊の「ルイハシ研究所と船渡二郎」を、とっさに、空の靴箱の中に隠した。明日忘れないように、持ち出さなくてはならない。
仁美は、次第に、自分の身にも危険が迫っている気がしてきた。リンメイも自分も危ない。なにがどう危ないのか、それがわからない。

○麻野すみの反撃

仁美は、朝から、２本の、ルイハシ研究所の記事を書き替えた。
「どうだ？まだか」
友田から催促の電話があった。
「本を預かったそうだけど、あとで持ってきてくれ」
その前に、原稿をメールしなければならない。
書き終えて、仁美は、先月号の、ルイハシ研究所追撃的記事と、今回の２本の記事が、まったく繋がらないと思った。これが出ると、福岡の、ルイハシ研究所追撃グループが、クレームを出すのではないかと思った。
「ちょっと出かけてくる」
朝から、高杉晋作を読んでいる、リンメイに、声をかけて、空き靴箱の中の２冊の本をカバンに入れて、パソコンもカバンに入れて、部屋を出た。
リンメイは、仁美が、本業の詐欺事件の他に、ルイハシ研究所を記事にしているのを知っている。特許のことだと知っている。リンメイが、仁美のパソコンを調べれば、ルイハシ研究所のことが、思わぬ展開をしていることがわかる。リンメイには、知ってほしくない。

「今日のメールで、広告の仕事をもらいました」

広告営業の綾野大二郎が言った。
「昨日会ったそうですけど」
綾野は、仁美にお礼を言った。綾野の実績になる。あの土肥雨霧という男は、強敵だと思った。
「この本です」
仁美は、自分が、すでに通信販売で買って読んだことは言わなかった。
友田は機嫌が良かった。あの銀座に本社がある大手の化粧品の会社とは、どうするのだろう。仁美が、ルイハシ研究所の銀座店のオープンの日に、銀座を訪れた情報を、友田に伝えたのは、銀座に本社のある会社だろう。それくらいに、近い関係だっただろうに。
「来月はこの本の紹介でもやってみてくれ」
仁美は、驚いてしまった。
「来月もまた来ると言っていた」
「10月12日だ」
友田は、喜んでいた。奥さんに喜ばれたと言った。あらためて、ルイハシブランドの凄さを知ったようだ。
友田を見ていると、ルイハシ研究所を追い落とすことなどムリなのではないかと思える。もちろん、仁美には、そのような気はない。度胸もない。ただ、リンメイが係っているので、守りたいだけだ。

仁美は、会社では、机がない。幾人かいる半固定給半歩合給の記者のための、共同の机があるだけだ。会社へ出かける時は、パソコンを持って行かなくてはならない。
９月20日発売の東京の雑誌の広告が、インターネットに出た。綾野が知らせてくれた。20日発売だが、19日には、夕方から販売されるそうである。
麻野すみが、船渡二郎とルイハシ研究所を告訴しているという記事であるらしい。出てみなければわからない。この記事が、全国レベルの関心事になってしまったことに、仁美は驚いた。仁美は、福岡の雑誌社の記者である。ルイハシ研究所の記事を、小さなスペースで書いている。ところがである。多分、ルイハシ研究所が銀座進出を果たさなければ、麻野すみの記事も、何の関心も呼ばなかっただろう。

吾川が取締役を解任されて、もう、麻野すみも切れてしまったのだろう。告訴していることに、どういう影響を与えるかなど、考える余地はなかったのだろう。

仁美は、すぐにマンションに向かった。麻野すみの記事が気になる。船渡二郎が憎いあまり、リンメイのことに触れなければよいのだが。あり得ると思った。
リンメイは、家にいた。
「学校には行かなかったのか」
「今日は授業がない」
リンメイは、高杉晋作の研究者になるのだろうか。
「リンメイは何をしたいんだ？」
はじめてリンメイに聞いた。仁美は、リンメイが、航空会社でアルバイトをしていることを最近知った、そして、高杉晋作をしつこく追っていることも最近知った。しかし、学校で何をしようとしているのかわからない。将来を、どう思っているのか。
「やっと日本語にも学校にも慣れたので、ゲノムを勉強して、医者になりたい」
「お父さんとお母さんが死ぬのを見てて辛かった」
「高杉晋作は？」
「一生の趣味」
仁美は、不思議だった。決して、幸福だと思った瞬間が多いわけではなかっただろうと思う。むしろ、幼いころから、ずっと、辛い時間が続いているのだろう。だからなのかもしれない。リンメイの高杉晋作の追い方は、フツウではない。辛い時間を覆い隠すように、高杉と格闘している。多分、高杉晋作にホレてしまったのだろう。仁美には、高杉晋作のような度胸がない。
それにしても、来年から、ゲノムの研究者になって医者になりたいとは、はじめて聞いた。
「医者になるのに、何かやってほしいことはあるのか」
リンメイは、顔を上げて仁美を見た。仁美が、言いそうもないことを言ったからだ。

「うれしい」
仁美は、鳥ごはんをつくろうとキッチンに行った。

〇仁美の実家跡
９月12日、日曜だった。仁美とリンメイは、車で、下関の長府に出かけた。高速である。旅行という感じではない。リンメイは、真っ先に功山寺に行ってくれと言った。関門大橋を渡って高速を降りれば、功山寺まで、さして遠くない。仁美の実家への道である。よくわかっている。両親の墓もある。リンメイには、まだ何も話していない。
山門から急な階段になって、いきなり功山寺になる。急な階段を登っている時から、リンメイは、ドキドキしていた。ここで、高杉晋作は、奇兵隊を決起させた。高杉の銅像もあった。リンメイは、銅像を撮って、ケータイの待ち受け画面にした。これが１番うれしそうだった。隣にある博物館にも入り、あれこれと質問していた。仁美は、それほど詳しくはないし、興味もない。多分、仁美の祖先も関係していたであろう。
長府藩は、大昔から侍の街である。戦う度に弔いをしなければならなかったのだろう。３歩歩けば寺にぶつかる。地元の人は、辛い過去を持った土地だと思っている。仁美も同じである。事実、仁美も、辛い。
侍屋敷を改装して、レストランになっているところもある。とりわけ多いとは思えない観光客も、一風変わったレストランでごはんを食べる。仁美とリンメイも、古い街で、フランス料理を食べた。パンがおいしかった。
車は、海沿いの国道の駐車場に止めてある。
「リンメイ、ちょっと待って」
リンメイは、もう更地になっているさして広くはない敷地に入って行く仁美の後に従った。
「ここが私の家だ」
リンメイは、仁美が、何を言おうとしているのか、わからなかった。
「私はここで生まれた」
功山寺から、さして遠くはない。
「私のお父さんとお母さんは、下の国道で衝突して亡くなった」

「私は、福岡の親戚に引き取られた」
「私はずっと孤独だった」
リンメイはやっと理解したのだろう。涙がポロポロ落ちてきた。あまりにも、リンメイの境遇と似ているからだ。リンメイも、孤独で頼れるものが何もない。更地の一角に、墓がある。この墓は、仁美が３年前につくった。もうここは、全体が墓でよいと思った。仁美が住むことはない。土地の所有は仁美になっている。固定資産税も払っている。
仁美は、奥の、小さな墓にリンメイを連れて行った。両親の名前が書いてある。両親から、仁美家の墓を聞いていなかった。仁美という珍しい名前の墓など、どこにもない。親戚も長府にはいない。みんな出て行ったと聞いていた。
リンメイは、大粒の涙をポロポロ流した。差し出したハンカチはいらないと言って泣いた。
自分の両親を思い出している。
仁美は、花も何も持ってこなかった。しばらく来ていない。墓石が汚れている。次に来る時は、花を持って来れる。
リンメイは、しばらく、声を出して泣いていた。泣き声が止まらない。すっぴんに近い顔をしていたが、なみだで何もなくなってしまった。
「リンメイ帰ろう、また来るから」
リンメイは、やっと泣き止んだ。
仁美は、リンメイが船渡二郎のマンションから逃げ出した日に出会った。その日も泣きたかっただろうと思う。８か月になるが、１度も、リンメイの泣いているのを見たことがない。もう、リンメイには、身に着いている。泣いていては生き残れない。仁美は、１度も涙を見せないリンメイを見て、辛い20年だったのだろうと思うだけである。
それが、さっきから、ずっと泣いている。声を出して泣いている。
リンメイは、敷地らしき階段を降りる時、深々とおじぎをした。仁美は、そのようなことはしない。両手で涙を拭きながら、リンメイは歩いた。黙って、下の国道の道にある駐車場まで歩いた。
ずっと、両手で涙を拭いていた。
「もう帰る」

まだ夕方には早い時間だった。功山寺しか行っていない。そして、仁美の実家跡しか行っていない。

「福岡に帰っていいのか」

「うん」

泣き疲れたような小さな声だった。

リンメイには、思ってもみなかった出来事だっただろう。まさか、仁美の実家跡に行くことになるとは。

〇丸石半二郎も動いた

９月13日だった。昨夜は、ベッドに入って、30秒もしないうちに、リンメイは眠った。そして、今日は、早くからシャワーの音がしている。学校なのだ。月曜である。仁美は、冷蔵庫からピザ生地を取り出して、ハムを挟んで焼いた。レタスとキュウリを切って、ラッキョウドレッシングにしてテーブルに置いた。コーヒーも簡単にできる。

ケータイに、霧島芳郎の電話が入っていた。朝の６時である。仁美は、目が覚めなかった。今は電話はできない。新聞を読んでおこうと思った。この頃は、何があるかわからない。霧島の電話は、何かしらの重要な出来事に違いない。

「ごはん食べたら学校行く」

「送って行くから」

「ありがとう」

リンメイは、お腹が空いていた。昨日帰って、ソーメンを食べただけだ。何も食べたくないと言った。

仁美は、顔を洗って、ヒゲをあたって髪も整えた。リンメイが、誰に会うかもわからない。

「もう残ってない」

「ああ〜いい」

パンも２つ食べていた。リンメイは、時計を見て歯磨きに行った。

仁美は、リンメイを車から降ろして、リンメイが角を曲がるのを見ていた。

「今日、ルイハシ研究所の株式の30％は、丸石半二郎のものだという意見書を、船渡二郎に送りました」
「返事をしないと思いますけど」
「訴えることになります」
「証拠でもあるのですか？」
「船渡は、ルイハシ研究所の株を丸石が売らざるを得なくなるように画策したのです」
仁美は、この話は丸石から聞いたのだが、話だけでは、弁護士だって取り上げにくいと思った。
確かに、船渡に、ある意図があったかもしれない。丸石の投資がムダになるまで、研究しかしなかった可能性がある。いずれ、丸石は、ルイハシ研究所を手放さざるを得なくなる。事実そのとおりになった。しかし、これを証明することは難しい。
麻野すみの場合は、売買契約書がある。偽造かどうかが焦点である。争いやすい。しかし、丸石の場合は、焦点がわからない。それにしても、ルイハシ研究所株は、金塊のようになっている。
仁美は、次第に、自分が、ルイハシ問題の渦に巻き込まれてきていると思った。アクセルを踏みかけた。
「返事もないので、ルイハシ研究所株の10％を特許侵害の代償にするように、見解書を送りました」
「大阪の化粧品会社からですか？」
「もう、どんどん自社生産をしていて、昔、10％株を持ってくださいと言われたのを、実行に移すように催促したものです」
「証拠でもあるのですか？」
「会議録があって、船渡二郎のサインもあります」
またこれもメンドーなことになりそうである。風間平助はなぜ仁美に電話してくるのだろう。
「船渡二郎の弱みを握っているのは仁美さんだから」
仁美は、黙ってしまった。これはタイヘンなことになってしまった。リンメイのことを知っている。風間平助は、リンメイのことを知っている。霧島芳郎も、リンメイ暴露記事を書いたら１千万円だと言った。しかし。石丸半二

郎を信じれば、リンメイを傷つけることはできないだろう。しかし、風間は関係ない。仁美は、次第に、追い詰められているような気がした。

仁美は、カフェに寄って考えないといけないと思った。リンメイを守れるかどうかわからない。丸石半二郎も吾川と麻野も、そして大阪の化粧品会社も、みんなルイハシ研究所の株式を狙っている。丸石は30%で麻野は10%で大阪の化粧品の会社は10%だ。そして、最後の手段として、船渡二郎の弱みを握っている、仁美のリンメイ暴露記事に期待をしている。このリンメイ暴露記事は、船渡二郎に、ルイハシ研究所株10%を引き渡すほどの価値があるだろうか。奪うのではなく、１２００円10万株で譲ることになるのだろう。仁美が船渡二郎に話を持ち込んでも、同じようになる可能性がある。
カフェで、しかめっ面をして考えていて、怖くなった。このことを、友田には知られてはいけない。友田は、何をするかわからない。
リンメイのことは、みんなが知っている。リンメイ暴露記事がどういう意味を持つのか、知らない人がいない。船渡二郎から、とにかく守らないといけない。そのためには、土肥雨霧とうまくやることだ。
次第に、リンメイ暴露記事をめぐる周辺の構図が、明らかになってきた。ルイハシ研究所の構図なのだが、いつの間にか、リンメイ暴露記事の構図になってきている。この、ルイハシ研究所の駆け引きは、最後の、リンメイ暴露記事まで達してしまうと、みんなが思っているのだ。

仁美は、整理できたところで、２つ目の詐欺事件の取材行こうと考えた。仁美がリンメイを守れなくなるのは、記事の収入がなくなることだ。最後は、リンメイ暴露記事になってしまう。船渡二郎は望まないが、だれかが望むし、多分、仁美に、なんらかの圧力がかかってくる。
働こうと思った。

○麻野すみの告白

９月19日夕方、福岡の駅で、麻野すみの告白記事の掲載されている雑誌を買った。ここ数日、仁美は、次の締め切りのための詐欺事件の取材に忙し

い。
一瞬にして、なぜ、土肥雨霧が、友田と仁美に近寄ったのかわかった。この東京の雑誌を、止められなかったからだ。麻野すみは、もう、土肥の甘い誘いも無視するほど、怒りに満ちてしまったのだろう。
仁美は、とにかく早く読まなくてはならない。麻野すみが、リンメイのことに触れている可能性がある。
どこにも、リンメイのことに触れるようなヶ所はなかった。全編、船渡二郎が、いかに麻野すみを利用して切り捨てたかが書かれてある。麻野すみの自分のことしか書いていない。
「麻野すみさんの名前を貸してほしい」
「株を10％持ってほしい」
すべて、昨年の秋に、船渡二郎が、福岡のルイハシ研究所の工場に、麻野すみを招待した時に、言ったことばだと書いてあった。
「ルイハシブランドの方が有名になりそうだから」
「10％の株の話は覚えがない」
今年の５月から一転したらしい。そして、８月の銀座店のオープンと本社移転である。完全に、麻野すみは過去の人になった。ジャマな人になったと、自分で書いてある。
吾川俊之とのことが、どこにも書かれていない。船渡が、麻野を退けたのは、吾川と麻野の関係がある。多分、土肥雨霧が動いたのだろう。
仁美は、雑誌を車で読んでいて、忘れないように、しっかりカバンにしまった。リンメイが帰っている。イカのピリ辛パスタをつくるのだと言っていた。リンメイに読まれたくない。

イカの匂いがしていた。トマトソースを使っているだろう。
「おいしいワイン買っておいた」
リンメイは、気が向くと、時々早く帰って料理をする。出かける時に、必ず聞く。
「今日は家でごはん食べれるの？」
こうリンメイに聞かれた時は、仁美は、必ず早く帰る。用事をつくらない。月に何度もあるわけではない。

「シャワーする時間ないよ〜もうできる」
仁美は、着替えだけして、テーブルに座って待っていた。
「ワインお願い」
ボウルにいっぱい、チーズとキュウリとレタスが乗っていた。ドレッシングは何だろう。トマト風味らしい。
「さっき麻野すみさんから電話があった」
仁美は、ワインをこぼすところだった。
「有名な人だよね」
「銀座のオープンの時にアラブの素敵な人がいたって先生に言ったらしくて」
「先生って〜留内さんか」
「東京で会ったらしい」
「なんでリンメイだとわかったんだ？」
「おもしろかったから留内さんに話した」
またもやヤバイことになっている。あの日、麻野すみは、仁美を見ないでリンメイを見ていた。
「何か言っていたのか」
「モデルになってほしい」
最悪である。麻野の興味は、リンメイ暴露記事なのか、リンメイのオーラなのかわからない。
「やりたいことがあるからって断った」
「え？」
「いただきます」
リンメイは、イカのピリ辛パスタをおいしそうに食べはじめた。
「うまくいった」
確かに、イカのピリ辛パスタはおいしかった。最高である。
リンメイは、話題の雑誌を知らないのだろうか。留内に聞いてもいないのだろうか。さっき麻野から電話があったとは、どういうことだろうか。留内がリンメイのケータイを教えたことは、まずかったのではないかと思う。
「今日は元気そうだからがんばっちゃおうかな」
まだ食べているのに、リンメイが誘ってきた。

リンメイはよくわからない。ホントに何も知らないのだろうか。ヤバイ状態だと思うのだが、何もないのだろうか。なぜモデルを断ったのだろうか。

〇銀座に本社のある大手の化粧品会社

９月20日だった。友田が編集長の雑誌の発行日である。
仁美は、マンションにいた。
知らない番号からの電話だった。リンメイは、学校に送ってくれと言って、待っている。
「編集長に電話したら、記事は仁美さんが書いているとのことですが」
銀座に本社のある大手の化粧品の会社から頼まれたという電話である。
友田が逃げて仁美に回したのだろう。
「急いでいますので、あとで電話を差し上げます」
仁美は、運転をしながら、このルイハシ事件は、次第に、仁美の方に向かっている気がしてきた。ルイハシ問題は、お金にはならない。時間をとられるのは困る。友田からもらっているルイハシ研究所のスペースは、小さなものだ。しかも、リンメイが危なくなる。守らなくてはならない。
「帰りもはどうなるの？」
「迎えに来れる？」
「うん」
仁美は、さっき電話のあった、銀座に本社のある大手の化粧品会社の代理人に電話をした。
「橋本九朗です」
真面目そうな話ぶりである。
「ルイハシ研究所に丸め込まれたのですか？」
いきなり、すごいことを言う人である。
「何かご用でしょうか」
先月と今月で、まったく記事の印象が変わって、まごついています。
「銀座に本社のある大手の化粧品会社は何が望みですか？」
「ルイハシ研究所が傘下に入ってくれることです」
これはまたすごいことになってきた。

「あなたたち福岡の雑誌は私たちの味方になってくれると思っていました」
「傘下にするのに何か手を打っているのですか？」
「株式交換を申し入れてあります」
仁美には、この話ははじめてである。通常だと、霧島芳郎が、ルイハシ研究所の社内内通者から、情報が入って、仁美にも電話がある。
「船渡二郎さんしか知らないのですね」
「私どもの会社の取締役への提案もしています」
船渡二郎が動けば。大金持ちになれるし社会的地位も獲得できる。この情報が伝わってこないのは、船渡二郎のところで止まっているからだろう。
「船渡二郎は、今後１人でやっていくにはリスクが大きいと知ってほしいのです」
「麻野すみさんのことも同じです。私どもの傘下に入れば、すべてが片づくのです」
確かに、そうだ。ルイハシ研究所に足りないことは、信用である。ルイハシブランドは有名になってきているが、会社の城壁は、まだ固められていない。土足でも入れそうである。銀座に本社のある大手の化粧品会社の傘下に入れば、一挙に解決する。
「私どもと言っている橋本さんと銀座に本社のある大手の化粧品会社はどういう関係ですか？」
「取締役をしていた」

今日は、また新しい詐欺事件が発生して、その取材に出かけなくてはならない。仁美は、運転をしながら、銀座に本社のある大手の化粧品会社の作戦が、最も妥当なものだと思った。丸石半二郎にしても、麻野すみにしても、大阪の化粧品会社にしても、船渡二郎の弱みを突いている。船渡二郎の弱みを突くやり方だと、リンメイ暴露記事が期待されてしまう。
「何か言っていたか」
友田が気にしたのか電話をかけてきた。
「なんとか、逃れました」
友田には、具体的な話ができない。橋本九朗から聞いた話も話せない。信念を平気で変えてしまう。その度に、仁美が右往左往してしまう。友田は、土

肥雨霧に完全にやられている。仁美も、友田と同じように、ルイハシ研究所の味方をしていた方が無難である。土肥雨霧は、リンメイを知っているだろう。多分、リンメイと仁美の関係も知っている。

まだ最高に暑い時間であった。新しい詐欺事件の取材で、被害者に取材していた。名前なども一切出さない約束で取材に応じてくれている。仁美は、こういう約束は、必ず守る。
「左後を見てくれ」
橋本九朗からの電話だった。
65歳くらいだろうか、白髪が多くなっているが、ギラギラした初老の感じである。
黙って電話を切って、取材のお礼を言って封筒を差し出した。何も言わずに、ハンドバックに封筒を入れて、立ち去った。これで、また来月の締めの記事が書けると思った。
橋本九朗が近づいてくるのがわかった。
「どうしてここにいることを知っているのですか？」
「友田さんに聞きました」
もうどうにもならない。知らないと言ったところで、橋本九朗が怒るわけでもない。友田には、銀座に本社のある大手の化粧品の会社を裏切ったという感情を持っていることがわかる。
「なにか用事ですか？」
「船渡二郎には飴作戦でいけると思っていたが、ムチ作戦も必要ではないかと思ってきた」
「協力してくれないか」
「私は友田に雇われている。友田が納得しないことは、私はできない」
「仁美さんはリンメイさんと一緒に住んでいるそうだけど」
とうとう、ここまで来てしまった。
仁美は、いずれやってくるような予感がしていた。誰かが、リンメイ暴露記事を書くように、脅してくると思っていた。それが、銀座に本社のある大手の化粧品会社だとは、意外だった。当社には関係ありませんと言うだろうが。

リンメイのピンチ

〇下関の長府に出向いて

９月23日休日だった。昨日の夜「明日長府に行きたい」リンメイが言った。了承すると、花屋に電話をしていた。何を考えているのか、わかりやすかった。

秋晴れだったが、今年は、何かおかしい。リンメイだって、夏の服装である。

福岡から下関に向かう車の中で、仁美は、思い切って、リンメイに話をした。

「リンメイが船渡二郎の世話になっていたことで、船渡二郎からルイハシ研究所を奪いたい人達が、リンメイ暴露記事を書くように、頼まれる」

「断る」

「強要される」

「わたしは何があっても断る」

「仁美さんが脅迫されるのか」

「私が脅されている」

「編集長が暴露記事を書くまで他の記事を書かせてくれないといったことも考えられる」

「お金がなくなるのか」

「それでも暴露記事は書かない。リンメイに取材はしない」

「私以外から、取材の強要があるかもしれない」

「私が辛い目に合わないようにするからとか言って」

「私は辛いことは慣れているしリンメイも辛いことばかりだっただろうから、今度も、どんなに辛いことがあっても、リンメイ暴露記事は書かない。たとえ収入がゼロになっても」

「わたしの仕事にも影響するかもしれないのか」

「リンメイは、こんなオンナだ」

「航空会社だから、辞めてくれになるかもしれない」

リンメイは、意思が固かった。自分が辛いことは何でもないが、それを世間に曝すことは、ゼッタイにイヤだと言った。
ルイハシ問題は、リンメイだけではない。仁美も同じように、強要される。多分、友田が、ルイハシ暴露記事を書けと言ってくるのは、時間の問題だろう。今は、ルイハシ擁護の立場なのに、橋本九朗の差し出す飴次第で、どう変わるかわからない。
「私はリンメイを守るから信じてくれ」
リンメイは、仁美の横顔をじっと見ていた。

仁美の実家の前は駐車禁止である。また下の国道の駐車場に車を止めて、歩いて仁美の実家に向かった。リンメイは、お墓の花には不似合いな大きな花束を抱えていた。
リンメイは、また今日はオーラがある。時々仁美にはわからなくなる時がある。どうしてリンメイからオーラが発するのかわからない。特別に着飾ってもいない。
「高杉晋作さんは、この道を何度も通ったんだろうね」
「奇兵隊なかなか集まらなかったから」
「これは長州藩のクーデターだよね」
仁美は、何も返事をしなかった。小さい頃は、乃木神社で遊んでいた。高杉晋作のことはよくわからなかった。
「坂本龍馬さんも、ここ通ったんだろうね」
「あの２人は、気が合っただろうね」
「私利私欲がないから」
仁美には、ものすごく不思議である。リンメイは上海人でまだ20歳である。どうして坂本龍馬と高杉晋作が、私利私欲がないことで一致することがわかるのだろう。
リンメイは、高杉晋作のことを話す時は、仁美の返事を期待していない。独り言のようにしゃべっている。
「１週間したらまた来る」
「この花ゴミのようになるから」
仁美の実家は、更地になっている。誰が入っても入れる。一応、観光客が

入っても、おかしくはない。隅にお墓があるのを不思議に思うだろうが。リンメイは、花が風で飛ばされないように、石で囲んだ。花が大き過ぎて、花瓶をはるかに溢れてしまう。
リンメイは、今日は、砲台にも火の山にも行ってみると言った。長府藩が、攘夷を実行して、航行する外国船を攻撃した砲台である。
「高杉晋作さんは香港みたいになりたくなかったんだよね」
「来てみるとすご狭いけど」
「だけどすぐそこに船が見える」
仁美は、ほとんど何もしゃべらない。リンメイが１人でしゃべっている。
「リンメイはどうして高杉晋作なんだ？」
「度胸あるし勇気あるし私利私欲ないし命惜しくないしカッコいい」
「高杉晋作さんいなかったら明治維新なかったよな」
「長州は幕府と戦わなかったよな」
リンメイは、独り言のように話す時は、日本語が流ちょうになる。

まだふぐの季節ではないが、下関では、年中、ふぐが食べられる。
「お酒はいらない」
「冷たいワインにしてください」
仁美は、リンメイが、ふぐとワインが合うと感じると思った。
「飲まない」
「私に遠慮しなくていい」
仁美も、ふぐは久しぶりだった。リンメイは、冷たいワインを、おいしそうに飲んだ。
「この幸せいつまで続くんだろうね」
リンメイにとっては、仁美と一緒の今日は、ホントに幸せを感じるだろうと思った。それは、仁美の実家に持って行った大きな花束でわかった。

○長府の写真がメールされた
リンメイは、朝早く起きていた。学校だろう。シャワーをして化粧をして、ごはんが食べられるかどうかわからない。今日は24日金曜日、お昼からアル

バイトだろう。アルバイトの日は、早く起きて、お化粧に時間がかかる。
仁美は、顔だけ洗って、ピザ生地でパンを焼いて、卵とハムを焼いて、キュウリを切った。
着替えておかないと、送ってくれになる。
「ちょっとメール見て」
リンメイが何を言っているのかわからなかった。リンメイのケータイだった。昨日の長府の写真だ。仁美の実家で花束を持っているリンメイとふぐ料理店に入るリンメイである。仁美は、慌てて自分のケータイを見た。同じ写真が送られている。どうしてリンメイしか映っていないのだろう。何かのメッセージなのか。
「ごはん食べる」
「リンメイ、注意してくれ、夜遊ぶのもしばらく控えてくれ」
リンメイは返事をしなかった。リンメイが返事をしない時は、わかっているのだ。そうすると言っている。ダメな時は、イヤだと言う。
仁美は、リンメイを送っていった。学校にいる限り大丈夫だろう。お昼からの航空会社のアルバイトが気になる。
すごいまずことになる予感がした。仁美は、はまってしまう。いつもいつもリンメイのことが気になってしまう。
昨日、ずっと監視されていたのだろう。福岡から後をつけたのだろうか。
困ったことになった。仁美のこういう慌て方も読まれているのだろう。
リンメイを誰かが傷つけるだろうか。リンメイを傷つけて、誰かにメリットがあるだろうか。そうではない。これは、明らかに、リンメイ暴露記事へ向かわせる圧力だ。
仁美は、まだ朝なのに、疲れてきた。リンメイをターゲットにしているメッセージだ。自分であれば、どうにもでもなる。いままでだって、いろいろあった。圧力はかけられた。対処の仕方も、一応は心得ている。しかし、リンメイが狙われる時、仁美は、何をどうしてよいのかわからない。誘拐されるかもしれない。監禁されて、船渡二郎との生活を強制的に聞き出されてしまうかもしれない。リンメイは、船渡二郎のマンションから逃げているのだ。逃げるには理由があるだろう。もちろん、仁美も聞いてはいない。

「迎えにきて」
リンメイから、電話があった。
「アルバイトクビになった」
仁美は、慌てて、車に向かった。
７時になっていた。ごはんだけ炊いていた。仁美は、詐欺事件の記事を、集中して書いていた。
「さっき、６時ごろ、いきなり解雇された」
「しばらくは貯金あるけど心配」
誰かが、リンメイを追い詰めている。リンメイ暴露記事に応じなければならないように、工作している。卑劣である。
「どうしたらいい？」
「学校だけにしておけるのか」
「学費もあるしタイヘン」
「お金は自分に言ってくれないか」
リンメイは、多分、どこで働いても、同じことになるだろう。このルイハシ問題が片づかない限り、難しい。
仁美は、もう受身的にルイハシ問題を見ているわけにはいかなくなった。戦わなければならなくなった。
何を戦うのか。誰と戦うのか。
「わたしのためにゴメン」
「リンメイ、これは私の問題でもあるからゴメンとか思わないでほしい」
リンメイが仁美にワルイと思っていれば、いつかは、そこを狙われる。仁美は、リンメイと話し合わなければならないと思った。２人で戦わなければならない。

その夜、仁美は、今までのルイハシ問題のすべてを、リンメイに話した。そして、待っていては、暴露記事に向かわされてしまう。
リンメイは、よくわかってくれた。どうしてアルバイトをクビになったのかも、理解できた。戦わなければならないこともわかってくれた。
「今日おかしな写真が送られてきたんだけど、霧島さんですか？」
「どんな写真ですか？」

「昨日リンメイと長府に行った時の写真で、リンメイしか映っていない写真です」
「リンメイが霧島さんに追い詰められる」
「確かに、暴露記事を書いてくれると、船渡を脅すことができるから助かる」
「リンメイも私も応じるつもりはありません」
「霧島さんはリンメイのアルバイトのことも知っていたわけでしょ？」
「クビになったのですか？」
「霧島さんですか？」
霧島は黙ってしまった。
「あなたと戦いますよ？」
「私は仁美さんをよく知っている。あなたは何をするかわからない。敵にはしたくはない」
「じゃ〜リンメイを追わないでください」
「リンメイさんは上海のそれなりの人達から預かった人だから責任がある」
「リンメイを守っていたのですか？」
「そうだ」
「船渡さんにリンメイを預けたのはどうしてですか？」
「あそこまでワルだとは思わなかった」
仁美は、リンメイの前で霧島に電話をした。もう、リンメイにもよくわかっておいてほしい。霧島を信用すれば、丸石半二郎と霧島芳郎は、リンメイを追い込まないのだろう。信用はできないが、写真を送ってきたのは、霧島ではなさそうである。

〇霧島と橋本と麻野と風間と写真

９月25日だった。土曜日で、リンメイは、学校が休みだろう、仁美が出かける時は、まだフトンの中だった。
「ケータイ見て」
リンメイが、フトンの中から言った。
リンメイがアルバイトの航空会社を出るところが映っている。

オレが仕掛けたというメッセージだろう。もう、リンメイは、毎日追われている。
「必ず解決するから、落ち込まないように」
「うん」
仁美は、車を止めて、橋本九朗に電話をした。
「毎日リンメイの写真を送ってくるのは橋本さんですか？」
「いかがわしい写真ですか？」
仁美は、返事をしなかった。
「なぜ私を疑うのですか？」
「リンメイが暴露記事に協力するまで追い込むのではないかと疑っています」
「疑われても仕方がない状況だけど」
「暴露記事には協力しません」
「聞きました」
「今日送られた写真は卑劣です」
橋本九朗は何も言わなくなった。仁美のカンである。橋本九朗は、写真のことは何も知らない。
「私は、戦いますから」
「わかってます」
仁美は、今日は取材に行こうと思って早く出た。気持が、それどころではない。
「麻野すみさんはいらっしゃいますか？」
「12時に事務所にいらっしゃいます」
仁美は、福岡空港に向かった。毎日写真を送ってくるのは誰なのか。つきとめなければならない。幸いなことに、今は、リンメイだけが狙われている。いずれ仁美の写真も送ってくるだろう。仁美が暴露記事を書かざるを得ないように仕向けるだろう。
この戦いはメンドーだ。相手がよく見えない。誰だかわからない。

「アポイントがないのに困ります」
麻野すみの事務所の社員は、事務所にも入れてくれなかった。告白記事のお

かげで、麻野すみの周辺は混乱している。船渡二郎は、福岡の片田舎から出てきた、凄い成功者なのだ。その成功者に矢を放ったのだ。当然、麻野自身にも、降りかかってくる。しかも、仁美は福岡の雑誌記者である。麻野すみには会わせたくはないだろう。
もう10月に近いのに、東京は暑かった。12時ピッタリに、麻野すみが事務所の前に現れた。
「以前に電話したことのある福岡の雑誌記者ですが」
「２分くらいの立ち話でいいですか？」
警戒しているし、忙しそうだ。
「リンメイに電話をしていますが」
「銀座のお店で見かけてモデルにピッタリだと思って」
「あなたは一緒にいた男の人ですか？」
「他にリンメイにやってほしいことはありますか？」
「船渡さんとのことですか？留内さんから聞きました」
「リンメイに毎日写真を送ってくる人がいるんです」
「なぜですか？」
仁美のカンである。麻野は、まだリンメイ暴露記事に気がついていない。リンメイが船渡二郎の世話になっていたことは聞いている。仁美は、あなたが写真を送らせているのかとは、聞けなかった。先のことはわからないが、麻野は、写真の送り主ではない。誰かに、頼んでいることもない。
仁美は、３分麻野すみと立ち話をして、その場で、風間平助に電話をした。
「今東京にいるんですけど大阪に行こうかと思っているんです」
「何があったのですか？」
「リンメイと私に毎日写真を送ってくる人がいるんです」
「誰が送っているのか探しているのですか？」
「戦うつもりです」
「あなたと戦いたくないから姿を見せないのではないですか？」
「風間さんはどうなんですか？」
「いかがわしい写真ですか？そういうことに興味はありません」
「大阪の化粧品関係で今回の写真を撮っているのでしたら戦うと言って欲しいのですが」

「意味がよくわかりません」
仁美は困った。このまま大阪に行っても、何も収穫はないだろう。とりあえず、リンメイが気になる。福岡に帰ろうと思った。飛行機の中で考えないといけないことがたくさんある。

リンメイと仁美に写真を送っているのは、明らかに、あるメッセージである。それは、リンメイが船渡二郎暴露取材に応じることだ。多分、１千万円くらい用意される。リンメイが取材に応じても、仁美がリンメイと一緒に書いても、ＯＫだろう。その記事は世に出ることはないだろう。船渡二郎が、株30％か10％で、交換する。今だったら１株１２００円である。表面上は、何もおかしいことはない。もし、船渡二郎が、株式売却に応じない場合は、リンメイ暴露記事が表面に出ることになる。最悪のことになる。
リンメイの収入の道を閉ざして、次は、仁美の収入の道を閉ざすのだろうが、それには、友田を引き入れないとできない。友田は、仁美が書く記事のすべてを握っている。友田は、現在は、土肥雨霧に寝返っている。ルイハシ研究所側なのだ。
複雑である。仁美とリンメイにとって、好ましい方向へ事態は向かっていない。

〇リンメイがいなくなった

９月26日日曜だった。昨日羽田からの電話にも、福岡空港からの電話にも、リンメイは出なかった。急いでマンションへ帰ったのだが、リンメイはいなかった。麻野すみと会う前の電話では、何事もなかった。
仁美は、一睡もしていない。最悪のケースを頭が勝手に描いてしまう。詐欺事件の取材に出かけないといけない。わかっているが、それどころではない。
昨日仁美が動きまわったことが影響している。はっきりしている。誰かが、焦ったのだろう。リンメイをここから連れ出すのはどうしたのだろう。ムリに連れ出した様子はない。リンメイが自分で出て行った。なんだろう。仁美に電話もしないで出て行くだろうか。しかも、夜帰って来ない。自分の意思

なのか、帰ってこれない状況ができているのか。なぜ電話が来ないのだろう。仁美が心配して眠れないことは知っているだろう。電話を使えない状況なのか。
仁美は、リンメイのパソコンを見たことがない。メールを調べたことがない。今回は、見ないといけない。ブロックされていた。もう見当もつかない。
仁美は、頭が疲れた。ベッドに行って横になった。多分、打開する何も手段を持っていないから頭が諦めた。すぐに眠ったのだと思う。
ひょっとして、夜になったのではないかと思った。それほど時間の感覚がない。ケータイを見た。40分しか眠っていない。電話もない。
０２０２かもしれない。２階の２号室だ。この部屋だ。パソコンのブロックが外れた。
仁美は、もうことばをなくしてしまった。リンメイは、留内有子と一緒だ。
「写真を送っているのはわたしだ」
「話があるから１人で出てきて」
13時30分である。昨日、麻野すみと仁美が会って、すぐである。多分、麻野から留内に電話があった。
麻野は、リンメイをモデルに引き込むために、留内にリンメイの後を追わせて、写真を撮っているのだろうか。そのために、船渡二郎とのことで、リンメイを脅しているのだろうか。留内はリンメイの先生だ。何をやっているのか。留内は、仁美の雑誌記者仲間でもある。

「リンメイがいると思うんだけど」
「話があるから来てください」
留内有子は、住所を仁美に知らせた。仁美は、留内の住んでいるところを知らなかった。考えてみたら、リンメイと仁美のケータイに写真を同時に送れるのは、留内しかいない。
小キレイなマンションだった。
「黙って引っ張り出してゴメン」
「あなたに迷惑かかるからリンメイわたしが預かろうと思って」
「リンメイのことはあなたに何も関係ないことだから」

リンメイはベッドルームにいるとのことだった。姿を見せない。
「もうあなたに連絡しないように言ったの」
「パソコンね？」
「もしパソコンを見なかったら私は毎日探しまわっていた」
留内は、リンメイも納得していると言った。
確かに、今回の出来事は、仁美には何も関係はない。リンメイが船渡二郎のマンションを逃げ出した日に、たまたま会った。それだけの関係である。
「いいよね？わたしがリンメイを預かるから」
「リンメイを守れるのですか？」
「それはわからないけど少なくともあなたには迷惑がかからない」
留内のことばにも、一応の説得力がある。リンメイも、仁美に迷惑がかかるからと言われれば、留内のマンションに留まるのかもしれない。
その時、ベッドルームであろうドアが開いて、リンメイが出てきた。バッグを持っていた。
「先生どうもありがとうございました」
リンメイは、深々と留内に一礼して玄関に向かった。
留内は、完全に不意をつかれた感じだった。仁美は、一瞬、とまどった。そして、留内に、何を言えばいいのかわからなかった。
「じゃ〜また」
おかしなあいさつになった。リンメイは、靴を履いて、外へ出てしまった。
仁美とリンメイは、車まで黙っていた。仁美は、何を話せばよいのか、わからなかった。
「迎えに来てくれてありがとう」
リンメイは大粒の涙を流しはじめた。とにかく、車を出さないといけない。
リンメイの涙で、おおよその見当がついた。

〇架空のリンメイ暴露記事

「ごはん食べて眠りたい」
リンメイも昨日は眠っていないだろう。仁美が探しまわることを知っている。仁美は、近所のスーパーマーケットで刺身と豆腐を買った。お昼をごは

んにしようと思った。２人でスーパーマーケットを歩いたが、誰も追ってはいない感じがした。昨日までは、留内に追われていたのに、気づかなかった。写真も撮られていたのに。

確か、刺身ごはんを食べて２人で眠ったのは、３時頃だったと思った。ケータイを見ると、もう夜中の11時だった。仁美は、起き出して、カップラーメンを食べようと思った。
「わたしも食べる」
フトンの中から、リンメイの声がした。そして起きてきた。
「わたし食べたらまた寝るから」
「わたしここじゃないと眠られない」
「聞いてるの？」
仁美は黙っていた。
「あなたが来なかったらわたしは船渡さんとのことを話していた」
「探してくれてありがとう」
またリンメイは大粒の涙になった。
リンメイは、このような辛い仕打ちを何度も経験しているのだろう。その度に大粒の涙になったのだろうが、リンメイの人生に転機はなかった。辛い出来事がなくなるという転機はなかった。昨日の夜から今日にかけても同じだった。
「学校で留内と会うことになるけど平気なのか」
「平気」
「学校でも、何かしらのことがあるかもしれない」
「アルバイトをクビになるようなこと？」
「何があっても諦めないで欲しい。昨日はリンメイは諦めた」
カップラーメンもおいしい。
「先生はまだわたしを追いかけるのかな～」
「留内が、リンメイと私を切り離せないことを、わからせないといけない」
リンメイは、やっと留内の作戦が見えてきたようだ。しかし、もう、仁美に迷惑がかかるからという作戦は通じない。
「わたしと一緒に戦ってくれるのか」

「私が戦うと言っているのにリンメイが諦める」
「留内先生に、これは仁美さんの問題ではなくてリンメイの問題だと言われると苦しい」
「リンメイの問題は私の問題でもある」
「どうして」
「愛してくれているの？」
リンメイの目があやしくなった。そのまま仁美に向かってくる。

９月27日月曜日になった。
「送って行くから」
慌てているリンメイを見て仁美は言った。
「帰りも電話してもいいの？」
「そうして」
ヒゲもそのままだが、仁美は、リンメイを送って行った。
そして、帰りだった。
「リンメイが狙われる」
留内からの電話だった。
「リンメイ暴露記事１千万を売り出した」
「いつ」
「一昨日」
「３人から注文があった」
「雨森三郎から今日脅迫の電話があった」
「福岡は交通事故が多いから気をつけろ」
「リンメイもわたしも危ない」
「買いたいと言った３人とは誰だ」
「言えない」
「雨森とは誰だ」
「土肥雨霧の代理だと思う」
「雨森を知っているのか」
「はじめて聞いた」
「どうして土肥雨霧の代理だとわかるのか」

仁美は、雨森三郎からかかった電話を教えてもらった。
「もしもし」
教えられたケータイに雨森三郎が出た。
「土肥雨霧さんにはお世話になっています仁美と申します」
「雑誌記者仲間の留内が恐がって知らせてきたのですが」
「望みは何ですか？」
「船渡二郎に１千万円出せと脅迫したからだ」
「撤回すればいいのですか？」
「そうだ」
「わかりました。努力してみます」
仁美はすぐに留内に電話をした。
「お金が欲しいのですか？おもしろがってるのですか？」
「１千万円が４つになるかもしれない」
「そんなもんで命を売るのですか？」
「なんとかして」
「撤回しなさい」
「わかった」
「いますぐ撤回してください」
「わかった」
確かに、仁美や留内のような雑誌記者をしていると、１千万円の記事など、夢のようである。それが、自分の手の届くところにあれば、許しがたいことであっても、筆が動く可能性はある。ひょっとして、もっと単純に考えていたのかもしれない。リンメイ暴露記事は、世に出ることはない。何かの駆け引きの材料に使われる。リンメイにも取材費を払おう。４千万円である。
船渡二郎は、４千万円を払っても、リンメイ暴露記事を止めようとするだろう。それよりも、他の方法で止めさせるかもしれない。それは、留内とリンメイだ。
「１千万円で船渡二郎だけに売ることにした」
「実は架空のリンメイ暴露記事とは言えなくなった」
「なんとかして」
もう最悪である。架空のというより、書かれていないのだ。リンメイ暴露記

事はない。船渡二郎は、記事は書いていなかったと言っても信じないだろう。困ったことになった。買う約束をした３人は、架空だったと言えば、それで諦めるかもしれない。
「もしもし」
仁美は、雨森三郎に電話をした。
「今留内さんから電話があったと思うんだけど、実は、リンメイ暴露記事は書かれていない」
「船渡二郎は信じないだろう」
「留内はどのくらいの価値があるか試した」
「とにかく１千万円払うから原稿を持ってきてくれ」
「今後この件で何もしないことが条件だ」
「約束を破ればこっちも約束を破るだけだ」
「リンメイ暴露記事は書かれていない」
「原稿を他に流さないとさっき約束した」
「あなたは留内の何なんだ」
「雑誌記者仲間だ」
「リンメイと３人が組んでいるのか」
「留内が考えたことでリンメイ暴露記事はない」

「今リンメイと一緒にいる」
「リンメイに何度聞いても誰にも話したことがないと言っている」
「一緒に住んでいる仁美さんにも話してないと言っている」
「本当なのか」
雨森三郎は福岡に飛んできたのだろうか。福岡にいたのだろうか。どうしてリンメイと一緒にいるのだろうか。
「リンメイに手を出さないでくれ」
「リンメイの言っていることは本当だ」
仁美は、電話しながら車に向かっていた。リンメイが危なくなってきている。
「リンメイを迎えに行く、どこにいるのか」
「学校だ」

仁美は、驚いてしまった。なぜ雨森三郎が学校にいるのだろう。
仁美は、いつものところでリンメイを待っていた。多分、雨森三郎につけられるだろう。どこからか、見ている。
「大丈夫か？」
「平気」
「雨森三郎はどうして学校にいるんだ？」
「中国人留学生を応援するＮＰＯだと言って来た」
「学校で会うから安心だと思った」
「雨森三郎は船渡二郎のために働いている」
「聞いた」
ながい１日だった。

〇留内有子の交通事故
９月28日リンメイは学校に行くと言った。
「大丈夫なのか？」
「学校が１番安全だと思う」
確かにそうだ。このマンションにいても、誰かを装って入り込むことは可能だ。
エンジンをかけようとした時。雨森から電話があった。
「橋本九朗から連絡があった」
「株式交換に応じるよう催促だ」
「銀座の大手の化粧品会社がルイハシ研究所を傘下に入れたがっている」
「リンメイ暴露記事を匂わせている」
「ないはずのリンメイ暴露記事が一人で歩いている」
「私が誓って言い切れる、ないものはない」
「覚悟はできているんでしょうね」
「もちろん」
「リンメイ、今は、リンメイ暴露記事はないことが、リンメイを守ることになっている」
「どうしてこうなったのか」

「留内が欲を出したからだ」
「あたかもリンメイ暴露記事が完成したかのようにオファーしたからだ」
「聞かれたけど、危なかったけど、何も話していない。あなたが来てくれた」
「リンメイは悔しいかもしれないけど、今は、このことに口を閉ざすことが、リンメイを守る道だ」
リンメイは、よくわかっていた。もともと、忘れてしまいたい辛い出来事なのだ。思い出して記事にするようなことはしたくはない。
「留内は学校にいるのか」
「昨日は見ていない」
リンメイにとって最も危険な人物は、留内かもしれない。

「先生が交通事故」
仁美は、詐欺事件の取材中だった。
「病院にいる」
「容態はどうなんだ？」
「緊急手術をしたらしい」
「どうしよう」
「１時間したら迎えに行くから学校から出ないで」
「わかった」
仁美は、取材をキチンとしなければならない。詐欺事件の記事が書けなくなったら、留内と同じように、１千万のリンメイ暴露記事にこころが動いてしまう。
「どうもありがとうございました」
「お名前などが表に出ることはありません」
仁美は、すぐに、雨森三郎に電話をした。
「留内が交通事故だ。約束が違う」
雨森三郎は黙ってしまった。
「もしリンメイに何かあったら、私はあなたを許さない」
「私は何も知らない」
「あなたに、福岡は交通事故が多いと言われたと言っていた」

「言った」
「なぜだ」
「私はやっていない」
仁美は、話しながら、エンジンをかけていた。
仁美は、リンメイを乗せて、病院へ急いだ。
「リンメイはどうして留内の事故のことを知ったんだ？」
「学校に連絡があってみんなに知らされた」
「多分まだ話もできないだろうから、私は様子を見るだけにする。リンメイは車で待っていてくれ。ドアを開けないように」

仁美は、救急車で留内の世話をした救急隊の方に電話をした。病院も、しつこく聞く仁美をウルサく感じたのだろう。もちろん面会はできない。
「車道を歩いていたのですか？」
「ひき逃げですか？」
「街路樹に飛ばされたのですか」
「骨折だけですか？」
忙しそうで、それしか話してくれなかった。
なぜ車道を歩いていたのだろう。故意だろうか、ただの事故だろうか。よくわからない。どちらにしても、ひき逃げ犯人を捕えればわかることだ。

〇留内の記憶喪失
９月29日水曜日だった。リンメイを学校に送って、仁美は、留内が車にはねられた道路に寄ってみた。歩道がしっかりしている。なぜ車道に出なければならなかったのかわからない。飛ばされた街路樹まで３メートルはある。よく骨折だけで済んだと思う。反対車線に車を止めて、考えてみた。これは、事故なのだろうか。
「フツウの病室に移ったのですか？」
「面会はまだできないのですか」
「え？記憶喪失？」
頭も打ったようだ。今日は、病院に行くのは止めておこうと思った。

もし故意の事故だとすると、留内がいては困る人物だ。架空のリンメイ暴露記事にオーダーがあったのは、３人だと言っていた。この３人は、留内が死んでは困るだろう。やはり、雨森三郎と土肥雨霧と船渡二郎だろう。留内が交通事故で記憶喪失してくれれば、これほど良いことはない。いまごろは、ラッキーと言っているだろう。
それにしても、留内は、なぜ車道に出てしまったのか、あるいは、車道を歩いていたのか。
「トントン」
誰かが、窓をたたいた。
「ここに止められると困りますけど」
「さっきから止めていますけど昨日の事故のことですか？」
「警察のものです」
仁美は、名刺を出した。雑誌記者は、こういう時に便利である。
「なぜ車道を歩いていたのか不思議に思いまして」
「歩道の工事中だったんですよ。歩道の奥を通ればよかったのに車道に出たんです」
つけられていたとすると、チャンスがやってきたのかもしれない。
「車は見つからないでしょうね」
「見つかりましたよ？さっき」
「どこにあったんですか？」
「３キロ先のレストランの駐車場です」
「大破ですか？」
「そうでもありません」
「犯人は」
「犯人？なんですか？」
仁美は、慌てて、お礼を言って、３キロ先のレストランの駐車場に急いだ。もう車はなかった。レストランは、何事もなく動いている。
仁美は、そのファミリーレストランでお昼を食べようと思った。駐車場の見える窓際にしてもらった。流行ってはいない。ガラガラである。
「昨日の事故の犯人の車がここにあったんですか？」
水を持ってきてくれたウエイターに聞いてみた。

「左側のライトが壊れていました」
「誰が運転していたか気づかなかったんですか？」
「わかりません」
「今日のランチってあるんですか？」
仁美は、単なる事故のひき逃げだったら、深追いはしない。脅しが実行されたのだったら、リンメイも危ない。

仁美は、病院に行ってみようと思った。
「まだ面会できません」
病室まで行ってみた。誰もいなかった。ドアが開いていた。入るつもりはなかった。奥のベッドから留内が見ていた。１人だった。留内は、仁美がわからないはずである。しかし元気そうに見える。手術後とは思えない。
「困ります」
クスリでも取りに行っていたのだろう。看護師が来た。留内が、いきなり、クスリ袋のようなものを仁美の方に投げた。
「記憶がないのでイライラしてるんです」
仁美は、その袋を看護師に渡した。
「リンメイ」
仁美は、小さく書かれたリンメイという文字を見逃さなかった。
「留内さんありがとう。早くよくなるように努力します」
仁美は、完全に理解した。留内は、リンメイが危ないと言っている。自分は記憶喪失で守ると言っている。
仁美は、そのまま学校へ急いだ。外で待っていようと思った。いつもの場所ではなくて、校門の近くで待った。駐車禁止だ。早く電話が来てくれると助かる。
リンメイの電話で目が覚めた。ウトウトしていた。
「いつものところで待ってるから」
「もう来てるからそこに行く」
仁美は、車を出した。角を曲がったところにリンメイがいるはずである。
１台の車が猛烈なスピードで曲がってきた。そのまま走り去った。１００キロは出ている。右折した。左にリンメイがいるはずである。

「車が突っ込んできた」
「お店の中にいる」
リンメイの落ち着いた声だった。仁美は、車を止めて、雑貨屋さんに入った。リンメイは、仁美を待つ間、この雑貨屋さんで買物をしている。
「運転手を見たのか」
「男だった」
「歩道へ乗り上げてきたのか」
「ビックリしてお店に入った」
留内を襲った運転手と同じだろう。これは困ったことになった。歩道にまで追いかけられたら、逃げ場がない。

〇品川ナンバーの車
９月30日になった。仁美は、警察署に行くことを迷っていた。仁美は、雑誌記者である。リンメイが保護願いなどを出せば、理由を明確にしなければならない。雑誌記者の餌食になる可能性がある。思わぬところから、リンメイ暴露記事になってしまうこともあるだろう。そうかといって、留内の交通事故といい、昨日のリンメイが歩道で追われた事件といい、簡単に防げるものではなさそうだ。まだ目覚めていないリンメイを見ながら、仁美は考えていた。仁美に、防ぐことができるのだろうか。留内の交通事故とリンメイが歩道にまで追われた事件が繋がっていることは、仁美以外には、誰も知らないことだ。
仁美は、ベッドから起きて、ピザ生地をパンにして焼きはじめた。雨森三郎に電話をした。
「昨日、リンメイが、私の目の前で襲われた」
「昨日は何もなかったが、このままでは、今日にも危ない気がする」
「警察に行かざるを得ないかもしれない」
「もちろん、細かく聞かれて、リンメイ暴露記事のようになってしまう可能性がある。望んではいないが、命がなくなるよりはこっちの選択の方を選ぶ」
多分、リンメイは、この電話を聞いているだろうと思った。命が危ないの

だ。船渡二郎にとっては、こんなに大きなリスクを負ってまでも、リンメイ暴露記事は止めなければならないのだろう。リンメイ暴露記事に書かれる内容を知っているのは、リンメイと船渡二郎だけである。仁美にもわからないし、聞くつもりもない。
リンメイがシャワーから出て来た。
「学校へ行くのか」
「学校が１番安全だから」
「校門から出ないでくれ」
「わかった」
リンメイは、ピザ生地のパンにチーズを乗せておいしそうに食べていた。
「大丈夫か？」
「わたし警察には行かない」
「ずっとこんな生活だから」
「今日何もなかったらそれだけで幸せ」
リンメイは、紙切れを差し出した。品川ナンバーだった。
「よく覚えたな」
「うん」

警察だと、簡単に車の持ち主がわかるだろう。犯人に近づくことができる。仁美は、リンメイを校門まで送って、どうしたものか考えた。黒いセダンで国産車である。雲を掴むような話だ。じっとここで考えていても、どうにもならない。ふとサイドミラーを見た。黒いセダンが、校門を曲がってきた。カンだった。左のコンビニに入るかのようなしぐさで、車を止めた。黒いセダンは、そのまま行き過ぎた。品川ナンバーだった。間違いない。リンメイを追って校門まで行って、仁美を追っているのか。黒いセダンが、５台前に進んだのを見て、仁美は、強引に、６台目に割り込んだ。この品川ナンバーを逃がしたくはない。
５台後にはいるが、仁美が後にいることは気がつくかもしれない。黒いセダンは、高速に入って、門司方面に向かった。急いでいる感じではない。１キロ先を走っている。
門司のインターで降りた。ひょっとすると、黒いセダンは、仁美に気がつい

ていないかもしれない。車が極端に少ない。インターを降りてすぐのホテルに入って行った。仁美は、遠くで見ていた。ここで30分待とうと思った。仁美には経験がある。慌てて追いかけると、待ってましたとばかりに、車が出てくる。つけられているのを察している。
40分待った。仁美は、ホテルに向かった。黒いセダンを探した。駐車場に、黒いセダンはいなかった。
「駐車場はここだけですか？」
お客であろうか、手慣れていそうな人に聞いてみた。
「裏にあります」
左から３番目に黒のセダンがいた。仁美は、１番右に止めて、トイレに向かった。ここで何時間も、黒のセダンを待つことになるかもしれない。黒のセダンを運転している犯人は、仁美を知っているかもしれない。仁美は、黒のセダンの犯人を知らない。顔を見ていない。
大きなホテルではない。ロビーが喫茶にもなっていた。裏の駐車場へも、ここを通らなければ行けない。しばらくここにいることにした。誰か出たら、追いかけるしかない。犯人がわからない。
10分いたが、やはりホテルである。出入りが多い。コーヒーを飲みほして、車に向かった。黒のセダンはいるのだろうか。

２時間待って、仁美は、ホテルの駐車場を出た。ホテルから駐車場を出て、インターに入る手前で待った。並木越しにホテルが見える。ここで夕方まで待つことになるのかもしれないと思った。リンメイを狙っているのだったら、夕方だろう。
仁美は、この犯人はどういう男だろうと考えていた。留内を襲ってリンメイを続けて襲って、そして今日である。もちろん、留内を襲ったのが、この黒いセダンの男だと断定できるものはない。そして、平気でこのホテルで休んでいるとすると、怖さを感じる。それが仕事なのだろうか。
「もう帰るから」
リンメイから電話だった。まだ３時である。
「30分かかるから出ないで待っていてくれ」
「わかった」

仁美は、高速を飛ばした。
途中でおかしなことに気がついた。さっきから３台後に、黒のセダンがいる。仁美は、車線を変更してスピードを落とした。その黒のセダンは、仁美と同じように車線を変更した。仁美は、また車線を変更して、追い越し車線だが、スピードを落とした。後の車が慌てて車線変更した。黒のセダンが近づいてきた。サングラスに黒シャツの男である。何事もないように、そのまま進めている。品川ナンバーだった。どうしてあの品川ナンバーの車が、仁美の車を追うことになったのだろう。全く理解できなかった。仁美がホテルの駐車場を出るまで、この黒のセダンは、駐車場に止まっていた。わけがわからない。
仁美は、スピードを上げて、リンメイの学校へ急いだ。先にこの黒のセダンに着かれたのではまずい。今日は、黒のセダンを追うのを諦めた。

仁美は、自分で焼いたピザを食べワインを飲みながら、リンメイに今日の出来事を話した。
「どうして黒のセダンはあなたの後にいたの？」
「それがわからない」
「２台いるのか」
２人で話しても納得のいかないことが多い。しかし、今日は何もなかったが、明日は、またリンメイが襲われるかもしれない。
「リンメイ、どんな小さなことでも、情報交換しておかないといけない」
「警察に頼まないのだったら、自分たちで守らないといけない」
「わかった」
しかし、仁美には、守るだけで解決するとは思えない。

〇黒のサングラスの男
今年は10月になっても、秋らしくならない。
「今日飲み会がある」
リンメイが車の中で言った。迷っているのだろう。
「場所はパソコンにメールしておいた」

仁美は、返事をしなかった。これからずっとこうやってビクビク暮らすのだろうか。何か打開しないといけない。リンメイは、常にビクビクして生きてきた。飲み会会場からマンションまで仁美がいてくれたら、それで助かると思っている。
仁美は、リンメイを学校で降ろして、そのまま門司へ向かった。まだ９時30分だった。
霧島から電話がかかってきた。
「リンメイを守りきれるのですか？」
「リンメイは警察の手を借りたくないだろうし、あなたは決め手を持っていないし、難しい」
「誰がやっているのか、よくわかっていない」
「あのサングラスの男をよく見て」
「この前リンメイを襲って失敗した時に捕まえればよかった」
「あれは誰なんだ」
「仁美さんがビックリするような人だ」
「どうして知っているのですか？」
「仁美さんの車の後に黒のセダンがいてその後に私がいる」
「今もそうだ」
仁美は、慌ててバックミラーを見た。３台後に黒のセダンがいる。門司に行こうとしているのに、仁美の後にいるのだ。そして、その後に霧島がいる。
霧島は、なぜ仁美に自分を知らせているのだろう。誰をつけているのか、仁美なのかリンメイなのかサングラスの男なのか。霧島は、丸石半二郎と行動を共にしている。
黒のセダンの行く先はわかっている。仁美は、小倉インターで高速を降りてみた。黒のセダンは、追ってこない。霧島の車がわからないが、仁美の後に車はいない。霧島は、黒のセダンを追っているのか。
「霧島さんはリンメイを守ろうとしているのですか？」
「船渡二郎は何をするかわからない」
「また連絡する」
仁美は、高速に乗って、警察へ行こうと思った。留内のひき逃げ犯人の捜査はどうなっているのだろう。多分、まったく進んでいないだろう。さっきま

で、仁美の車の３台後にいた。留内の病院にも行ってみようと思った。それにしても、あの黒いサングラスの男は誰だろう。

仁美は、親しくしてもらっている刑事をお昼に誘った。時々、詐欺事件のことでは、情報交換をしている。
「９月28日のひき逃げ事件のことだけど」
仁美は、欲しい情報について電話しておいた。
「車は門司で盗まれた車で盗難届が出ている」
「犯人に結びつくものはまだ見つかっていない」
「事故でひき逃げの線で追っている」
「盗難車だから犯人割り出しが難しいかもしれない」
これだけ聞けば十分だった。留内のひき逃げ犯人は、リンメイも襲おうとしているし、襲った。
「詐欺事件じゃなくて、今度はひき逃げをやるのか」
やむなく、仁美は、詐欺事件の情報を漏らした。あくまで交換条件である。お昼のヒレカツ定食くらいで、ひき逃げ情報をくれることはない。
「ひき逃げされた被害者はどうなっているのか」
「記憶喪失状態だ」
仁美は、留内の入院している病院へ行こうと思ったが、止めた。留内の演技が成功している。それだけわかればよい。留内が記憶喪失であれば、留内が、再び襲われることはないだろう。

仁美は、詐欺事件の取材のために、長崎にいた。取材事件は追わないと、生活に困る。
リンメイからケータイメールが入った。
「飲み会に移った」
短い内容だった。
友田から電話がかかってきた。
「ルイハシブランドが勢いがあるらしい。福岡出身ブランドとして取り上げてくれ」
「11月号にしてくれ」

「わかりました」
多分、土肥雨霧の依頼であろう。友田は、すっかりルイハシ派になってしまった。宣伝ももらえるし、営業上でも助かっている。仁美も、11月号の枠を、詐欺事件の他にもらった。
仁美は、少し急いで福岡に帰っていた。リンメイが飲み会を途中で切り上げれば、間に合わない。まだ何も連絡はない。あの黒のセダンはどうしているだろう。仁美は、飲み会の会場の地図をバックから取り出して、カーナビに入れた。
９時を過ぎた。横断歩道を渡ってすぐのところに車を止めて、リンメイにメールした。反対車線は駐車する車で混んでいた。
「２次会には行かない。５分で車に行く」
リンメイからメールがきた。グッドタイミングだった。長崎から帰るのが遅れたら困っていた。リンメイが、仲間とあいさつをしていた。若い男女である。彼らは、横断歩道を渡らずに、そのまま真っ直ぐ連れだって歩いて行った。リンメイは、反対車線の仁美の車を見たのだろう。横断歩道で信号を待っていた。
信号が変わって、リンメイが横断歩道を渡りはじめた。白いセダンが、いきなり発進してリンメイに向かった。白いセダンは、リンメイの反対側から走ってきた男性を見て、急ブレーキをかけた。白いセダンは、リンメイの30ｃm手前で止まった。リンメイは、運転している男を見ていた。白いセダンは、バックして、リンメイを迂回して、走り去った。仁美は、一部始終を見ていた。ほんの20メートル先の出来事だった。仁美は、ナンバーを覚えた。門司ナンバーだった。
リンメイの顔は、蒼白だった。
「大丈夫か？」
「大丈夫じゃない」
仁美は、車を走らせた。周りは、もう何事もなかったかのように、フツウに動いている。リンメイの反対側から男が走って来なかったら、リンメイは、横断歩道で白いセダンにはねられていた。リンメイは立ちつくすしかできなかった。
「男を見ていたけど」

「黒いサングラスだった」
多分、品川ナンバーの黒いセダンに乗っているあの男だろう。門司で車を盗んできた。そして、本気でリンメイを襲った。
「車のナンバーを見たのか」
「門司ナンバーだった」
仁美は、門司の警察署に、どういう電話をすればよいのか考えた。盗難車かどうかを知りたいのだ。

〇黒のサングラスの男がいなくなった

リンメイは今日も早く起きてシャワーをしている。10月２日だった。土曜日なのに、学校だろうか。
「リンメイ、働けなくなったからお金がないだろう」
「あなたと一緒に住んでるからお金がかからない。少し貯金があるから平気」
確かにそうだ。お昼の食事と化粧品や小遣いだけだろう。後は、すべて仁美が出している。
「10万円入ってるから」
仁美は、封筒をリンメイに渡した。リンメイは黙って封筒を受け取った。
「送ってほしい」
「わかった」
昨日襲われたばかりだし、２回目だった。今日もあり得る。そもそもあの白いセダンが、なぜあそこにいたかを解決させないと、防ぎきれない。リンメイが飲み会に行くことを知っていたのだろうか。リンメイが飲み会の話を仁美にしたのは、昨日の朝の車の中だ。場所も知ることができないだろう。残るは、リンメイをつけるか、仁美をつけるかである。仁美は、昨日長崎から帰ってきた。黒のセダンはいなかった。しかし、白いセダンは記憶にはない。
「どこに行くんだ？」
仁美は、車に乗って行き先を聞いた。学校のホールでコンサートがあるのだと言った。

仁美は、学校と反対へ行って、コンビニに寄ってみた。リンメイをつけるにしても仁美をつけるにしても、この後にいるはずである。
「何かある？」
「いらない」
仁美は、後続の車を見ていた。コンビニに入っても、車を見ていた。買物などない。一周回って出た。仁美をつけていそうな車は見当たらない。
仁美は、大きく回って、リンメイの学校へ向かった。リンメイも、仁美が何をしているのか、よくわかっていた。
「移動したらメールでいいから知らせておいて」
「わかった」
校門近くでリンメイを降ろすことにした。どこからか、見られている気がしていた。

仁美は、門司の警察署に向かった。ダメでもよいから、あの黒いサングラスの男を追わないといけない。
「昨日福岡で、私の親しい友人が、車にはねられそうになったんですが、疑ってるわけではないんだけど、その車のナンバーがこれなんです」
「盗難車かもしれないと思いまして」
仁美は、名刺を渡していた。
「記事にするつもりではありません」
しばらくして、呼ばれた。
「この車は、一昨日ホテルの駐車場から盗まれています」
「門司インターの近くのホテルですか？」
「そうです」
仁美は丁重にお礼を言って、ホテルに急いだ。思わぬ収穫だった。あの黒のサングラスの男は、自分の泊まっているホテルの駐車場から白いセダンを盗んで、リンメイを襲ったのだ。リンメイを襲うために、自分の泊まっているホテルの駐車場から白いセダンを盗んだ。
ホテルの駐車場に、黒いセダンが止まっていて、誰かが写真を撮っていた。
「最近ここにいつも止まっていますけど」
仁美は、多分警察だと思った。

「この品川ナンバーも盗難車ですか？」
写真を撮っていた男は、驚いたように仁美を見た。
仁美は、車を前の駐車場に移して、ホテルへ入った。静かであった。
「駐車場で調べている品川ナンバーも盗難車だったんですか？」
「あの〜」
「ああ〜コーヒーを飲みたいと思いまして」
「あちらでお申し付けください」
「わかりました」
仁美は、コーヒーを飲みながら考えていた。黒のサングラスの男は、もうこのホテルには来ないだろう。偽名だろうし、あの品川ナンバーの黒のセダンも、東京で盗んで福岡までやってきたのだろう。リンメイを襲うのを諦めたのだろうか。それとも、隠れ家を変えたのだろうか。

リンメイから電話があった。
「学校でごはん食べて行くから14時にして」
「門のところで待っている」
「いつものところでいい」
いつものところは、また横断歩道を渡らないといけない。しかも、そこから少しある。
「大丈夫だから」
「わかった」
仁美は、13時40分には、いつものところに来ていた。つけられていないか注意した。リンメイは、14時ピッタリに横断歩道のところまでやってきた。そして、人の影に隠れるように横断歩道を渡った。そして、仁美の車に乗り込んだ。
「横断歩道の渡り方がわかった」
「仕事あったらマンションまで送って」
「買物しようと思う」
リンメイは、恐怖に怯えているようには見えない。小さいころから。ずっとこうして生きてきたのだろう。今は、仁美が頼りである。
仁美は、おでんはどうかとリンメイに聞いた。

リンメイは、驚いたような顔していた。10月にはなったが、まだ夏の服装をしている。２人でおでんをつくると、２日はおでんで過さなければならない。リンメイは、次々に買物カゴに入れていった。
駐車場を見回した。跡をつけられている雰囲気はなかった。

〇ルイハシ研究所の取材
10月３日日曜だった。仁美は詐欺事件の取材に出た。リンメイは、今日はどこにも行かないと言って、まだフトンの中だった。そして、その日も何もなかった。晩ごはんは、今日もおでんだった。
10月４日月曜日、リンメイは朝早く起きてシャワーを浴びていた。学校へ行くのだ。
「リンメイ、６日は私は銀座に行くけど」
「わたしも一緒に行く」
仁美は、リンメイを感じられない距離にいることがイヤだった。リンメイも同じだろう。
「安い航空券あるから買っておく」
リンメイは最近までアルバイトをしていた。安いチケットを知っているのだろう。
仁美は、今日は、ルイハシブランドについての記事の構想をしようと決めていた。そして、６日に銀座に取材に行く。
「朝早くて夕方帰ってくるのでいいのか」
「そうだ」

「６日に取材で銀座に伺うのですが、事前に、記事にして欲しいところがありましたら、メールで送ってほしいのですが」
仁美は、ルイハシ研究所の銀座の広報へ電話をした。１時間もしないうちにメールで大量の情報が送られてきた。エステの１号店を銀座にオープンする準備を進めている。発表前だが、仁美に取材させるのだろう。エステ専用の化粧品も、ルイハシブランドで開発中だと書いてある。広報戦略のようなものを感じられる。ルイハシ研究所の広報の作戦に乗った方が、今回の取材は

やりやすい。仁美は、今回は、エステの取材に絞ることにした。記事も書きやすい。
いつものように、リンメイを迎えに行った。リンメイは、横断歩道を、隠れるように渡った。しかし、何事も起こりそうもなかった。２日続けてリンメイを襲っている。その前日は留内を襲って入院させた。かなり強引に留内とリンメイを襲ったのだが、門司のホテルで盗難車が見つかって以来、黒のサングラスの男は姿を消した。そして、リンメイも襲われなくなっている。
「黒のサングラスの男は雨森さんですか？」
「あなたが指示しているのですか？」
「留内は入院しているしリンメイは２度も襲われた」
「確かに福岡は交通事故が多い」
さっきルイハシ研究所の広報に電話して、好意的取材情報をもらったばかりである。今は、ルイハシ研究所の裏の顔の船渡二郎暴露記事問題で、船渡の代理人に電話している。
「黒のサングラスなど持っていない」
「黒のサングラスの男が留内とリンメイを襲ったのか」
「あなたではないのですか」
雨森三郎は、返事もしなくなった。
「リンメイ暴露記事はどこにあるのか」
「そんなものはない」
「留内はどうしてオファーしてきたのか」
「書けるつもりだった」
「信じられない」
「１千万円用意するから誰にも渡すな」
「リンメイ暴露記事などない」
船渡二郎は、いきなりネットで、リンメイ暴露記事が公開されることを恐れているだろう。リンメイには、船渡二郎を恨む状況がたくさんある。船渡二郎は、金銭の用意もしなければならないとは思っているだろう。この難しい仕事を雨森三郎がやっている。交通事故を装うという、かなり際どい方法である。
「リンメイは暴露記事など書かない」

「どうしてだ」
「思い出したくもない」
「大金が手に入る」
「思い出したくない」
10月４日も何事もなかった。
そして、10月５日も、何事もなかった。あの黒のサングラスの男はどこへ行ったのだろうか。もう来ないのだろうか。

〇念書

10月６日、仁美は、ルイハシブランドのエステ１号店の取材のために銀座に向かった。リンメイには、前と同じように、アラブの女性の服装をしてもらった。顔すべてを覆うわけではないが、顔が隠れる。
朝早い福岡空港だったが、リンメイは目立つ。誰もがリンメイを見ている。仁美は、アラブのお姫様の秘書にしか見えない。それにしては、格安航空券でエコノミーに乗っている。リンメイは、どうしてみんながアラブのお姫様のように見るのか、不思議そうだった。
仁美は、ルイハシ銀座には行かずに、直接、ルイハシエステ１号店へ行った。まだ看板も何もない。かなり新橋に近い。
ルイハシ研究所の広報の社員が待っていた。
「ルイハシエステの取材に絞りますので、よろしくお願いします」
「この方はどなたですか？」
「私のアドバイザーです。私はよくわからないので」
「アラブの方ですか？」
リンメイは、女性に見られたくないのだと察した。
「三越で買物してるから」
「なにかあったらすぐ電話して」
「わかった」
「終わり近くなったら電話するから帰ってきて」
「わかった」
30分もしないうちにリンメイから電話があった。

「人がいっぱい来て歩けないから中に入れて」
仁美には、どういう意味かわからなかった。
「ちょっと開けてやっていいですか？」
ルイハシ研究所の広報の社員は、ドアを開けてくれた。
「わたしここで待っていいですか？」
「どうしたんだ」
「たくさんの人が寄ってきて話しかけてきて歩けない」
ルイハシ研究所の広報の社員は、笑っていた。女性なのに。
「あの感じだと誰もほっときません」
リンメイは、入口の待合室のようなところで座っていた。
「それでは、できたら事前にメールしていただけるとうれしいのですが」
「編集長と相談させていただきます」
ルイハシ研究所のエステ１号店を企画している社員や広報の社員は、親切だった。
「リンメイ、どこかでごはんにしよう」
遅いお昼である。銀座にはたくさんのおいしそうなお店がある。
「おいしい天丼がある」
リンメイは調べてきていた。銀座とはいえ、リンメイは危ない身だ。しかも、リンメイを襲っていると思われるルイハシ研究所の本社に来ている。危険な状態である
アラブのお姫様が天丼を食べているおかしな光景である。みんな見ている。実は、リンメイは中国人である。
「私についてきてください」
支払いを行っていると、どこからともなく、40になっていないかもしれない男が現れた。背の高いホストのような男である。
「雨森三郎さんですか？」
「そう」
リンメイが答えた。リンメイは、中国人留学生を援助するＮＰＯだといって学校にやってきた雨森三郎と会っている。
「黒のサングラスはしていないのですか？」
雨森は返事をしなかった。

行き先は、ルイハシ研究所の銀座本社だった。
「私に用事はありませんが」
「念書を書いてもらいたい」
「リンメイ暴露記事ですか？」
「そうだ」
「福岡の交通事故がなくなるんだったらリンメイも書くでしょう」

「リンメイ、横断歩道は、やっぱり注意して渡ってくれ」
「わかってる」
モノレールの中で、仁美は、リンメイに話した。もしかして、リンメイは襲われないかもしれない。リンメイが念書を守れば、記事を書く人も書けないので、留内も、安全かもしれない。船渡二郎も、リンメイが裏切らない限り、安心である。
「リンメイさん、ルイハシ研究所のモデルになってくれるといいのですが」
先程の、ルイハシ研究所エステ１号店の広報の社員から電話があった。リンメイのオーラはすごい。これからも、このような話があるかもしれない。リンメイは、断ってくれだった。
仁美は、福岡空港からの道で、何度も後を見た。誰もつけていない気がした。さきほどの念書が効いてくれればと思う。途中でスーパーマーケットにも寄った。あたりを見回したが、つけられている気配はない。リンメイは、刺身が食べたいと言って、選んでいる。アラブのお姫様に刺身である。みんな見ている。

ルイハシのよろい

〇リンメイ暴露記事を消す

10月７日だった。リンメイは、早く起きてシャワーをしている。学校だ。珍しいが、納豆ごはんと味噌汁である。リンメイが昨日納豆を買った。ネギ納豆にするのだと言っていた。炊飯器もタイマーをかけていた。仁美は、味噌汁だけをつくって待っていた。リンメイは、これも昨日買ったミリン干しの小さなアジをフライパンで焼きながら、ネギ納豆をつくっていた。オンナは化粧がタイヘンである。時間を気にしながら急いでいる。髪も洗ったままだ。

「洗うのはやっておくから」

「お願い」

仁美は、昨日の念書があるとはいえ、注意深かった。校門に近いところでリンメイを降ろした。そして、あたりを見回してホッとした。さてどうしよう。何も考えていない。門司に向かっても仕方がない。帰って、昨日の、ルイハシエステ１号店の記事でも書こうと思った。

「留内からリンメイ暴露記事にオーダーがあったと聞いています」

仁美は、風間平助に電話をした。風間は黙っていた。特許問題で船渡二郎を追い込むつもりだった。大阪の化粧品会社がルイハシ研究所を追い込みたかった。リンメイ暴露記事の原稿があれば、船渡二郎は、風間平助の要求を飲まざるを得ないと思われた。

「昨日、リンメイが、念書を書きました。リンメイ暴露記事は書かない。ですから、留内からのオーダーは、なかったことにしてください」

風間平助は、自分は何も知らないが、大阪の化粧品会社には伝えておくと言った。

「昨日、リンメイが、念書を書きました」

「リンメイ暴露記事は存在しません」

仁美は、橋本九朗にも電話をした。銀座に本社のある大手の化粧品会社にも、リンメイ暴露記事をあてにしないように伝えてくれと言った。

「昨日、リンメイが念書を書きました」
霧島芳郎にも電話をした。
「わかった」
霧島は１言だった。
「留内にリンメイ暴露記事をオーダーしたと思いますが」
麻野すみは黙っていた。
「昨日リンメイは念書を書きました」
「リンメイ暴露記事は存在しません」
麻野すみは何も言わなかった。
留内は、３人からオーダーがあったと言った。電話をしたのは４人である。誰かがオーダーをしていないことになる。
銀座に取材に行って、こうなるとは思わなかった。船渡二郎が欲しかったのは、リンメイが暴露記事を書かないという念書だ。船渡にとっては、リンメイが裏切らないという保証はないが、留内を入院させ、リンメイを２度も襲えば、念書を破棄することもできない。たまたまリンメイが銀座に行ったことで、船渡二郎もリンメイも助かった。
これで決着したのだろうか。よくわからない。今後、銀座に本社のある大手の化粧品会社や大阪の化粧品会社や丸石半二郎や麻野すみは、どうするのだろうか。みんなルイハシ研究所を狙っている。その手段として、リンメイ暴露記事が巻き込まれた。打ち消すことができたのだろうか。

お昼はラーメンをつくることにした。10月になっているのに、ラーメンを食べるのは暑い気がする。仁美の身体は、ラーメンをつくるロボットのように、操作を覚えていて間違えない。卵を使うか鶏肉を使うか、ハムか、そういう選択を、瞬間に行えるようになっている。
お店で食べるラーメンと同じくらいおいしいと思ってしまう。
集中してルイハシエステ１号店の記事を書いている。友田は、きっと満足するだろう。ルイハシ研究所も満足だろう。写真もうまく使える。11月20日発売号でなければならない。発表が早過ぎてしまう。仁美は、筆が早い。よいテーマが見つかれば、次々に筆が進んでしまう。
やはり、昨日の念書が効いている。仁美は、リンメイに危険が迫っているこ

とが、何よりも困る。他のことに集中できない。リンメイの念書は、そこから解き放たれたかのようである。しかし、留内を襲って入院させ、リンメイを２度も襲った犯人が、ルイハシ研究所の船渡二郎に指示された者かどうか、まだわからない。安心はできないのだが、取材記事には集中できている。

いつもの時間にリンメイから電話があった。
仁美は、もう何をさておいても、車を急がせることにしてある。あの雑貨屋で待っているはずである。仁美は、車から電話をした。
「表で待ってる」
「買い物してる」
「わかった」
何事もないと思った。黒のサングラスの男は見当たらない。車だろうか。街中をあの黒のサングラスでは歩きにくい。この歩道をあの黒のサングラスの男は、黒の品川ナンバーのセダンで、リンメイを追った。リンメイが雑貨屋に逃げ込まなかったら危なかった。確かに、広い歩道であるが、ここを車が走るなど、だれも考えない。
リンメイが出てきた。手を上げて笑っている。周囲を見渡してもいない。リンメイは、仁美がいれば安心なのだろう。
「いっぱい買物した」
「出るけど」
「お願いします」
仁美が緊張しているほど、リンメイは気にしていないように見えた。２度も襲われたのだ。気になってしまうだろうに。

○ルイハシ研究所のコマーシャル

10月８日だった。新聞広告にデカデカとルイハシ研究所と船渡二郎が出た。そして、テレビからルイハシ研究所銀座店のコマーシャルが流れている。通信販売をテレビではじめた。
仁美は、今日は、詐欺事件の記事原稿を書いている。しかし、ルイハシ研究

所のテレビ通販に目を奪われている。
仁美は驚いていた。コマーシャルの製作費も凄いだろうし、メディアへの支払いもすごいだろう。しかし、売れているからやっている。多分。
仁美は、近所のスーパーマーケットに出かけた。頭が整理できない。今日は、詐欺事件の原稿を書くつもりだ。ルイハシ研究所がジャマをする。皿うどんを買って、具を調べた。パッケージに書いてある。
リンメイからはメールも来ない。リンメイはまだ20歳だ。いままで、辛いことばかりの暮らしだろうが、学校にいる時が、最も自由なのだろう。誰からも何も言われない。安全である。高杉晋作に浸っていられる。ゲノムを研究して医者になることも、実現に向けて勉強できる。学校にいて、日本語を勉強したり、ゲノムを勉強したり、楽しいのだろう。
３時頃になって、テレビをつけてみた。
いきなり、船渡二郎が目に入ってきた。インタビューを受けていた。ライブらしい。ルイハシブランドの勢いである。船渡二郎も勢いがあるように見える。女性のインタビュアーが、船渡二郎を持ちあげている。
ルイハシ研究所は、やはり大きく変わった。福岡のブランドだったのに、日本ブランドになった。船渡二郎の話ぶりは、少し鼻が高くなっている。日本で１番の化粧品会社になるつもりだと言っている。前に、世界で１番生産数が多い自動車会社を目指すと言っていた自動車会社があった。それと同じだと思った。なにかがおかしい。仁美にはうまく説明ができないのだが、やっぱりおかしい。
仁美は、仕方なく、ルイハシエステ１号店の原稿を仕上げることにした。朝から、これだけルイハシ研究所を見せつけられると、頭が、他のことを考えない。コマーシャルとはすごいものだ。
１時間で仕上がった。友田に電話をして、急いで出かけた。リンメイから電話があるかもしれない。リンメイのピンチはまだ続いているのだろうから、リンメイを迎えに行く前に、忙しくはしたくない。しかし、朝から、これだけルイハシ研究所を頭に入れられたら、他のことはできない。

「グッドだ」
友田は、さらさらと飛ばして、仁美の原稿を読んで言った。

「何か修正があったらお願いします」
「もう行くのか」
「急いでいますので」
仁美は、友田に掴まりたくはない。しばらくは、リンメイがピンチなのだ。
仁美は、リンメイからまだ電話がないのだが、学校へ向かった。ゆっくり走った。後の車に追い越させた。そして、雑貨屋の前で止めた。リンメイは、後の横断歩道を渡って、この雑貨屋に来るはずである。駐車禁止の場所である。あまりながくはいられない。３人の女性が、雑談して、誰かを待っていた。ドアを少し開けていたので、話がすべて聞こえてしまう。
「今度のルイハシ使ってみた？」
「あのマスクなに？ゼンゼンわかってないよ」
「ルイハシだったらなんでもＯＫだと思ってそう」
「東京行ってからおかしい」
「今日からすごい宣伝入ってるんだけど」
「勘違いしてるんだよね」
「使う人は決まってるのにね〜宣伝したって同じなのに」
リンメイが電話しながら横断歩道の手前にいる。
「雑貨屋で買物しようと思ったんだけど早い」
「ああ」
「気になるのか」
「今度は白いセダンかと思って」
「渡るから」
３人は、ルイハシのうわさをそのまましている。リンメイは、誰かの後にくっついて横断歩道を渡る。もう、横断歩道の渡り方が身についている。
仁美は、３人のうわさ話しも聞きたかったが、少し車を前にずらせた。リンメイが乗りにくい。
「ありがとう」
「うん」
「もう仕事はないの？」
「11月号の原稿も渡してきた」
「じゃ〜ボックス買ってくるから待ってて」

仁美は、里芋と鶏肉の煮ものをつくろうと思った。里芋はリンメイも好きだ。リンメイは、買って来たボックスに、ファイルを挟みこんでいる。
仁美は、気になって何をしているのか聞いた。
「もう整理できなくなった」
ゲノムと病気の文献だった。高杉晋作のボックスは別にある。
「リンメイ、本がないのはどういうわけなんだ？」
「本は高いから買えないし、学校の図書室で見れる」
「文献は？」
「わたしの分類になってるから」
「ゲノムと病気なのか」
「うん」
「文献コピーするのだってお金がかかるけど」
「10万円もらった」
「毎月10万円渡す」
リンメイは、じっと仁美を見た。
「なんで？」
「ただそうしたいだけだ」
リンメイは、整理を続けた。押し入れから何やら引っ張り出してきた。
「リンメイ、自分なりの研究しないといけないだろう」
「来年からやる」
「分子生物とか講座にあるのか」
「学会の費用が払えなくなった」
「じゃ〜私の仕事を手伝ってくれ、給料だからいいだろう？」

〇リンメイがプロの編集スタッフに

10月９日土曜日だった。リンメイは、紙面の編集を専門にしている女性のところに出かけた。早速、仁美の仕事を手伝うと言った。紙面を編集して持ちこむと、単価が高くなる。今は、仁美は、ワードでつくった文章だけを、決められた字数にして、友田に渡している。友田に電話をした。

「30％高くしてやろう」
40万円だった原稿が、12万円プラスになる。それをリンメイに渡すことができる。グッドアイデアだった。しかし、リンメイは中国人だ。まだ完全には日本語をマスターしていない。プロの編集スタッフになれるのだろうか。
「あなたのそばにいることが１番安全だから」
中国の航空会社のアルバイトは、留内の中傷でクビにされた。今は、誰もリンメイのアルバイトを阻むものはいない。リンメイはキレイだし、アルバイトも見つかるだろうが、リンメイは、喜んで、仁美の手伝いをすることにした。
リンメイは、仁美の２００文字の文を持って行った。福岡四季という文で、仁美が書いている。

あまりにも遅いので仁美は、リンメイに電話をした。もう19時である。
「お願い迎えに来て」
不機嫌そうな声で気になった。やっぱりできないと言うのだろうか。
仁美は、銘菓ひよこをお礼に買っていった。
不機嫌そうなリンメイの顔が気になったが、先輩プロは上機嫌だった。
「どうもありがとう」
「この人わたしよりセンスある」
リンメイは、深々とお礼を言って、オフィスを出た。
「リンメイ、不機嫌そうだけど」
「あと２時間くらいやりたかった」
仁美から電話があったことが不満だった
マンションに帰って、福岡四季を見せてくれた。
「このまま出せば平気だと言ってた」
仁美は、編集した原稿を知らない。これを友田がどう評価するかも知らない。考えるより送ってみようと思って、送った。
「ギョーザにしようと思うんだけど」
「うん」
リンメイは、パソコンを開いて、まだ何やらやっている。真剣にやっている。仁美にはよくわからない。

「このまま使うぞ、30％高くしてやる」
「お願いします」
「どうしたんだ」
「ちょっと知り合いがいて」
友田が、このまま使うと言ったことがよくわからない。
「このまま紙面に貼り込まれる」
「絵とかデザインとかも入れようと思う」
たった１日しか行っていないのに、リンメイは、仕事ができるようになったのだろうか。よくわからないが、福岡四季は、そうなったらしい。
「このぶどうの絵はどうしたんだ？」
「わたしが描いた」
誰がどんな特長を持っているのか、やってみなければわからない。リンメイは、絵も描けるのだろう。
「ルイハシエステの記事を送ってください」
「題はルイハシエステでいいの？」
仁美は、味噌汁をつくっていた。
「驚きのルイハシエステがいいと思うけど」
「そうしてください」
「わかった」
仁美は、ギョーザが焼ける時間に、書きあげていたワード記事を、リンメイに送った。
ギョーザを食べながら、仁美はリンメイを見ていた。
「なに？」
「リンメイには何か不思議なチカラがあるんだけど何かわからない」
「わたしはいつも辛い人」
「チカラなんかない」
仁美がつくったギョーザは、自前の皮だから、少し厚い。その皮の厚さが、フツウのギョーザとは異なっていておいしい。
「ギョーザがおいしい」
「明日学校からお昼に帰るから」
「驚きのルイハシエステを編集する」

「けっこうおもしろい」
「なんの絵がいいと思う？」
「わかりません」
「任せるのね」
「ええ
「わかった」
仁美は、リンメイが興味を示してくれてホッとしていた。

〇留内の復帰
10月10日だった。リンメイはシャワーをしている。朝は学校へ行くと言っていた。朝送ってお昼に迎えに来てくれだろう。仁美は、パンを焼いた。ハムと卵を焼いた。
「用事があったらわたし１人で帰るけど」
「用事はないから平気だ」
「いただきます」
「今は注意してください、２度も車に襲われてんだから」
「うん」
「油断は禁物だから」
「わかってる」
リンメイの念書以来、リンメイは襲われてはいない。やっぱり船渡二郎だったのだろうか。確認がとれない。船渡二郎は襲わないだろう。帰りに、留内の病院に行ってみようと思った。留内の記憶喪失という演技は、まだ続いているのだろうか。念書で、自動車での襲撃が止まったのだったら、留内は、演技しなくてもよくなる。
「12時ピッタリだから」
「わかった」
仁美は、留内の病院に急いだ。最近は、後をよく見るようになった。誰もいない。
留内は、まだ病院だった。面会はできるのだが、特別の人以外は会わないそうだ。記憶喪失は、依然として続いているようだ。

「リンメイは２度襲われたけど大事には至らなかった」
「リンメイは船渡二郎宛てに念書を書いた」
「リンメイ暴露記事は書かない」
「念書以来何も起きていない」
留内は、車いすに乗せてくれと言った。そして、庭に出してほしいと言った。よくわからないまま、仁美は、留内を庭に連れ出した。
「記憶を取り戻さないと学校をクビになる」
「安全だと思う？」
「リンメイは毎日注意している」
「安全かどうかわからない」
「賭けなのか」
「どうして部屋では話せないのか」
「誰かが見ているような気がする」
「また来て」
「ああ
「あなたとリンメイにはゴメンだけどあなたに頼るしかなくなった」
「リンメイは気をつけてやって」
「もうすぐ退院して学校へ復帰する」
「わかった」

「今日留内に会って来た」
「記憶喪失は治るかもしれないって言ってた」
「学校に復帰したいそうだ」
「私にもリンメイにも迷惑かけてゴメンだそうだ」
「学校に復帰しても注意する」
「うん」
リンメイの留内への不信感は大きい。信頼していた先生であったために、なおさら信じられない。
「留内先生いなくても学校ではやっていけるから」
「頼らない」
「わかった」

リンメイはお昼を食べていないからうどん屋さんに行きたいと言った。素うどんに天ぷらを中心に、自分でトッピングを選ぶお店である。安いことが売りだ。お昼時だった。駐車場も混んでいた。
「待ってる」
仁美は、４台後の黒のセダンの男を見逃さなかった。さっきから、ずっと後にいる。黒のサングラスである。この男が、リンメイを襲った黒のサングラスの男かどうかわからない。
仁美は、見えないフリをして、駐車した。黒のセダンは、そのまま駐車場から外に出て行った。どこか外で待っているような気がした。
リンメイは、カボチャにカキ揚げにチクワの天ぷらをトッピングして喜んでいた。
「おいしかった」
「帰っていいのか？」
「仕事したい」
仁美は、黒のセダンを探した。ゆっくり走って、後を確認した。しかし、どこにも黒のセダンはいなかった。
「その編集ソフトどうしたんだ？」
「わたしのパソコンに入れてくれた」
「プロ仕様だからメモリーがギリギリ」
仁美は、リンメイのパソコンのメモリーを増やしてやろうと思った。新しい業務用のパソコンを買った方がいいのかもしれない。
仁美は、ずっと詐欺事件の原稿を書いた。11月号の記事である。この記事も、リンメイに編集してもらえるだろう。
「ちょっと買物に行ってくる」
「なに？」
「ティッシュペーパーとお米」
「うん」
「誰か来ても開けないように」
リンメイは驚いた。仁美が、誰か来ても開けないようにと言ったのは、はじめてである。仁美も、自分で言って驚いた。さっきの黒のセダンと黒のサングラスの男が気になっている。この近くのうどん屋さんにいた。

〇土井雨霧と料亭で

10月11日は、仁美もリンメイも、どこにも出かけずに、必死になって原稿を書き、編集をした。

「土肥雨霧さんが料亭で待ってくれるから遅れないように」

友田から電話が入った。10月12日土肥雨霧が福岡に来ることは、予定してあった。リンメイを迎えに行って、約束の７時には地下鉄で料亭に向かった。リンメイは、すきやきごはんをつくると言っていた。

仁美は、友田とケータイで待ち合わせた。ピッタリ７時に料亭に入った。

「先にいらっしゃってます」

土肥雨霧にご馳走になる。友田は、うれしそうである。土肥雨霧は、友田を、銀座に本社のある大手の化粧品会社からルイハシ研究所の応援団にして、それだけでこれだけのことをしてくれるのだろうか。わざわざ、銀座から福岡に来るのだろうか。

「驚きのルイハシエステです」

「10月20日発売号です」

土肥雨霧は、ビールを友田に注ぎながら、仁美の原稿を読んでいた。原稿と言っても、編集が終わっている。雑誌のページのコピーのようになっている。

「仁美さんどうぞ」

「ありがとうございます」

「私は読者目線でしか読めませんが、おもしろい記事になっていると思います」

土肥雨霧は、仁美を褒めた。さっき、リンメイがこれでいいかと言って来たものを、修正があったら修正すると言って、友田に投げた、編集後の、驚きのルイハシエステである。

友田は、カラーコピーして、土肥雨霧に持ってきた。仁美は、リンメイは、どういう女性なのか、よくわからなくなっている。すごい集中力である。短時間に、なんでもやってしまう。

土肥雨霧に電話がかかった。

「ちょっと失礼」

土肥が席を外す時、内ポケットが見えた。眼鏡のフレームが見えた。
土肥は眼鏡をしていないはずである。見たこともない。なぜだろう。仁美は見逃さなかった。思ってもみないシナリオだった。あり得ないシナリオでもある。
土肥雨霧はいつ福岡に入ったのだろうか。昨日は福岡だったのだろうか。いろいろな疑問が仁美の頭を駆け巡った。
「この原稿をファックスさせていただきました」
友田は、すぐに対応してもらってうれしそうだった。土肥雨霧は、眼鏡のことに気がついていない。
仁美は考えた。もし土肥雨霧があの黒メガネの男だったら、仁美をよく知っている。仁美がリンメイを守っていることもよく知っている。仁美の車を追ったはずである。それなのに、土肥雨霧は、仁美の前では演技をしている。仁美は、あの黒メガネの男が誰かわからない。仁美が、黒メガネの男が土肥雨霧であることを知ってしまうことは、仁美とリンメイにとって、よくないことだろう。
それにしても、土肥雨霧は、リンメイが、銀座で、念書を書いたことは承知しているはずである。仁美は、一度も銀座で土肥と会ってはいないが、土肥が念書を知らないわけがない。土肥が、念書のことやリンメイのことに触れないのは、なぜだろうか。
仁美は、リンメイのことについては、土肥雨霧ではなくて雨森三郎だと思っておいた方が都合がよい。
土肥は、仁美が、リンメイのことを考えると、ルイハシ研究所や船渡二郎に対して、恨みに近いものを持っていたとしても不思議はないと考えるだろう。それなのに、仁美は、友田と、ルイハシ研究所応援団をやっている。これはもう駆け引きだろう。

土肥雨霧と友田と仁美に、何も変化はなかった。仁美が、土肥雨霧の内ポケットの眼鏡のフレームに気がついただけである。土肥は、タクシーを出してくれた。お土産を持たせてくれた。友田にとっては、最高のお客さんである。お客さんなのに、接待をされている。多分、ものすごい収益構造なのだろう。お金がたくさんあるから、コマーシャルもできるし、友田と仁美を接

待できる。
仁美にとっては、土肥雨霧とは、この関係が好ましい。

「おみやげおすしだけどお腹いっぱい」
「明日の朝にしていいか」
おいしそうな上品なおすしが折に入っていた。
「今日のニュースでやってた」
「今のニュース」
「今晩決まったらしいんだけど、最優秀化粧品賞だって」
「ルイハシブランドだけど」
「お客さんの投票だって」
仁美は、そういう賞があることすら知らなかった。ニュースになるくらいだから有名な賞だろうと思う。
「リンメイは知ってたのか」
「知らない」
「明日から、宣伝に使うと思うけど」
リンメイは、話ながらパソコンで編集をしている。
「今日ルイハシ研究所の土肥雨霧さんの招待だったんだけど」
「編集長の友田さんはリンメイの編集後の驚きのルイハシエステのカラーコピーを持って行って説明したんだけど」
「感激してました」
「リンメイのおかげです」
「あなたの記事がいいから」
仁美は、土肥雨霧の内ポケットの眼鏡の話はしなかった。定かではない。リンメイに新たな不安を持ちこむだけだ。

〇最優秀化粧品賞を受賞して
10月13日木曜だった。リンメイは学校である。早く起きてシャワーをしていた。仁美は、いつものようにピザ生地をパンのように焼いていた。ブルーベリージャムで食べようと思った。

リンメイは、おすしの折を冷蔵庫から出してきた。
「おすしも食べたい」
仁美は、忘れていた。イタリアンとおすしは、合わせようがない。結局、リンメイはおすしを食べた。仁美は、お昼もパンになる。

仁美は、４台後の黒のセダンが気になっていた。なんとか、ナンバーを見たかった。そして、仁美は、左のコンビニに入るフリをして左に寄った。
「買物？」
「時間は？」
「平気」
４台後の黒のセダンの男は黒のサングラスだった。そしてナンバーは福岡だった。仁美は、メモした。今日は黒のサングラスの男が現れると思っていた。あの黒のサングラスの男は、土肥雨霧だと思った。多分、念書がある。リンメイを襲ったりしないだろう。リンメイの様子を見ているだけだろう。仁美は、黒のセダンの後５台につけた。黒のセダンは、リンメイの学校の校門まで行くだろう。
「リンメイ、５台前の黒のセダンだけど」
「黒のサングラスをしていた」
「わかってる」
仁美は、一瞬リンメイを見た。
「あなたが何をしているかわかってる」
「あの人はだれ？」
「わからない」
「黒のサングラスの男には注意してくれ」
「注意してる」
５台前から３台前になった黒のセダンは、リンメイの学校の校門に向けて右に曲がって、そのまま真っ直ぐ走り去った。リンメイは、次の交差点でＵターンして、リンメイを校門の前で降ろした。黒のセダンはいない。

仁美は、急いで帰って、記事を書きはじめた。お昼から取材に出かけないといけない。テレビをつけてみた。ルイハシ研究所が最高の栄誉ですと言って

いる。生宣伝をやっているようだ。すごいことになりそうだと思った。絶好の材料を得たことになるだろう。投票で選ばれた化粧品である。
船渡二郎が出ている。
「最高の栄誉をいただいて感謝しています」
フル生産しているのだろうが、品切れするのだろうと思った。来年４月のルイハシ研究所の株式上場は、株価がつかずにとんでもないことになりそうである。誰もが、ルイハシ研究所の株を持ちたいと思うだろう。ルイハシ研究所乗っ取り工作があったが、地下に潜った感じだ。
仁美は、思い立って、ルイハシ研究所福岡工場に行ってみることにした。工場見学をするつもりはない。外から見るだけでよい。ホームページで福岡工場を調べた。ルイハシ研究所が銀座に引っ越すまで、ルイハシ研究所の本社は、ここにあった。仁美が、最初にルイハシ研究所の取材をした時は、この本社工場の近くのパーティー会場だった。創業15周年だった。
銀座本社に較べて、小さな化粧品の工場のように見えた。１トンの釜がありそうもない建物のつくりである。天井が低い。
ホームページだと、他に工場はない。今日の宣伝を賄うだけの化粧品の生産が、この福岡工場でやりきれているのだろうか。
仁美は、黒いセダンに注意した。今日は、黒いセダンは見えない。
仁美は、そのまま、詐欺事件の取材で長崎に向かった。

５時にリンメイから電話があった。
「いつもの雑貨屋で待ってるから」
「もう雑貨屋にいるのか」
「うん」
「黒のセダンはいなかったのか」
「横断歩道は注意した」
「すぐ行く」
仁美は、まだ長崎から帰りの道だったが、ほぼ、福岡に入っていた。10分くらいで、雑貨屋には着ける。追い越し車線を外国の最高級車が追い抜いた。福岡ではあまり見ない。黒のサングラスの男だった。品川ナンバーだった。
仁美は、もうすぐ高速を降りることになる。気になったが、そのままだっ

た。
「今外にいるから」
「品川ナンバーのシルバーの高級外車が３台後に止まっている」
「黒いサングラスの男で長崎から私を追っている」
「外に出た時気をつけて」
「わかった」
リンメイは、ドアのところから電話しているのが見えていた。仁美は、雑貨屋のドアまでリンメイを迎えに行った。リンメイは、動けないでいた。
「もし車が突っ込んできたら左の柱に走れ」
「わかった」
仁美とリンメイは、シルバーの高級外車を見ないように様子をうかがいながら静かに歩いた。助手席のドアを開けた時、３台後に止まっていたシルバーの高級外車は、急発進して、走り去った。品川ナンバーである。
「あんな車見たことない」
「日本に何台しかないんだろうな」
「あの車をわたしにぶつけたら車がかわいそう」
リンメイは、おかしなことを言った。

○船渡二郎の福岡の自宅

10月14日だった。木曜日なのに、リンメイは動こうとしない。朝ごはんは食べた。いつものように、ピザ生地にウインナーを挟んで焼いたパンだ。スクランブルの卵とレタスをラッキョウの漬け汁をドレッシングにして食べた。
「リンメイ、いいのか？」
「お昼からにする」
リンメイは、何か本らしきものを読んでいた。一心不乱に読んでいるように見えた。その本を読み終えるまでは、どこにも行かないといった態度だった。仁美は、12月号の記事の構想を練っていた。リンメイが、何を読んでいるのか気になっていた。
「コーヒーだけど」

「どうもありがとう」
「何を読んでいるんだ？」
「先里幹夫、よろい」
リンメイは、話したくないという雰囲気だった。仁美は、察して、出かけようとした。友田が編集長の雑誌の出版日である。九州の本屋には並んでいるはずである。
「雑誌買いに行くの？」
「そうだ」
「ついでに長府に行けない？」
「学校じゃないのか」
「いい」
リンメイは、まだすっぴんに近い。
「じゃ〜待ってる」
「行ってくれるの？」
リンメイは10分待ってくれと言って化粧をはじめた。シャワーはしていた。
「わたしこうやって毎朝シャワーできることが幸せ」
「あなたに感謝しないといけない」
何回か、リンメイはこう言った。確かにそうだろう。
高速に乗る前に、雑誌を買った。仁美は、車を出す前に、パラパラと自分の詐欺事件の記事を見た。
「見せて」
リンメイは、編集のデザインを見ている。
「なんで絵が入ってないの？」
「私は字を書くだけだから」
「わたしの仕事なのか」
仁美は、長府に向かった。高速に乗る時も、黒のセダンとシルバーの高級外車に気をつけた。気配がなかった。もし、あの黒のサングラスの男が土肥雨霧であったなら、何日も福岡にいることはできないだろう。
「リンメイ、船渡二郎の自宅を知らないか」
「福岡」
仁美は、乗ったばかりの高速を降りて、船渡二郎の福岡の自宅に向かった。

「わたし行きたくない」
「通り過ぎるだけだ」
リンメイは、船渡二郎の福岡の自宅に近くなると、抵抗した。
「リンメイ、リンメイを危なくしているのは船渡二郎だから」
仁美は、車を進めた。高級住宅街である。みんな門があって車庫も見えない。
「あの白い家」
仁美は、ゆっくり車を走らせた。門が開いていた。奥に車庫が見えた。シルバーの高級外車が見えた。
「品川ナンバーか」
「うん」
仁美は、そのままゆっくり車を走らせた。やはり、仁美のカンは当たっていた。多分、土肥雨霧は、この車を使った。昨日は、この車だった。
すぐ近くに、インターチェンジがあった。仁美は、そのまま高速に乗った。
「どういう意味なの？」
「留内をはねてリンメイを襲った車は黒の門司ナンバーの盗難車と白の盗難車のセダンだけど、運転手がわからない」
「黒の福岡ナンバーの車が後にいた」
「昨日は、この高級外車だけど、黒のサングラスの男はみんな同じだけど、昨日のサングラスの男は、何もしていない」
「だけど雑貨屋の前にいた」
「あの黒のサングラスの男は、船渡二郎の関係者であることは間違いないけど、これから先は難しい」
「リンメイが書いた念書をお互いにウオッチしている」
「裏切らないか注意してる」
「わたしが裏切らないか？」
「彼らもリンメイの近くに来るけど襲わない」
「もしこの時期に、リンメイ暴露記事がネットで公開されたら、タイヘンなことになる」
「タイヘンって？」
「船渡二郎とルイハシ研究所の価値は一気に墜ちる」

「その前に、リンメイは、マスコミに追われるけど」
巧妙なのだ。あのサングラスを追いかける手掛かりは、何もない。仁美は、長府に向かった。今日は、あの黒のサングラスの男はいない。

○先里幹夫『よろい』
リンメイは、長府博物館に行った。仁美は、イスに座ってリンメイが出てくるのを待っていた。リンメイは、メモをとっていた。ノートか手帳だろうか、メモをとっていた。坂本龍馬と高杉晋作に関することに間違いはない。どんな小さなことも見逃したくはないのだろう。
「リンメイ、お昼だけど」
「30分待って」
リンメイは、話したくないという雰囲気である。仕方なく、仁美も最初から詳しく見ることにした。仁美は長府で生まれた。長府の人間である。リンメイは上海人である。それにもかかわらず、リンメイは、高杉晋作にホレている。どこでどうなったのか、よくわからない。
「今日は花ないけどあなたのお父さんとお母さんのお墓に行く」
「その前にペコペコだけど」
リンメイは、やっと気がついた。もう１時である。木曜日、人も少ない。黒のサングラスの男もいない。リンメイは、ゆっくり功山寺の坂を降りた。長府博物館は、功山寺の中にある。
おかしいのだが、レストランがたくさんあって流行ってはいるのだが、どういうわけだか、フランス料理やスペイン料理やイタリアンばかりである。侍街だから和食だと思うのだが、そこが、また下関らしい。
新鮮な魚のパスタにサラダにパンが出された。
「あなたといい勝負」
「リンメイ、なにを調べてるんだ？」
「先里幹夫さんの本に書かれてあることが本当かどうか見に来た」
「よろいという本だけど」
「坂本龍馬と高杉晋作にはよろいがなかったと言っている」
「よろいってなんだ」

「船渡二郎はよろいをたくさん着ようとしている人」
「他人は、よろいの立派さで人を判断するから」
「本人じゃなくて」
仁美は不思議だった。リンメイは、どうしてこのようなことに興味を持つのだろう。
「簡単、高杉晋作にはよろいがなかったって聞けば、それは興味がある」
「高杉に興味があるのか」
「うん」
「それでどうだったんだ？」
「坂本龍馬も高杉晋作さんも、偉くなりたいから動いたわけではなさそう」
「フツウの人は、よろいを着ることを必死になってやる」
「ごく稀に、坂本さんや高杉さんのような人が出てきて、ダメなことを改革する」
「そう先里さんは書いている」
「素晴らしい人であるかどうかは、よろいが厚いか薄いかでわかる」
仁美は、よろいなどという話を聞くのははじめてである。しかも、上海人のリンメイに聞いている。
「オレはどうなんだ？」
「あなたはよろいが薄い」
「なぜだ」
「素のままわたしと暮らしてる」
「素のままのことをよろいが薄いと言ってるのか」
「あなたによろいが厚かったらわたしと暮らさない」
「なぜだ」
「わたしは船渡二郎のオンナだったから」
「そういう意味だったらリンメイはよろいが少ない」
「わたしは中国人だから」
「わたしが上海にいたら、中国風よろいを一生懸命に着ていたかもしれない」
仁美は、リンメイの言っていることには、一理あると思った。
「わたしじゃなくて先里幹夫さん」

リンメイは、この前から、先里幹夫『よろい』を一心不乱に読んでいたのだ。高杉晋作のことが書いてあるからだ。それも、少し触れただけだろうに。

１時間もレストランで『よろい』の話をした。リンメイも、自分でしゃべっていると、すっきりするらしく、仁美に話したがった。
「そろそろお墓に行こう」
リンメイがトイレに行くと言った。
仁美の実家は更地になっている。奥にお父さんとお母さんの墓がある。通常では考えられない。長府には、仁美のように、更地にしてそのままの土地が、けっこう多い。侍の社会である。刀がある。住めない土地もある。
「そんなに汚れていなくてよかった」
リンメイは、自分の両親のお墓のような言い方をした。
「ここ〜観光客も入って来るんだろうね」
更地に道ができてくる。
「リンメイ、山の上のレストランで晩ごはん食べて帰るか？」
「下関の市場でなんか買って家でゆっくりしたい」

◯『詐欺の論理』をものにする

10月15日だった。金曜である。リンメイは、朝早く起きてシャワーをしていた。仁美も、手を洗って、ピザ生地を取り出して焼きはじめた。リンメイのシャワーの時間とピザ生地がパンになる時間が、ほぼ同じである。リンメイのシャワーはながい。
昨日帰りに寄ったコンビニで、リンメイは本を持って帰った。頼んでおいたのだろう。仁美もリンメイも本をストックしない。リンメイはお金がないからだと言った。仁美は、場所がないからだ。本を読んでも誰かに渡してしまう。机の上に本があるのは珍しい。卵を冷蔵庫から取り出す時、本を見た。先里幹夫『よろい』だった。リンメイは、安いからと電子書籍をパソコンで読んでいた。ペーパーにしたのは、何か理由があるからだろう。
「いただきます」

「どうぞ」
「この本なんだけど」
「わたし読んだから、もしよかったら読んで」
「取材の合間にでも」
「わかった」
「先里幹夫さんの『よろい』だけど」
リンメイが仁美を見ながら言った。
「あなたよろいないよね」
「わたしのためにごはんつくるなんてゴメンだってフツウは思う」
「よろいあったらね」
「ごはんはオンナがつくるもんだと思ってたら」
「あなたはよろいがない」
「リンメイ、そうしたいんだからいいじゃないか」
「愛してるんだ」
リンメイの目が赤くなってなみだが流れてきた。リンメイは、そのまま、パンを食べてサラダを食べてコーヒーを飲んだ。

リンメイは、学校に行く車の中で、意外なことを言った。
「人って、成功すると、そのことがよろいになって、生身の自分が見えなくなって、よろいのためにやってはいけないことをやってしまって、滅びる」
「例外のないよろいのパターンなんだって」
「船渡二郎って、滅びそう」
「よろいになってるから」
「あなただって、驚きのルイハシエステを書いてるけど、ルイハシ研究所によろいを着せてる」
「先里幹夫さんの言ってることを信じれば、船渡二郎は滅びる」
リンメイは、まだ20歳である。上海人だ。それが、なぜこんな人生の難しいことがわかるのだろう。年齢ではないのかもしれない。これだけ辛い経験を積めば、こうなるかもしれない。
仁美は、リンメイを降ろす時、回りを注意しなかった。あまりにも、リンメイの言ったことが、強烈だった。まだ20歳の人が言うようなことではない。

高杉晋作からよろいを読んだのだろうが、そのまま、よろいにもホレてしまったのだろう。
仁美は、行きつけのカフェに寄った。取材でいつも使っている。仁美は、今日は取材ではなく、先里幹夫『よろい』を読もうと思った。リンメイと考えが離れてしまわないように。

仁美は、３時間も『よろい』を読んでいて、お昼も、ハンバーグライスを頼んだ。ずっと、このカフェにいる。仁美は、パソコンを取り出して、ワードの文章を書きはじめた。『詐欺の論理』である。３時間もよろいを読んでいて、詐欺というものの本質が理解できた気がした。仁美は、詐欺記者である。詐欺のことを追わせたら、仁美の右に出る人はいない。少なくとも友田は、そう思っている。ひょっとすると、『詐欺の論理』をものにできたかもしれないと思った。書かないといけない、イメージだけだと、次第に薄くなっていく。
ハンバーグライスが来た時は、すでに、ワードの文章に組み込んでいた。冷めるかもしれないが、今書かないといけない。『詐欺の論理』それは、詐欺の被害者のよろいにある。もっとお金持になりたい。もっと地位が欲しい。もっと名誉がほしい。もっと立派なモノを持ちたい。もっと立派な所に住みたい。もっと報酬を多くしたい。もっとよろいを厚くしたいからだ。よろいの考えがある以上、詐欺はなくならない。仁美は、まだ30歳だが、詐欺をながく追っている。いつも、どうしてこんなことにと思う。騙される方が情けなく思う。
「どうしますか？温めますか？」
主人のことばに驚いて顔を上げた。
「お願いします」
しばらく休憩して、仁美はハンバーグライスを食べた。深い満足感があった。リンメイにお礼を言わないといけない。お礼よりも、『詐欺の論理』を書き上げて、編集をリンメイに頼むことがグッドである。
仁美は、必死になって『詐欺の論理』を書いた。被害者の論理は、よろいである。加害者の論理も、同じよろいである。よろいの少ない人は加害者にはなれない。つまり、詐欺においては、加害者にもなれるし被害者にもなれ

る。よろいの少ない人は、加害者にも被害者にもなれない。
仁美は、必死になって文を綴った。ワードで何ページなるのか、わからなかった。これが、興味本位の友田の雑誌に掲載されるかどうかも、今は考えたくもなかった。

もうすぐリンメイから電話がある。
書き終えて、仁美は、船渡二郎のことを考えていた。リンメイが、船渡二郎は滅びると言っていた。成功したことがよろいになって、よろいを守るためにやってはいけないことをやって、滅びるという考えだった。
リンメイの言ったことに従えば、船渡二郎は、よろいを守るために、やってはいけないことをやることになる。船渡二郎とルイハシ研究所のよろいは、ものすごく厚い。このよろいを守るために、やってはいけないことをやるとは、何だろう。
今は、船渡二郎とルイハシ研究所のよろいが、分厚くなっているという事実だけがわかる。これは、船渡二郎やルイハシ研究所の人達も、気がついてはいないだろう。

○ルイハシ明洞
10月16日だった。リンメイは、朝早く起きた。
「学校なのか」
「ゆっくりしてていい」
リンメイは簡単にシャワーから出てきたようだった。キッチンに行って何かやっている。醤油の焼ける匂いがしてきた。仁美は、たまらずベッドからキッチンに向かった。
「焼きうどんつくった」
仁美は、慌てて着替えをした。
「これはおいしい」
「ありがとう」
「どうしたんだ？」
「詐欺の論理の編集をやる」

「編集長に頼まれたわけじゃないでしょ？」
「リンメイがよろいを読ませてくれなかったら思いつかなかった」
「感謝してる」
「掲載されるかどうかわからないけど、記事の意味は大きい」
リンメイもよくわかっていた。詐欺の本質はよろいである。よろいは、人からは消えないから、結局、詐欺は人から消えないことになる。

「取材に出かけるけど」
「平気」
「お昼も帰って来ない」
「自分でやるから平気」
リンメイは、『詐欺の論理』の編集をしていた。
長崎まで来ていた。仁美は、被害者の方の言い分が、すごくわかりやすくなった。この人は、親戚一同へのよろいのために騙されてしまったと、読めるようになった。仁美は、人助けのために詐欺の取材をしているわけではない。たまたま、友田に、詐欺の取材を命じられているだけである。サラリーマン記者である。命じられれば、どんな取材でもする。
しかし、今日は、何かが違う。自分にも上手く説明ができない。取材の仕方が変わってしまった。モニター的だったのが、人生相談的になったのだろう。女性は、社会に対してみっともないというよろいが大きい気がした。男性は、個人的な欲望のよろいが大きいような気がした。なにか、詐欺事件を通して、よろいが見えてくる。

「まだ帰れないの？」
「もう長崎を出た」
「ごはんつくっていい？」
「お願いします」
「ルイハシ研究所がミナミにもお店出すんだって」
「大阪ですか？」
「さっきニュースでやってた」
「明洞にも出すんだって」

「どこですか？」

「ソウル」

仁美は、上場が確実だから、借金をしてやるのだろうが、こういうのは、よくないと思った。多分、上海にもというニュースになるのだろう。パリやニューヨークにも。ルイハシ研究所のよろいが、どんどん厚くなっている気がした。

崩壊

〇誘拐
「これいい、11月20日発売号にしてやろう」
「仁美の記事にしてはグレードが高いけど」
「うちの雑誌にしてもレベルが合わないけどいいだろう」
10月18日朝、友田は、『詐欺の論理』を掲載してくれると言った。11月20日号も仁美の記事が３編ある。12月もまだあるだろう。リンメイにも謝礼ができる。
「掲載してくれるって？」
「仁美にしてはグレードが高いけどと言われた」
「よろいを読まなかったら書けなかった」
「一気に書いたことも良かった」
リンメイは、うれしそうに仁美を見ていた。もうすぐ学校に着く。仁美は、後に注意していなかった。仁美が車を止めてリンメイを降ろした時、いきなり後の車から男が降りてきて、リンメイに代って助手席に乗り込んだ。アッという間だった。
「出して」
リンメイは、驚いて仁美を見ていた。リンメイを襲うのではないらしい。リンメイは、どうしていいのか何も考えられなかっただろう。

仁美は、自分がどこにいるのかわからなかった。工場のような所だ。廃業した会社の工場の感じだ。仁美を監禁したということは、リンメイが狙いだろう。リンメイの命だったら、仁美を監禁しなくてもよい。リンメイにリンメイ暴露記事を書かせるためだ。
ケータイも奪われた。あのケータイには、知られたくないことことがたくさん入っている。
海側に走らされて、大きな駐車場で駐車した。
「わかってると思うけど、リンメイを預かっている」

車を乗り換えて、手錠と目隠しをされて、ここへ連れてこられた。油臭い部屋には鍵がかけられているのだろう。開かない。窓もない。イスが１つ置いてあるだけだ。リンメイはどうしているのだろう。想像するしかない。仁美を監禁する理由は１つしかない。リンメイが拒否すれば、仁美が無事ではなくなるということだろう。
仁美は、こういう展開を予測したことがなかった。誰もが、リンメイ暴露記事を諦めたと思っていた。これを仕掛けたのは誰だろう。考えても、思い浮かばない。銀座に本社のある大手の化粧品会社か、橋本九朗か。大手の化粧品会社にしては、やることが荒っぽい。大阪の化粧品会社か。風間か。弁護士の風間がやることではないだろう。丸石と霧島だろうか。丸石はリンメイの味方である。最後の手段として、選択したくない方法を選んだのだろうか。それにしては荒っぽい。麻野すみだろうか。麻野すみはメンツを賭けて、リンメイ暴露記事を欲しがったのだろうか。
仁美は、リンメイのことがすごく気になった。リンメイ暴露記事には、船渡二郎との念書がある。この念書に違反して、リンメイ暴露記事が出たら、船渡二郎は、黙っていないだろう。リンメイだけではなくて、仁美の命さえも危なくなる。これはタイヘンなことになってしまった。

仁美は、時間がわからない。時計は持っていない。ケータイの時計を使っている。部屋は窓がない。仁美は、冷静にならないといけない。ドアを叩いてみた。多分、１時間は過ぎている。
「なんだ」
「トイレに行かせてくれ」
簡単にドアが開いた。さっきの男だった。
「リンメイを預かってる」
仁美は、トイレを調べた。窓も何もないトイレだった。ここから外に出ることなどできない。とりあえず、男のところへ帰った。
「いつまでここにいるんだ」
「連絡のあるまでだ」
「会社だってすぐに気がつく」
「わかっている」

男は、仁美を部屋に入れると、鍵をかけた。
そして、３時間は過ぎたと思う。さっきの外の様子では、今は、お昼の２時頃だろうか。
ドアが開いて、男が入ってきた。ファーストフードの紙袋を持っていた。
「お昼か」
「そうだ」
多分、２時近くだろうと思った。元気でいないといけない。何があるかわからない。ゼンブ食べて、冷たいコーヒーも飲み干した。
リンメイが、暴露記事を語って、録音ができれば、リンメイも仁美も解放されるだろう。このリンメイの告白は、記事にはならない。録音ディスクが、船渡二郎への脅迫の材料にされるだけだ。上場前のルイハシ研究所の株を、現在の評価額で買い取る。何も、違法ではない。問題は、船渡二郎に、株式売却を迫った行為である。これは脅迫なのだ。そして、リンメイと仁美は、今度は、船渡二郎から、交通事故を装って命を奪われることになる。留内が襲われたようになる。留内の事故は、ひき逃げになっているだろう。犯人は捕まらないと思われる。
リンメイはどうしているだろうか、気になる。四面楚歌である。リンメイが告白をしなかったら仁美が危ない。誘拐されるところを見ている。自分も危ない。リンメイが告白をすれば、黒のサングラスの男から永遠に狙われる。

○リンメイの告白

多分、また３時間くらいが経った。
「トイレに行かせてくれ」
簡単にドアが開いた。外が暗くなっていた。夕方６時だろうか。男は、仁美をトイレまで追ってくるわけでもない。
「リンメイを預かっている」
廃工場なのに、電気も使えるし水も出る。不思議である。電気代も水道代ももったいないだろうに。余計なことを考えてしまう。
しばらくして、またドアが開いた。紙袋とお茶のボトルを入れて、男は鍵を締めた。牛丼だった。

仁美を傷つけるつもりはなさそうである。リンメイの告白が録音できればいいのだろう。警察に持ち込まないことを条件に解放されるだろうと思った。しかし、時間がかかっている。もう７時間くらい経過している。リンメイの告白は、はじめれば、１時間で終わることだろう。
どうなっているのか、仁美には、想像すらできなかった。リンメイが拒否して、危なくなっているのではないかと思ってしまう。しかし、仁美に何もない。リンメイが拒否すれば、仁美が危ない。そういうつもりで仁美を誘拐したのだろうに。
時間が経過すればするほど、仁美は、リンメイが気になる。
このままここで眠るのだろうか。イス１つしかない。イスに座って考え事をしていると、最悪のことを考えてしまう。リンメイが危機なのに、何もできない自分が情けない。
リンメイは、リンメイの告白を話していない可能性がある。まだ話していないのかもしれない。話せば、一生狙われることを知っている。話さなければ、今危ないのかもしれない。どっちを選択するかである。この時間である。話さない方を選択した可能性が高い。仁美にも危険が近づいてくる。いろいろなことが、頭を駆け巡る。
そもそも、なぜ四面楚歌になったのだろうか。やはりこの話は、よろいの話だろう。船渡二郎が、ルイハシ研究所のよろいがここまでにならなければ、リンメイの告白など、何の価値もない。誰も聞いてもくれない。リンメイが、船渡二郎から逃げ出した時に、すでにして、リンメイの告白は、大きな価値を持っていたのだろう。それを、仁美は、よくわからなかった。リンメイの告白は、一旦、終わりになったかと思われた。リンメイの、船渡二郎に対する念書である。リンメイが念書を書いたことは、関係者全員に知らせた。リンメイが、リンメイの告白をしないことは、みんな知っている。知っているのに、なぜだ。明らかに、船渡二郎へ対抗しようとする勢力によるものだ。
仁美の頭は、グルグル回ってしまう。四面楚歌だから、グッドな答えなどない。仁美が、外の男を襲ったとしても、リンメイを、更に危うくする。何から何まで四面楚歌なのだ。
そしてまた３時間くらいが過ぎたと思った。

「トイレに行かせてくれ」
ドアが開いて、お茶のボトルが２本置かれた。仁美は、トイレに向かった。
「何時ですか？」
「９時だ」
外の男は、仁美に時間を教えることが、まずいことだとは思っていない。仁美が、勝手にまずいことだと思っていたのだ。
「リンメイはどこにいるんですか？」
「リンメイは無事ですか？」
「何も話せない」
「ケータイで連絡が来るのか」
「そうだ」
「解放の連絡なのか」
「そうだ」
「どうなったら解放の連絡がくるのか」
「よくわかってるだろう」
リンメイの告白であることは確実だ。それが、この時間までに終わってないことになる。はじまってないのか。それはそれで、リンメイの身が気になる。
「横になりたいけど」
「考えてない」
仁美は、靴を脱いで靴下も脱いで、長期の構えをしようと思った。背広も座布団にして、横になった。一気にラクになった。床は固いが、ラクになった。
しばらく、ウトウトしたような気がした。
いきなり鍵が開く音がした。

〇黒メガネの男が来た

仁美は、そっとドアを開けた。
男はそこにはいなかった。誰もいない。外で車のエンジン音がした。仁美のケータイがテーブルに置かれていた。財布もあった。

どういう意味だろう。さっぱりわからない。背広の泥をはたいて、靴下を履いて靴を履いた。ネクタイをポケットにしまい込んだ。
「もしもし」
リンメイにはつながらないと思った。
「どこにいるの？」
意外だった。
「いまから外に出るけどどこかわからない、監禁されていた」
「ケガは？」
「私は平気だけどリンメイはどこなんだ？」
「家」
「え？なにがあったんだ」
「黒メガネの男が来てお金払ってわたしをマンションまで送ってくれた」
「あの黒メガネの男か」
「そうだと思う」
仁美は、とにかく外に出ないといけないと思った。
「帰るから」
「平気？」
「タクシーで帰る」
仁美は、ここがどこかよくわからなかった。
タクシーの運転手に聞いた。
「戸畑です」
仁美は、佐賀の方に向かったと勘違いしていた。門司の方に向かったのだ。とにかく、リンメイが気がかりだ。タクシーの中でもリンメイとは話ずらい。焦る気持ちを抑えて、じっと待った。それにしても、家にいるとはどういうことなのか。ケガはしていないのか。襲われてはいないのか。

「いくらあなたに危害を加えると言われても、話さないつもりだった」
「わたしに何をしようとも」
「あの黒メガネの男はゼッタイに許さないから命を一生狙われる」
「夜になって、黒メガネの男が来た」
「手提げ袋にお金が入っていたと思う」

「脅していた男は、それを持ってすぐに逃げた」
「黒メガネの男はわたしをここまで送ってくれた」
「わたしがどこに住んでいるのか、よくわかってた」
「リンメイには何もなかったのか」
「唇が腫れてる」
「殴られたのか」
「それだけか」
「ハダカにされたりしなかった」
「黒メガネの男に念書は守ったって言った」
仁美は何も危害を加えられなかった。リンメイの告白をさせる男は、ガマンができなかったのだろう。リンメイの左の唇が切れていた。歯に当たったのだろう。かなりの血が出ただろう。服が血だらけだった。
「リンメイシャワーできるか？」
リンメイは、シャワーへ行った。仁美もシャワーへ向かった。リンメイは硬かった。リンメイを手で洗った。ずっとこういう辛い思いをしてきたのだろう。なみだも流さない。生き残るという生き物の原点のようだ。仁美は、ポリ袋を持ってきて、リンメイの着ていた上から下まですべてを捨てようと思った。リンメイは、仁美が買った飾りだけを外した。
２人で、よく考えないといけない。どう対処するか、相談しないといけない。これが終わりであるわけがない。

「何も食べられない」
食事の用意をしようとした仁美に、リンメイが言った。トマトジュースを冷蔵庫から探してきて、ストローと一緒に渡した。コップに移して、ストローで飲めそうだった。
「まだあった？」
水分がなくなっているのだろう。続けて３缶も飲んだ。
「少しは落ち着いた」
「あなたを誘拐したのは誰なんだろう」
「私が連れ去られた後はどうなったんだ？」
「後にいた車に押し込められた」

「どこに連れて行かれたんだ？」
「毛布かぶせられたからわかんない」
「山の方だった」
「１人なのか」
仁美の方も１人だった。リンメイも１人だった。犯人は２人ということになる。
「黒メガネの男は何時頃来たんだ？」
「８時20分」
「どうして時間がわかるんだ？」
「時計見た」
リンメイは、腕時計をしていた。
「ケータイとかは？」
「机の上に置いてあった」
「黒メガネの男はどういうふうに来たんだ？」
「いきなり入ってきて約束の金だって言った」
「リンメイが話さないから船渡二郎を脅したのか」
「お金に切り替えたのか」
「わたしを殴った後、外に出て電話してた」
「何時だ？」
「３時頃」
「黒メガネの男は東京から来たんだと思う」
「だから８時20分になった」

○留内有子の交通事故

仁美も何も食べないままだった。しゃべっている途中でリンメイの声がしなくなった。机に両腕を枕にして、うつぶして眠ってしまった。仁美は、リンメイを抱いてベッドに連れて行った。完全に眠っている。
仁美は、それでも戸締りを確かめた。そして、考えようとした。しかし、安堵感には勝てない。リンメイの横にもぐり込んだ。ながい１日だった。危険な１日だった。

さすがに、リンメイは起きて来なかった。10月19日である。昨日のことは、関係者以外、誰も知らない。仁美もリンメイも警察に訴え出ることなどしない。したがって、誰も知らないことになる。
仁美は、コーヒーを煎れた。ピザ生地をウインナーを挟んで焼いた。キャベツにラッキョウの漬け汁をまぶして食べていた。新聞を読んでいた。
仁美は、頭を金づちで叩かれたと思った。留内有子が交通事故で亡くなっていた。ひき逃げ交通事故で退院したばかりだと書いてある。11時ごろ、学校を出てすぐの横断歩道だった。30メートルも飛ばされて、即死らしい。
リンメイにも電話が入る時間である。先生なのだ。
仁美は、あの黒メガネの男の仕業だと思った。そして、仁美を誘拐してリンメイを脅したのは。留内有子だと思った。黒メガネの男の怖さを知っていたはずなのに、なぜだろう。そんなにお金が欲しかったのだろうか。
「わたし出かけないといけない」
リンメイが慌てて起きて来た。
「これを見て」
リンメイは、新聞を読んだ。察した。
「なんでお金のために命を落とすの？」
「手提げ袋にいっぱいお金が入ってたけど」
「リンメイ、１人で動かないでほしい」
「学校の友達と同じ動きをしてほしい」
「誰も、留内とリンメイの特別な関係を知らないから」
「先生だからみんな行くから一緒に行く」
リンメイは、どこかに電話をした。ながなが電話で話していた。
「昨日何度も電話したんだけどどうしたんだ」
友田から電話がかかってきた。
「詐欺の論理を年間優秀記事にすることにした」
「50万円だ」
「ありがとうございます」
「読者の反応がどうあろうと雑誌の志気を高める」
おかしな賞をもらったものだが、お金はうれしい。友田は、何も気がついて

いない。友田が気づいたらメンドーなことになる。
「今日はどこも行かない」
「ごはん食べる」
「お通夜とかどうなったんだ？」
「連絡が来るようにしてある」
「あの黒メガネの男だよね」
「わたしをここに連れてきて、そのまま学校で先生を待ってた」
「あの男の人も危ない」
「わたしも交通事故にしちゃったらメンドーはなくなる」
「彼は念書を守ってる」
「リンメイをやったら、私が彼をやる」
「お互いによくわかってる」
リンメイは驚いた顔をした。
「誰か知ってるのね？」
「確信はない」
「船渡二郎たちにとって最も安全なのは、念書を守ることだ、守らせることだ」
「留内は裏切ったけど、リンメイは念書を守った」
「黒メガネの男はわたしは襲わないのか」
「そういうことになる」

仁美にとっては、リンメイの安全以外はどうでもよい。今のところ、リンメイの安全を脅かすものは、黒メガネの男以外には見当たらない。そして、黒メガネの男は、リンメイが、念書を守る限りにおいては、リンメイの味方に近い動きをする。
リンメイは、よくわかっている。だから、殴られてもリンメイの告白を話さなかった。リンメイが念書を裏切ったら、すぐに留内と同じようになる。すでに、２回も襲われている。黒メガネの男は、２回もリンメイの襲撃に失敗している。なのに、昨日は、リンメイを守った。
不思議な関係なのだ。念書がなかったら、この関係は成立しない。リンメイが、念書を守る姿勢がなかったら、この関係は成立しない。

「もう誰もリンメイの告白を書かせようとしないだろうね」
「人って、権力とかお金に弱いよな」
リンメイは、独り言のように言った。
「坂本龍馬さんと高杉晋作さんくらいのもんか？権力にもお金にも動じなかったのは」
「先里さんが言ってるけど」
「あなたもおかしなオンナと出会ったばかりにタイヘン」
「リンメイ、愛しているんだ」
リンメイの目が赤くなった。コーヒーを注ぎに行った。

○年間最優秀企業

10月21日、留内の葬儀に、みんなと行くと言った。上海人のリンメイには着る物もなく、昨日、仁美と２人で、洋服を買いに出かけた。
リンメイは、留内の本名は知床敏子で、小倉にお父さんがいて、北海道の人だと言った。お母さんはよくわからない。
福岡駅に集まって、みんなで小倉に行くらしい。仁美は、リンメイを福岡駅まで送った。
「何度も電話するように」
「わかった」
リンメイは、清楚な装いなのに、なぜだかオーラを放ってしまう。みんな振り返ってしまう。仁美は、改札口に向かうリンメイを、じっと見ていた。
駅の電光掲示板に、ルイハシ研究所が今年度最優秀企業に選ばれそうだと表示されていた。
リンメイの後姿を見ながら、年間最優秀企業である。留内の交通事故に深く係っている。リンメイも念書を書いている。リンメイ流に言うと、ルイハシ研究所のよろいを守るために、留内やリンメイが襲われている。
世の中おかしなものだ。やりきれないと思うが、現実は、そう簡単ではない。念書を裏切れば命が危ないのだ。念書の元は、上海の交通遺児として預かった留学生のリンメイなのに、自分のオンナにしてしまった、ルイハシ研究所の社長の船渡二郎の醜悪さから、はじまっているのだ。それが、年間最

優秀企業である。
仁美には、どうすることもできない。とにかく、リンメイを守りたい。それだけだ。

仁美は、「詐欺の論理ー２」を書きはじめていた。起こってしまった詐欺事件を、おもしろく、興味深く書くことが仁美の仕事である。読んでもらわなくては、雑誌は売れない。「詐欺の論理」は、友田の言うように、これで雑誌が売れるとは思えないが、詐欺の本質が理解できる人がいるかもしれない。そういう文である。
３時になってリンメイから電話があった。
「福岡駅までみんなと一緒に帰る」
「服装が服装だからどこも行かない」
「何時に行けばいいんだ？」
「電車からメールする」
「なにもないのか」
「みんな泣いてるけどわたしは泣かない」
「あなたとわたしを誘拐して脅迫した」
「他人をワルク言うのは止めよう」
「人は誰もワルクはない、ワルイのは見えざる悪魔」
「お願いします」
リンメイは、すっかり先里幹夫に浸かってしまっている。
留内はとんでもいないオンナだった。リンメイにリンメイの告白をさせたら、リンメイは１００％交通事故で死んでいた。それをワルク言わないとはどういうことか。

「日本の作法はメンドーで何もわからない」
「みんなの見て同じようにするしかない」
確かにそうだ。何でも、日本には作法がある。
上海人のリンメイにはメンドーだ。
「何も変ったことはなかったのか」
「２度もひき逃げされたからついてないってみんな言ってた」

誰も知らない。リンメイだって２度も襲われた。あの黒メガネの男だ。
「ただいま〜」
リンメイは、誰もいないのに「ただいま」を言う。もう慣れたが、おかしなもんだ。
「詐欺の論理ー２を書いてるんだ」
開きっぱなしの仁美のパソコンをチラッと見てリンメイは言った。
「今晩わたしが用意する」
仁美は、財布をリンメイに渡した。リンメイは、そこから２千円を取り出して、仁美に財布を渡した。
「それでいいのか？」
「貧乏にしないと何があるかわかんない」
確かにそうだ。留内だって、もういなくなったのだ。何があるかわからない。リンメイは着替えをはじめた。そしてＥＣＯバックを持って出かけた。
仁美は、書きかけの、詐欺の論理ー２の前に座った。
リンメイがつけていったテレビから、ルイハシ研究所が今年度最優秀企業賞を受けるかもしれないと報じていた。まだ中小企業である。実態はともかく、名前だけが先行している。テレビを見ながら、ルイハシ研究所の重要人物、土肥雨霧を考えてしまう。どういう経歴なのだろうか。
インターネットで、ルイハシ研究所を検索してみた。ホームページには入りにくくなっていた。年間最優秀企業賞の有力候補になったことを、ルイハシ研究所もホームページに掲載していた。
すごい勢いである。もしここに、リンメイ暴露記事が出てきたら、大きな反響があるだろう。ひょっとして、船渡二郎は、潰れるかもしれない。交通遺児として引き取ったのに、自分のオンナにしたのだ。女性たちが許すはずがない。
船渡二郎は、なんとしても、リンメイの告白を防がないといけないのだ。土肥雨霧が負っているのだろう。土肥雨霧にとっては、リンメイが生きていることそのものが、念書があるとはいえ、心配の種なのかもしれない。

○危機一髪

10月22日、リンメイは早くに起きた。学校へ行くらしい。
「わたし転校の申請してる」
「来年から分子生物学の研究室に行く」
現在の学校には、そういう専門の研究室がない。ゲノムを研究して医者になることを実現したいのだろう。
「試験がある」
「オリエンテーションあるから」
仁美にはよくわからない。同じ福岡にある学校だ。そう簡単に転校できるのだろうか。
学校の推薦がポイントになるらしい。
「わたしキチンとしてきてるから平気」
「わたしよろいを知ってるから平気」
よろいを知っているから平気とは何だろうか。最近リンメイは、仁美にもよくわからないことを口にすることが多い。みんな先里幹夫の影響ではないかと思う。先里幹夫はなんなんだ。
いつもの朝ごはんである。リンメイのケータイだった。
「電話しないでください」
「モデルとかなりたくありません」
「念書は守ります」
船渡二郎からの電話のような気がした。
「モデルにするから戻ってきてくれ」
「女優にしてやる」
まさか、これほどとは思わなかった。船渡二郎は、リンメイを恐れていると思っていた。とんでもないことだった。リンメイがシッポを振って銀座に行くとでも思っているのだろうか。
「わたし誘拐されるかもしれない」
リンメイの不安は的中した。
来年４月から転校したい学校のオリエンテーションの帰りだった。仁美は、正門で待っていた。まだ15時30分だった。リンメイに電話をしたが通じなかった。イヤな予感がした。30分待った。16時だった。仁美は、船渡二郎の福岡の家に向かった。リンメイに電話をした。これで７度目の電話であ

る。学校の事務局に電話をして確認した。オリエンテーションは14時30分に終わっている。何事もなかった。
仁美は、かなり手前で車を止めて、船渡の自宅に向かった。もしリンメイが誘拐されたとしたら、とりあえず、ここだろう。
仁美は、黙って高い塀を、電柱を伝って飛び越えた。これがどういうことかわかっている。２階の角と１階に灯りがついている。１階を覗いてみた。カーテンでよく見えない。船渡二郎のように思えた。電話をしている。仁美は、２階に上がる方法を考えた。雨戸が閉まっているが、完全に締めきれていないのだろう。灯りが漏れている。
２階へ上がる道を探すために、玄関側に移ってみた。船渡二郎の他に、誰もいないのだろうか。玄関を引いてみた。大きな立派な日本風の引き戸である。カギがかかっていない。仁美は意を決して、靴を脱いで２階へ上がった。時々大声になる船渡の電話する声が聞こえていた。
玄関に、リンメイのケータイがあった。
「リンメイ開けてくれ仁美だ」
「船渡二郎は下で鍵屋と電話してる」
リンメイが何をしたか察しがつく。監禁されたのだが、中から鍵を締めている。窓側は鍵があるのだろうか。
「向こうの窓から飛び降りれないのか」
「窓の下で待ってる」
仁美は、玄関でリンメイのケータイをポケットに入れて、そっと、リンメイがいる２階の角の下に向かった。誰かが、２階から顔を出した。仁美かどうかを確認したのだろう。とても信じられない。仁美は、リンメイに見えるように、手を振った。リンメイだった。リンメイは、手すりにぶら下がって、飛び降りた。躊躇していない。仁美は、慌ててリンメイを受け止めた。ハダシのままリンメイは走った。仁美も走った。車まで行けば、もうこっちのものだ。

「今日の朝、船渡二郎は、ここからリンメイに電話したんだ」
「なにがあったんだ」
「これと同じ車があってドアが開いていた」

「あなたじゃなくて船渡二郎だった」
「黒メガネの男は？」
「いない」
「２階の角に入れられて鍵をかけられた」
「船渡が入ってこようとして鍵をはずしたが、わたしが中から鍵をした」
「まさかあなたが来るとは思わなかった」
「ケータイが玄関にあった」
「リンメイが忘れられないのか」
船渡二郎の驕りだろう。権力だ。なんでも自分の思い通りになってしまうからだ。リンメイは毒蛇のはずである。リンメイが口を開いたら、船渡二郎は危ない。当然、ルイハシ研究所も危ない。それなのに、リンメイをそばに置こうとする。
「マンションに帰っても、マンションに踏み込まれそう」
「リンメイ、リンメイによろいはないのか」
「リンメイが将来医者になって立派になって、船渡二郎のオンナだったことで脅されて、やってはいけないことをする可能性もあるだろ？」
「よろいって、ウソもないから平気」
「あの人は、わたしが念書を守らなかったら交通事故にする」
「念書を守ると言ってるから甘く見られてる」
「わたしが、自分のオンナになるしかないと思ってる」
仁美は、車を下関まで走らせた。素泊まり４０００円の安心できる宿を知っている。

○リンメイの告白は録音された

10月23日土曜日である。
「お昼は水族館の中の食堂で食べる」
水族館は安全なのだろう。
仁美は、リンメイを下関の水族館に連れて行って、そのまま自分のマンションに向かった。何も荒らされている気配はない。盗聴器くらいは仕掛けられたかもしれない。

仁美は、ルイハシ研究所を調べた。30分もかかって１件づつ調べて、興味のある情報に出会った。福岡の山奥に、ルイハシ化粧品の派手な４トントラックが４台も止まっていたという、なんでもないブログである。仁美は、カンでわかった。何をしていたか、理解した。仁美は、詐欺事件を追わせると、右に出る者がいないと言われる。独特のカンが冴えるのだ。今は、ルイハシ研究所をターゲットにしている。ルイハシ研究所を倒さない限り、リンメイが危ない。
１時間以上も走った。
ブログではだいたいの場所しか示していない。山奥である。廃校があった。仁美は、廃校を通り過ぎて、少し裏に回ったところに車を止めた。車からカメラを持って出た。
表側に３人作業員の制服のようなものを着て、何かを待っている。仁美は、見つからないように、裏に抜けて、建物の中を覗いた。６人くらいの男が、何かをやっている。フラッシュは使えない。かろうじて映っている。ここで、処方の近い安い化粧品をルイハシ化粧品に詰め替えているのだ。３００円くらいの化粧品が３０００円になる。薬事法違反だろう。フツウで考えると、福岡の工場では生産できない数のはずだ。とんでもないことをやっている。

仁美は、迷うことはなかった。下関に行ってリンメイを拾って、マンションへ帰った。もう勝負をつけようと思った。リンメイにも話した。勝負をつけないと、リンメイも学校に行けない。ゲノムを研究して医者になることも叶わない。
仁美とリンメイは、朝の４時までかかって、40通の封書をつくった。仁美が撮ってきた写真と仁美の文章を、雑誌記事のように、リンメイが編集した。キレイでないと読んでくれない。
封書をつくり終えて、仁美とリンメイは、眠ろうとした。
「リンメイ、出よう」
仁美は、盗聴を恐れた。リンメイと小倉の郵便局の前で眠ることにした。もし盗聴していたら、マンションは襲われているだろう。パソコンは持って出た。仁美は郵便局の前に車を止めた。コンビニで切手を売っている。仁美は

ダミーを持って郵便局の前のコンビニに入った。
「これだけどいくらの切手になりますか？」
「40枚ください」
「ポストはどこですか？」
仁美とリンメイは、襲われる前に、この封書をポストに入れる必要があった。５分でできた。郵便局の前のポストに、40通の封書を投函した。
仁美は、そのまま、マンションに引き返した。
「リンメイ、何かあったら逃げろ」
「エンジンを止めるな」
カギが開いていた。締め忘れたとは思えない。電灯もついている。
「出てきてください」
仁美は、外に出て、調べておいた盗聴を調べる会社に電話をした。朝の５時である。
「すぐに行きます」
「何分ですか？」
「10分です」
また下関に逃げようと思っていた。10分で来てくれるのだったら、エンジンをかけたまま、ここで待つことにした。もし盗聴していたら、福岡の郵便局に行ったはずである。もうすぐ、ここに帰ってくるだろう。誰か。船渡二郎か土肥雨霧か雨森三郎か。
やっぱり、盗聴器を仕掛けられていた。しかも２ヶ所もである。朝の６時には盗聴器がはずれた。盗聴器をはずす会社には感謝である。
「リンメイ、もう何があっても引きさがらない」
「私に何があっても引き継いで戦ってくれ、リンメイに何があっても私は戦う」
「リンメイの告白を録音しておく」
「使わなくて終われば幸いだけど」
10月24日だった。リンメイの告白は録音された。

○壊れるよろい

覚悟が決まれば安心できる。仁美とリンメイはぐっすり眠った。10月25日になった。早朝である。テレビが仁美が訪れた福岡の廃校を映していた。テレビで見ると異様に見える。40の封書が素早く動いた。地元福岡のテレビ局が昨日の夜中に確認したと言っている。そして今はライブだろう。外の映している段ボールが、仁美の文を確認している。この映像は、今日１日、繰り返して流される。スクープなのだ。
リンメイは、唖然として見ていた。船渡二郎に誘拐されて監禁されたのは、３日前である。リンメイには、絶望感があった。これまでと同じように、運命には逆らえないような気がしていた。船渡二郎とルイハシ研究所の強大になったよろいに屈すると思っていた。それが、たった３日後である。仁美とリンメイには、もう逃げ場がなかった。いくら強大であっても、倒さないと、自分が殺られる。リンメイは、仁美を見ていた。小さな槍が分厚いよろいを突き抜けた。
「リンメイ、学校かもしれないけど、今日は、ここにいよう」
「まだどうなるかわかんない」
盗聴されていたのだから、仁美とリンメイの仕業であることは知っているだろう。黒メガネの男は、リンメイと仁美を襲うだろう。船渡二郎は、逮捕される。
お昼のニュースになった。銀座のルイハシ銀座店は店を開けなくなった。ルイハシ研究所は、コメントも何も出さない。薬事法違反で捜査が入るらしい。
「11月20日号の驚きのルイハシエステは没にした」
「仁美がワルイわけじゃないが詐欺の論理と詐欺の取材だけだ」
友田が、まだ何も理解していないのが幸いだった。仁美も、３日前まで、こうなるとは思ってもみなかった。仁美とリンメイは、追い込まれたのだ。四面楚歌になった。自分を賭して戦うしか道がなくなったのだ。
仁美は、立ち上がってラーメンをつくりはじめた。ひょっとすると、これからが本当の戦いかもしれないと思った。あの黒メガネの男は、仁美とリンメイを生かしてはおかない。多分、船渡二郎とルイハシ研究所は消滅する。

夜になった。船渡二郎は、福岡の自宅で逮捕された。玄関から、毛布をか

ぶった船渡二郎らしい男が出て来た。リンメイを誘拐した時から、福岡の自宅にいたのだろう。まさか、こうなるとは思ってみなかっただろう。いままでのように、簡単にコトが進むと思っただろう。リンメイは、自分のオンナに戻るしか道がないと思っただろう。
リンメイも仁美も、テレビに映っていることが、信じられない。
「リンメイ、黒メガネの男は、私とリンメイをずっと狙う」
「覚悟してる」
ピザ生地を焼いてピザにした。外には出られない。あの黒メガネの男が気になる。多分、土肥雨霧だ。確認したわけではない。

〇麻野すみの交通事故
10月26日になった。リンメイは、試験だった。転校のための試験だ。試験勉強などできなかった。それどころではない。命がかかっている。リンメイは、試験に行くと言った。多分、黒メガネの男に狙われている。盗聴できないために、ここを見張るしかなくなっている。
仁美は、部屋に入ったかどうか見分けるために、仕掛けをしておいた。やはり、盗聴が最も困ることだ。
「リンメイ、走って車まで行くから」
「わかった」
ドアに仕掛けをして、カギをかけて、仁美とリンメイは階段を走った。見張っているとすると、仁美とリンメイが外に出たことは知っただろう。仁美は、車を出した。１００メートルも走らないうちに、右側車線に後から黒のセダンが出て来た。黒のサングラスの男だった。そのまますごいスピードで追い越して、２台前に入った。
「リンメイ、気をつけて」
「あなたを狙ってる」
確かにそうだ、盗聴されていたとすると、仁美が狙われている。仁美がリンメイの転校先の学校に着いた時、前後に、車が全くいなくなった。ゆっくり走ったからだ。あの黒のセダンはどこに行ったのだろう。
「気をつけて、スーパーで買物する時も気をつけて」

リンメイは、もうはっきりわかっている。リンメイは念書を守った。仁美は、戦いを挑んだ。黒メガネの男の狙いは、仁美なのだ。
12時には試験が終わるので来てくれと言われていた。この時間では、長崎に取材に行くわけにもいかない。
リンメイには気をつけるように言われたスーパーマーケットに寄った。強力粉と薄力粉を買わないといけない。ピザ生地がつくれない。トマト缶も買っておこう。
仁美は、わざわざ混雑している中央前の駐車場が空くのを待った。そして、お店に入ろうとした。左から黒いセダンが猛烈なスピードで突っ込んできた。多くの人が見ていた。一瞬、仁美の足が止まった。急ブレーキがかかって、仁美の30ｃｍ手前で止まった。黒メガネの男だった。門司のナンバーだった。仁美は、そのまま歩いて、お店に入った。黒のセダンは、そのまま発進した。３秒後には、あたりは、何もなかったかのように、ざわめきが戻っていた。
仁美は、歩きながら考えた。これは警告なのか。こんなところでは、事故は起こさない。留内を死亡させた時も、夜、誰も見ていない時だ。リンメイが横断歩道で襲われた時も、30ｃｍ手前で止まった。しばらくは、夜歩くことを止めないといけない。

12時に近くになって、仁美は、車を走らせた。いつの間にか、後に黒のセダンがついていた。
「後に黒のセダンがいた」
「車が何も見えないけど」
リンメイも仁美も、怯えが少なくなってきた。もう戦うしかない。船渡二郎と戦った。今度は黒メガネの男だ。多分、土肥雨霧だ。
仁美は、またスーパーマーケットで買物をした。おでんの材料を買った。そして隣のドラックストアーでティッシュペーパーを買った。リンメイを車に残していた。どこにも黒のセダンは見えない。
「黒メガネの男がいない」
「毎日こうやって注意しないといけない」
これはもう戦いである。しかし、黒メガネの男が土肥雨霧だとしたら、ルイ

ハシ研究所の取締役である。船渡二郎が逮捕されて、ここで仁美とリンメイを追いかけていいのだろうか。疑問である。

10月27日になった。昨日は、黒メガネの男が見えなくなったこともあって、安心して眠った。朝早く、リンメイはシャワーをしていた。学校へ行くつもりである。命が危ない。学校どころではないだろう。リンメイは、ずっと、こうやって暮らしてきたのだろう。常に、危機だったのだろう。食べることにも困っただろう。危機の中で、自分のやりたいことをやる、そんな技を、身につけている。
ピザ生地のパンを食べていた。
「美容家の麻野すみさんが昨夜０時ごろ、交通事故で死亡しました。ひき逃げとみて捜査をしています」
いきなり、仁美とリンメイのこころを揺るがすようなことを、キャスターが言った。世田谷の路上である。発見されるまで15分もかかっているらしい。
仁美とリンメイは、顔を見合わせた。あの黒メガネの男ではないかと思う。
昨日、昼の12時に、リンメイを迎えに行く時には、後にいた。そして夜中の０時である。何があったのだろう。
「黒メガネの男は、わたしたちもやるね」
「私たちより緊急だったんだろうけど、麻野すみが」
「麻野すみや私たちを襲っても、もう遅いと思うけど」
リンメイは、何も考えられないという顔をした。
リンメイは立ち上がって、学校へ行く準備をした。
仁美は、今度は、黒メガネの男に追い詰められたと思った。時間の問題である。必ず襲ってくる。今日かもしれない。

〇黒メガネの男との戦い

10月28日になった。ルイハシ研究所は、開店休業状態になっているらしい。銀座のお店も開いていない。通信販売の返品が山のように、銀座のお店に返っている。もう会社が成り立っていない。土肥雨霧は何をしているのだろうか。

「ルイハシ研究所のよろいが壊れたんだよ」
リンメイが、何度も言う。
「わたしもよろい着ないようにしないといけない」
リンメイは、命を狙われているのだ。よろいどころではない。
「リンメイ、黒メガネの男のよろいは何なんだ？」
「プライド」
「黒メガネの男は、自分のプライドのために、麻野すみや留内を襲ったのか」
「留内先生を襲ったのは、自分のプライドではなくて、ルイハシ研究所のよろいを守るため」
「今オレ達を襲っているのは？」
「黒メガネの男のプライド」
「あなたが、黒メガネの男のプライドをズタズタにした」
「麻野すみさんも、何かわからないけど、黒メガネの男のプライドを傷つけた」
仁美は、車の中でのリンメイの話をよく考えようと思った。黒メガネの男と決着をつけないといけない。リンメイの話が本当ならば、黒メガネの男は、ルイハシ研究所から離れている。自分のプライドのために、仁美とリンメイを襲おうとしている。それがよろいというものだろうか。仁美は、読んでくださいと言われていた、先里幹夫『よろい』を読むことにした。
マンションに帰った。黒のセダンはいない。

夜、仁美は、詐欺事件の被害者からお礼をされることになった。前から言われていた。お礼をさせてくれだった。今日の夜にしたのは、理由があった。しかも９時半にした。仁美が指定したのは、居酒屋だった。60歳になる男の被害者は、取材した仁美から、取り戻すことができる話を聞いて、実行した。２００万円である。弁護士に謝礼をしたが、ゼロになるところだったのだ。仁美は、取材していて、諦めている人が多いことが不思議だった。11時になってお店も閉まった。男とは、お店で別れた。タクシーを拾うからと、送ってくれるという申し出を断った。
仁美は、緊張していた。ずっと酔えなかった。

この角を曲がって、横断歩道を渡ることになる。そのまま、横断歩道を渡りはじめた。信号は青だ。どこにも車はいない。左横から猛スピードで、消灯したまま、車が突っ込んでくる。渡り終えるまで３メールしかない。
仁美は、シミュレーションをしていた。留内が襲われた現場もよく見ていた。黒のサングラスの男は、横断歩道を渡り切る直前に、横断歩道に近づくように走る。人は、危険を察知して走ることを承知している。
仁美は、３歩バックした。頭に描いていたとおりだった。突っ込んだ車は、歩道ギリギリに突っ込んで、そのまま走り去った。黒のセダンだった。
仁美は、反対車線に止まっていた車に急いだ。リンメイに待ってもらっていた。
「どうだった？」
ビデオに仁美が襲われる様子が映っていた。
仁美とリンメイは急いだ。仕掛けたらやってしまわなければならない。黒メガネの男は、失敗したと思っている。またやってくる。仁美とリンメイが警察に駆け込まないことは知っている。仁美がリンメイを守りたいからだ。また眠らないで、『黒メガネの男と殺人車』を書いた。リンメイは、それを編集した。そして映像をダビングした。前回の40の封書の他に、世田谷と福岡の警察署に送った。小倉の郵便局の前のコンビニで切手を買って、小倉の郵便局のポストに投函した。今度は、証拠のビデオではない。留内も麻野も、こうやって交通事故を装ったという話だ。このビデオは、未遂としては証拠にはなるが、誰が投函したのかわからない。小倉の郵便局のポストに投函されたものだ。

次の日は10月29日だった。
リンメイの転校の試験の結果の連絡が来ることになっていた。毎年10名程度の転校がある。リンメイは、学校には行かずに、電話を待った。仁美は、詐欺事件の記事を書いた。
「よろいを読んだんだ」
「黒メガネの男のよろいを読まないといけない」
「あなたやわたしごときにルイハシ研究所のよろいを壊されて情けない」
「自分が壊してる」

「あなたが知らせなかったら、誰もわからなかった」
「薬事法違反です」
「あの人たちは、ワルイと思ってないからやった」
「あなたとかわたしとか雑魚だと思ってる」
「あの人たちだって雑魚だったのに鯛になったと思ってる」
「鯛が雑魚に負けるのはプライドが許さない」
「それがよろいなのか」
「よろいが傷つけられれば悔しいからとんでもないことをする」
「私を襲うのか」
「ルイハシのよろいは壊れたけど黒メガネの男のよろいは壊れてない」
「土肥雨霧だと思うけど」

「どうもありがとうございます」
「お知らせいただいた日程で転校の準備をさせていただきます」
リンメイは、日本語が、仁美より上手く使える。敬語がしっかりしている。
リンメイは、命を狙われながら、自分の目指すものを着々と実行している。
「命がなくなったらしようがない」
黒メガネの男とは、どうしても決着をつけなければならない。

○土肥雨霧の逮捕

10月30日土曜日だった。仁美はまだフトンの中だった。リンメイは、ご飯を炊いていた。干物に納豆が食べたいと起きた。味噌汁の匂いがしてきた。起きなければと思っていた。
「土肥雨霧が逮捕された」
リンメイの大きな声が響いた。仁美は、慌ててテレビに向かった。早朝４時に麻野すみひき逃げ犯の疑いで逮捕された。大きく報じられたのは、ルイハシ研究所の取締役だからだ。麻野すみを襲った盗難車の車内の髪の毛の１本が、土肥雨霧のものと断定されたからだ。匿名の投書があって、麻野すみと土肥雨霧を結びつけたと、アナウンサーが言っている。
確かにそうだ、もし、仁美とリンメイの映像と記事が送られなかったら、麻

野すみと土肥雨霧を結びつけるものがなかった。土肥雨霧のＤＮＡを調べようともしないだろう。
これはタイヘンなことだった。ルイハシ研究所が麻野すみを嫌ったのは理由があった。麻野すみ告白記事もある。麻野すみの訴訟もある。記事としては内容が豊富である。
しかし、それだけの理由で、交通事故に見せかけて、命を奪うだろうか。
「土肥雨霧のよろいがわからないと理由が説明できない」
確かに、リンメイの言うとおりかもしれない。
「あなたがこんな人だとは思わなかったんだろうね」
「船渡二郎も土肥雨霧も、結局あなたにやられた」
「リンメイを守りたかっただけだ」
「愛？」
「先里さんが言ってるとおりね」
「愛は人が動く押しボタンだって」
「土肥雨霧も愛なのか」
「自分のよろいを愛した」
仁美は、よろいを知ってしまえば、自分のよろいを愛したということで、土肥雨霧や船渡二郎を説明できる。簡単ではあると思った。
「リンメイの告白消去しちゃうから」
「あなたにも見られたくない」
リンメイは、パソコンの中のリンメイ告白を消去したのだろう。そしてネギ納豆をつくりはじめた。
「顔洗ってくれば？」
「ごはんたべよう？」
仁美は、なんとも意外な展開の感じがした。船渡二郎にリンメイが追い詰められた。土肥雨霧に仁美が追い詰められた。仁美は、背水の陣だった。思い切った行動に出た。
仁美とリンメイは、朝ごはんを、ごはんと味噌汁にすることは珍しい。

仁美は、長崎に出かけた。詐欺事件の取材である。
「ビックリしたな〜あまり深入りしなくて良かった」

「仁美は何も知らなかったのか」
友田から電話があった。友田は何も知らない。幸いだった。詐欺事件の取材をしながら、仁美は、これからどうなるのか、読まないといけないと思った。ルイハシ研究所は、アッという間に崩れた。それも、１週間くらいで崩れた。これはなんなのか。こんなにモロイものなのか。船渡二郎も崩れて、土肥雨霧も崩れた。これは何だろう。
「まだ何があるかわからないから安心しないで」
出かける時に、リンメイが言っていた。確かにそうだ。思ってもみない展開をする。留内が仁美を誘拐することなど、考えも及ばない。何があるかわからない。
夕暮れになった。長崎からゆっくり帰った。ゆっくり走ると、後に車がつけられない。何度も黒のセダンにつけられたが、こうすればよかった。余裕がなかった。今日は、誰も後にはいない。
「買物に来てるけど晩ごはん家で食べるでしょ？」
リンメイも、１人でスーパーマーケットに買物に行くことなど、久しぶりだろう。
「ルイハシ研究所は今月末の支払いができない」
今日だ。
「会社更生法などの手続きも間に合わない」
「テレビ宣伝などの支払いが大きい」
「原価は安いので支払いは少ない」
「派手にしなければいくらでもやっていけたのに」
仁美は、黙って聞いていた。霧島からの電話だった。霧島は、ルイハシ研究所に、誰かを潜り込ませている。
霧島は、仁美が仕掛けたことを知らないようだ。知るとメンドーになる。
丸石半二郎や霧島芳郎は、何を考えているのだろう。ルイハシ研究所の経営権が欲しかったのだろう。これもよろいなのか。丸石半二郎のよろいなのか。
霧島が仁美に電話をしてくることは、もうないだろうと思った。仁美が、風間に電話することもなくなった。大阪の化粧品の会社も、ルイハシ研究所が消えてしまえば、怒りの持って行き先がない。銀座に本社のある大手の化粧

品会社と橋本九朗も、ある意味では、脅威がなくなった。ルイハシ研究所は、竜巻のようだった。すぐに竜巻は消える。しかし、存在した証は大きいし被害も大きい。リンメイや仁美にとっても、大きな被害だった。危うかった。

○ルイハシ研究所のよろい

10月１日になった。銀行取引停止になったルイハシ研究所のニュースが流れている。ルイハシ研究所の銀座のお店と本社がテレビに何度も出てくる。静かである。ルイハシ研究所は崩壊した。

「ルイハシ研究所が崩壊した理由は、たった１つしかありません。あなたと仁美さんが、自分を無にして、船渡二郎と土肥雨霧と戦ったからではありません。ルイハシ研究所は、自らの見えざる悪魔が１人歩きをして、ルイハシ研究所のよろいを着てしまい、そのよろいを守るために、やってはいけないことに手を出してしまったのです。ルイハシ研究所だけではなく、集団が滅びる原因は、１つしかありません。自らの集団に巣食った見えざる悪魔によって、自ら滅びます。それは、必ず、よろいの論理を通過します。大昔のローマの時代も、蒙古の時代も、中国の時代も、ナポレオンの時代も、大英帝国の時代も、何も変わりません。理由は、１つしかありません。よろいというカタチに囚われなくて、人民の人民のためのまつりごとをやったとすれば、よろいがない集団であったなら、滅びることはなかったのです。例外はありません。国家は集団ですが、会社だって集団ですから、論理は同じです。いままでにも、多くの会社が崩壊してなくなりました。理由は１つしかありません。自らの会社の中に巣食った見えざる悪魔のよろいの論理のためです。成功して、それにふさわしいよろいを着ようとした時、崩壊がはじまるのです。ルイハシ研究所は、その典型なのです。もし船渡二郎が、成功者を夢見なかったら、女性がキレイになることに生きがいを感じる人であったら、ルイハシ研究所に、見えざる悪魔をはびこらせはしなかったでしょう。よろいも着なかったでしょう。ですから、リンメイが言っているように、リンメイと仁美さんの戦いが、ルイハシ研究所を崩壊させたわけではありませ

ん。リンメイが、このことで暗い気持ちになる必要は、まったくありません」

〇先里幹夫からの手紙

今日もネギ納豆ごはんを食べようとしているテーブルの上に、プリントして置かれていた文章を読んだ。
「お待ちどうさま」
リンメイは、干物を焼いていた。
「これはリンメイが書いたのか」
「先里幹夫さんのメール」
「リンメイは先里さんに相談しているのか」
「ブッダのようでいいのかって聞いたらそれでいいと言った」
「読んだ？」
「わたしは恨みでやったわけでもないから」
「守っただけ」
「いただきます」
リンメイは、ごはんを食べはじめた。どういうわけか、ここのところ、朝早く起きてネギ納豆ごはんをつくっている。
「リンメイはルイハシ研究所が崩壊したことを相談したのか」
「ルイハシ研究所と戦ったわけではないから」
「この先里さんの言ってることが正しいかもしれない」
「そう思う」
「時間の問題だったのかもしれない」

「土肥雨霧のよろいは、人個人のよろいです。日の出の勢いのルイハシ研究所と土肥雨霧という、個人のよろいがぶつかった時、人個人のよろいは、後で考えると、理解のできないくらいに、大きなよろいとなります。土肥雨霧のよろいは、ここ１カ月くらいで、ガリバーのようにおおきくなっていたのだと思います。ジャマになれば踏み潰すのです。自分の大きなよろいを守るためです。船渡二郎のよろいも同じように、よろいだけが大きくなりまし

た。人に例外はありません。個人的に成功して大きなよろいを着てしまったならば、そのよろいを守るために、あってはならないことに手を出してしまうのです。この着てしまってからのよろいの論理は、集団も個人も、変わりがありません。そして、人個人も、集団と同じように、崩壊するのです。人が、人間として素晴らしいかどうかは、よろいを見ればわかります。リンメイは、私を、ブッダのようでいいのですかと言ってくれますが、それは、私が、リンメイの幸せだけを望んでいていいのかと聞いているのだと思います。よろいがゼロだとこうなります。できうれば、そういう人生を目指してほしいと願っています。自分のことは後に回せる人です」

すき焼きをたべようと思った。２人で、周りを見回すこともしないで、スーパーマーケットで買物をして帰った。
「わたしよくわかんないからお願い」
テーブルの上に、また、プリントが１枚置いてあった。仁美は、すき焼き鍋が温まるまで、その、先里からのメールを読んでいた。

『ルイハシのよろい』

２０１１年

２０１８年

げんじあきら

『壊れるよろい』『脱げないよろい』『よろいってなんだ』『まゆ』を読んでいただきたい。
『まゆ』『こころの色』『なみだってなんだ』を読んでいただきたい。

『人と集団を滅ぼすもの』を読んでいただきたい。

ルイハシのよろい

著者　　　げんじあきら